



社団法人癌研究會趣旨

近時ニ於ケル自然科學ノ進運ハ頗ル著シキモノアリ、從ツテ其基礎ノ上ニ立テル醫學ニ在リテモ研究益々精ヲ加ヘ概ヲ極ムルニ至レリ、茲ニ於テカ從來ノ醫學の研究ガ多ク分科のニシテ、同一疾病ノ調査ニ當リテモ各自専門的の見知ヨリ互ニ相離レテ其作業ニ從ヒ各方面ノ多數學者ガ提携シテ協同研究スルガ如キハ頗ル稀ナリシニ反シ現代ニ於ケル學界ノ進運ハ此從來ノ研究ガ方法ト共ニ共同的研究ノ緒モ亦自ラ開カル、ヲ見ルニ到レリ痛ノ協同的研究ノ如キ其一例ナリ。

古來宇内ノ隨所ニ見ラレ甚ダ酸鼻ナル難治ノ疾患タル痛ハ統計ニ徴スルニ之ガ爲メニ命ヲ致スモノ年々其數ヲ増加スルノ傾アリ、サレバ泰西ノ研究家ハ久シキ以前ヨリ其疾患ノ本態ヲ究メント企圖シ國家並ニ社會モ亦之ヲ獎勵シ其研究ニ向テ多大ナル援助ヲ與フルノ例甚ダ夥ナカラザルナリ、然モ未ダ尙其真相ヲ捉フルコトヲ得ザルハ痛恨之ニ過ギズト謂フベシ、抑モ痛ナル疾患ハ内科、外科、其他各方面ノ臨牀醫學科ニ於テ扱ハレ其研究ハ解剖組織學の事項ノ外化學の並ニ生物學の事項ニ互リ甚ダ廣汎ナル領域ヲ占ムルハ既ニ知ラル所ナリ故ニ歐米諸國ニ於テハ夙ニ痛ノ如キ大問題ハ學者ノ孤立的研究ヲ以テハ到底其本態ヲ闡明スル期ナキモノナルコトヲ悟リ各方面ノ學者相倚リテ

其協同研究ヲ遂ゲシメントテ企テ特ニ癌研究會又ハ癌調査會ナルモノヲ設ケ完備セル研究設備ノ下ニ上記各方面ノ研索ヲ分擔セシメントシテ研究ノ歩武ヲ進メ來リシガ更ニ數年前主トシテ獨逸國學者ノ主唱ニヨリ國際癌研究協會開設セラレ爾來各國ノ研究團體互ニ聯絡ヲ保チ之ガ研究ヲ進メントスルニ至リ我邦學者ニ向テモ先年斯ノ如キ意味ヲ以テ此國際的共同研究ニ加盟センコトヲ慫慂シ來レリ、蓋シ我邦ノ如キハ歐米各國ニ比シ風土並ニ生活、慣習、體質等ニ著シキ差異アルヲ以テ本邦研究者ノ之レニ加リテ此研究ヲ積ムノミニテモ或ハ比較研究上望外ノ結果ヲ齎シ貢獻スルコト夥カラザルベク且ツ我國ニ於テモ年々本病ノ爲メニ鬼籍ニ登ルモノ數萬ヲ下ラザルガ故ニ國家的ニモ亦其研究ハ忽諸ニ附スルコト能ハザルモノアリ、サレバ本邦ニ於テモ上記世界ニ於ケル現代醫學ノ趨勢ニ順ビ又一面人類ノ福祉ヲ増進セシメンガ爲メニ特ニ國際的性質ヲ有スル癌研究會ヲ設立シ、特殊ノ設備ヲ有スル研究所ヲ附屬シ癌研究ノ中央機關タラシメ、又同時ニ治療所ヲ設立シ最新ノ研究結果ヲ應用實驗スルハ實ニ國際の時運ノ風潮ニ鑑ミ科學近時ノ發達ヲ移シテ人類ノ幸福ヲ増進スル上ニ於テ刻下ノ緊要ナル事業タルヤ明ナリ、之本會ノ設立ヲ企テ國際癌研究會ニ加盟シタル理由ナリ。

癌 第十八年 第一冊 目次

原 著

鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル

移植ニ就テ 白井 珍三郎……二

脈絡叢腫瘍ノ一例 醫學士 岡部 養逸……三

腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

佐野 繁……六

鯛 (Pagrus major) 竝ニ比目魚 (Paralichthys

olivaceus) ノ腫瘍ニ就テ 風間 美顯……五

癌腫ノX線治療成績(報告第二)

醫學士 山川 保城……七

抄 録……………五

實驗的癌形成ノ際ニ於ケル結構組織ノ關係
てゐる癌ノ發生原因

Bierich

實驗的てゐる癌發生點ニ關スル組織的檢索

Möller

實驗的てゐる癌ニ就テ

Bierich

家鷄肝臟ニ混合上皮ヲ有スル囊胞ノ發生ニ就テ

Schümann

冷血動物ニ混合上皮ヲ有スル囊胞ノ發生ニ就テ

Schümann

試驗成績

Bierich

腎結石ニ續發セル原發性扁平上皮細胞癌

Werla

まうすニ於ケル腎及副腎ニ原發セル自然腫瘍殊ニ其頻度

Slye

及遺傳ニ關スル研究

Slye

人類癌腫遺傳ノ生物學的證據まうす癌例ト遺傳ノ研究

Slye

ハイデルベルグ瓦斯工場產てゐる中癌發生上有效ナル成

Teuschlaender

分證明ニ關スル最終ノ實驗成績

Teuschlaender

雜 報……………八

理事會

評議員囑託

名譽會員推薦

第十七回定期總會及第十六回學術集談會開會ノ件

大正十二年庶務會計報告

西服林林磯稻磐井入今森鹽稻佐高木細長土本澁
山部金春村垣瀨澤村田田々木村野與肥澤
信太太郎豐次郎一助達繁開廣龍喜德又慶忠榮
光郎雄膳郎郎助吉三作重吉興寬衛順郎藏夫一

二福山草矢久字中中中鶴田吉吉金大緒岡岡遠本西仁
木士極保濱島田本井杉橋方田山田野
謙勝間野德野東德久禎清丑英新知和立雄忠
政三恒太一太萬次義三三五太菊三一椿五次
三一郎滋太郎朗郎郎吉郎德郎郎郎男郎郎卿吉郎郎直

森樋平平鹽鹽南宮三三北岸木佐佐佐阿青雨朝有近小
安口山井谷原川田浦里下藤藤藤久山宮倉賀藤林
連繁金政二又大米定之柴敬正恒次郎丸郎吉郎藏郎三文繁幹
吉次藏道雄策曹次則助郎郎中丸郎吉郎藏郎三文繁幹

究會事務所
電話 下谷九六〇番
振替口座東京三〇〇七一番

社團 癌 研究會 定款

明治四十一年四月設立
大正三年二月法人登記
大正三年十一月改正
大正六年四月改正
大正十一年四月改正

第一章 目的及事業

第一條 本會ハ癌ニ關スル研究及研究ノ獎勵ヲ爲スヲ以テ目的トス

トス

第二章 名 稱

第二條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ懸賞論文ヲ募集シ癌研究所 癌治療院ヲ設立シ又ハ學術集談會ヲ開催スル等ノ實行ヲ期ス

ヲ期ス

但懸賞論文、癌研究所、癌治療院、學術集談會等ニ關スル規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

但懸賞論文、癌研究所、癌治療院、學術集談會等ニ關スル規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第三章 事務所

第三條 本會ハ社團法人癌研究會ト稱ス

第四章 資 産

第四條 本會ハ事務所ヲ東京市本郷區本富士町貳番地ニ置ク

第五章 會 員

第五條 本會ノ資産ハ左ノ如シ

一、癌研究會ヨリ引繼キタル資金

二、寄附金

三、會員ノ會費

四、前項以外ノ諸收入金

第六條 本會ハ前條資産ノ一部ヲ基本金トナスコトヲ得

第七條 基本金ハ評議員會ノ決議ヲ經ルニ非サレハ處分スルコトヲ得ス

トヲ得ス

第八條 本會ノ資産ハ有價證券ヲ買入レ又ハ郵便官署若クハ確

實ナル銀行ニ預ケ入レ之レヲ保管ス

但場合ニ由リテ評議員會ノ決議ヲ經テ不動産ヲ買ルルコトヲ得

第九條 本會收支ノ決算ハ翌年ノ定期總會ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第十條 本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ルモノトス

トス

第十一條 本會ノ目的ヲ賛成補助スルモノハ内外國人ヲ問ハス何人タリトモ會員タルコトヲ得

第十二條 本會員ヲ分チテ左ノ三種トス

第五章 會 員

一、名譽會員 一、特別會員 一、通常會員

會員ハ本會ニ於テ發行スル會報及報告書等ヲ無料ニテ受ケルコトヲ得

第十三條 名譽會員ハ學術上特ニ功績アルモノ又ハ特ニ本會ノ事業ヲ贊助スルモノ及壹千圓以上ヲ寄附シタルモノニ就キ評議員會ノ決議ヲ經テ會頭之ヲ推薦ス

第十四條 特別會員ハ會費トシテ一時二百圓以上ヲ納ムルモノトス

第十五條 通常會員ハ會費トシテ毎年金五圓ヲ前納スルモノトス

癌

第十八年第一冊

大正十三年三月刊行

原著

鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

慶應義塾大學醫學部病理細菌學教室

白井珍三郎

目次

第一章 緒言並ニ研究方針

第二章 研究材料及ビ移植試験方法

第三章 異種動物腦髓内ニ於ケル腫瘍ノ世代重疊試験及ビ其ノ陽性率ノ消長並ニ腫瘍ノ生物學的關係ノ變動

第一節 腦髓内ニ於ケル腫瘍ノ世代重疊試験及ビ其ノ陽性率ノ消長

第一項 まうすニ於ケル實驗成績

第二項 家兎ニ於ケル實驗成績

第三項 もるもつニ於ケル實驗成績

第四項 鳩ニ於ケル實驗成績

第五項 猿ニ於ケル實驗成績

第二節 腦髓内移植世代重疊ニヨル移植腫瘍ノ生物學的關係ノ變動

第四章 鳩ノ腦髓内ニ於テ重ナル各世代ノ移植

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

ス

第十六條 會員タラント欲スルモノハ其氏名現住所ヲ記シ本會

事務所ニ申込ムヘシ

第十七條 退會セント欲スルモノハ其旨本會事務所ニ届出ツヘ

第六章 役員

第十八條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

總裁 一名

副總裁 一名

會頭 一名

副會頭 一名

理事 七名(內理事長一名)

監事 二名

評議員 若干名

第十九條 本會ハ皇族ヲ推戴シテ總裁トス

副總裁ハ評議員會ノ決議ニ由リ之ヲ推戴ス

會頭、副會頭ハ會員中ヨリ總會ニ於テ之ヲ選舉ス

理事長、理事、監事、評議員ハ會頭ノ推薦ニ由リ總裁之ヲ

囑託ス、但監事ハ他ノ役員ヲ兼スルコトヲ得ス

第二十條 會頭、副會頭、理事長、理事、監事、評議員ノ任期

ハ二箇年トス、但滿期再選又ハ再囑スルコトヲ得

第二十一條 會頭、副會頭、理事長、理事、監事及評議員ニ缺

員ヲ生シタルトキハ補缺選舉又ハ囑託ヲナスコトヲ得、補缺

員ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第二十二條 會頭ハ本會ヲ總理シ且總會、評議員會ノ議長トナ

ル

副會頭ハ會頭ヲ輔佐シ會頭事故アルトキハ之ヲ代理ス

第二十三條 評議員ハ本會概要ノ事項ヲ評議ス

第二十四條 理事長ハ本會一切ノ會務ヲ處理ス

理事長事故アルトキハ他ノ理事代テ其職務ヲ行フ

第七章 會議

第二十五條 總會、評議員會ハ東京ニ於テ之ヲ開ク、但時宜ニ

依リ變更スルコトヲ得

第二十六條 定期總會ハ毎年四月之ヲ開ク、但開會期ハ時宜ニ

依リ變更スルコトヲ得

第二十七條 總會ノ招集ハ會報又ハ新聞若クハ通知書ニ依ツテ

之ヲ行フ

第二十八條 總會ノ決議ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第二十九條 評議員ハ必要ニ應ジ會頭之ヲ招集ス

第八章 雜則

第三十條 本會ハ必要ニ應ジ支會ヲ設クルコトヲ得

支會ニ關スル規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第三十一條 本會ニ書記若干名ヲ置ク

書記ハ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務ニ従事ス

書記ハ會頭之ヲ任免ス

第三十二條 本會ニ企品ヲ寄附シタルモノアルトキハ其氏名ヲ

簿冊ニ登錄シテ永ク本會ニ保存ス

第三十三條 會誌「稻」ハ毎年五回之ヲ發行シ内一回ヲ歐文會

誌トス但シ歐文會誌ハ希望ニ依リ實費ヲ以テ配布シ、邦文會

誌ハ無料ヲ以テ會員ニ頒布ス

第三十四條 本定款ノ變更ハ總會ニ於テ出席會員三分ノ二以上

ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

明スルニ至ルヲ以テナリ。

從來成熟異種動物ニ於ケル腫瘍ノ移植ヲ試ミタル學者尠カラズ。Ehrlich 氏ノらって、まうす間ノ交代移植、Kewsser 氏ノ人體惡性腫瘍ノまうすニ於ケル移植、Hegner 氏ノまうす癌竝ニ肉腫ノらって、もるも、及ビ家兎ノ眼球内ニ於ケル移植試験、長與氏等ノ血清所置ニヨル移植試験及ビKlencke, Dag-onet, Werner, Rollin, Fischl 氏等ノ實驗アリ。サレド諸氏ノ實驗ニ於テハ未ダ完全ニ移植ニ成功セルモノナシ。

一九一六年、清野、川上兩氏ハ未分化ナル孵化鳥卵ヲ使用スルコトニヨリテ、異種動物ニ於ケル腫瘍ノ移植ニ成功セラレタリ

余ハ種族特異性ノ嚴存セル成熟異種動物ニ於ケル腫瘍ノ移植ハ之ヲ腦髓内ニ於テ試ムルコトニヨリテ必ズ成功スベキヲ確信セリ。余ガコノ確信ヲ事實ニヨリテ證明シタル實驗成績ノ一斑ハ、題シテ「鼠肉腫ノ成熟異種族動物ニ於ケル移植ニ就テ」トナシテ之ヲ慶應醫學第一卷第五號及ビ Japan Medical World, Vol. 1. No. 2, June 20, 1921 竝ニ「鼠肉腫ノ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ」トナシテ慶應醫學第一卷第八號及ビ Japan Medical World, Vol. 1. No. 6, Oct 15, 1921 ニ掲載シタリ。余ハ爾來審ニ事實ヲ觀察シ、次ノ三方針ニ隨ヒテ研究上ニ歩武ヲ進メタリ。

第一 異種動物ノ腦髓内ニ於テ幾世代迄移植ヲ重テ得ルヤ。前者ノ場合其ノ陽性率ノ消長如何。

第二 異種動物腦髓内移植及ビ腦髓内ニ於テ移植世代ヲ重ヌル時、必ズ起ルベキ腫瘍ノ生物學的關係ノ變動如何。

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

○白井・鼠肉腫ノ成然異種動物殊ニ成然鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

二

腫瘍ヨリ鳩ノ皮下竝ニ筋肉内ニ移植シ

タル組織片ノ運命

第六章 移植腫瘍ノ組織學の所見

第一節 腦髓内ニ移植シ増殖シタル腫瘍ノ一

般所見

第二節 皮下ニ移植シタル組織片ノ運命

第二章 筋肉内ニ移植シタル組織片ノ運命

第五節 移植腫瘍ノ肉眼的所見

第一節 腦髓内ニ移植シ増殖シタル腫瘍ノ一

般所見

第二節 鳩ノ腦髓内移植各世代ノ移植腫瘍ヨ

リ鳩ノ皮下竝ニ筋肉内ニ移植シ増殖

シタル腫瘍ノ一般所見

附 小口氏ト共同作業ニ係ル藤縄氏型鼠

肉腫ノ血清學の研究ノ概要

第七章 考案及ビ結論

文獻及ビ附圖説明

第一章 緒言並ニ研究方針

一八八九年 Hanaui 氏 始メテ鼠癌ヲ同種動物ニ移植スルコトニ成功セシヨリ實驗腫瘍學ハ漸次勃興

ノ域ニ際會セリ。サレド同種動物間ニ於ケル腫瘍ノ移植試験ノミニテハ腫瘍細胞ヲシテ無制限増殖ヲ

營マシムベキ最重要ナル素因ヲ窺知スル能ハズ。コノ不明ナル素因ノ真相ヲ解説スベク、同種動物間ニ

於ケル腫瘍ノ移植試験ハ一轉シテ異種動物間ニ於ケル腫瘍ノ移植試験トナレリ。蓋シ異種動物體内ニ

於テ當然異物トシテ機化吸收セラルベキ腫瘍組織片ヲシテ其ノ被移植動物ノ局所或ハ全身ノ反應ヲ惹

起スルコトナク、却テ其ノ動物ノ原發或ハ同種動物間ニ於テ移植ニヨリテ増殖セル腫瘍ト異ル所ナク

無限ニ發育増殖ヲ遂ゲシムルコトヲ得バ、其ノ無制限増殖ヲ促進スベキ素因ノ少クトモ其ノ一部ヲ闡

但シ第十二代迄移植世代ヲ重テ研究作業ノ都合上實驗ヲ中止セリ。

發育ハ白鼠腦髓内移植ニヨルモノニ比シテ多小緩慢ナレドモ白鼠ノ他ノ内臓器内ニ移植セルモノニ於ケルヨリモ迅速ニシテ、移植後第七日ニ於テ小豆大、第十三日ニ至リテ大豆大ニ達セルモノアリ。而シテ移植後凡ソ第七、八日ニ至リテ急速ニ衰弱シ、二週日ヲ經過シ得ルモノ少ナシ。

第二項 家兔ニ於ケル實驗成績

家兔腦髓内ニ於テ腫瘍ノ世代重疊ニヨル陽性率ノ消長ハ第二表ニ示スガ如ク、移植世代ノ累加ニ隨ヒテ其ノ陽性率ハ漸次上昇ス。但シ第七代迄移植世代ヲ重テ研究作業ノ都合上實驗ヲ中止セリ。

發育ハまうす腦髓内移植ニ依ルモノニ比シテ緩慢ナレドモ、移植後第十一日ニ於テ小腦上蟲中央部ニ於テ其ノ殆ド全部ガ腫瘍組織ニヨリテ占領セラレタルモノアリ。第十五日ニ於テハ何レモ大豆大ニ達シタリ。第二十七日ニ於テ生存シ得タルモノ、ウチニハ、小腦ノ殆全部ガ腫瘍ニヨリテ占領セラレ左右半月葉ニ相當セル部ニ於テ小腦ハ唯菲薄ノ層トシテ殘存シコレヲ透シテ明ニ腫瘍ヲ看取シ得タルモノアリ。而シテ移植後凡ソ第十一、二日ニ至リテ徐々ニ衰弱シ、多クノモノハ第三週日前後ニ斃死シ、四週日ヲ經過シ得ルモノ少シ。

第三項 もるも、ごニ於ケル實驗成績

もるも、ご腦髓内ニ於ケル腫瘍ノ移植試験ハ全部陰性ニ終リタリ。其ノ移植試験成績ハ第三表ニ示スガ如シ。

第四項 鳩ニ於ケル實驗成績

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物株ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

四

第三 鳩ノ腦髓内ニ於テ重ヌル各世代ノ移植腫瘍ヨリ、鳩ノ皮下竝ニ筋肉内ニ移植シタル組織片ノ運命如何。

コレナリ。

第二章 研究材料及ヒ移植試験方法

研究材料 移植ニ供シタル腫瘍種ハ藤繩氏型鼠肉腫ナリ。

移植試験方法 腫瘍ヲ無菌的ニ剔出シテ粟粒大ニ截切シ、嚴密ナル注意ノ下ニまうす、家兎、もるも、どノ(大小兩腦ノ接著部ニ相當セル)頭蓋骨部位、竝ニ鳩ノ大腦左半球、猿ノ大腦右半球ノ略中央ニ相當セル頭蓋部位ニ穿テル小孔ヲ經テ細小ナル套管針ヲ用ヒテまうす、家兎、もるも、どノ腦實質内、鳩ニ於テハ約三乃至五耗、猿ニ於テハ約一極深部ノ腦實質内ニ移植セリ。

第三章 異種動物腦髓内ニ於ケル腫瘍ノ世代重疊試験及ヒ其ノ陽性率ノ消長竝ニ腫瘍ノ生物學的關係ノ變動

藤繩氏型鼠肉腫ノ異種動物腦髓内移植試験ヲ行フニ當リ、對照トシテ各同一動物ノ皮下ニ移植セリ。其ノ成績ハ各例ヲ通ジテ全然陰性ニ終リタリ。

第一節 腦髓内ニ於ケル腫瘍ノ世代重疊試験及ヒ其ノ陽性率ノ消長

第一項 まうすニ於ケル實驗成績

まうす腦髓内ニ於テ腫瘍ノ世代重疊ニヨル陽性率ノ消長ハ第一表ニ示スガ如ク、移植世代ノ累加ニヨリテ其ノ陽性率ニ影響ヲ及ボサズ。

リ。

發育ハ表中ニ明記セルヲ以テコノ説明ヲ省略ス。

第二節 腦髓内移植世代重疊ニヨル移植腫瘍ノ生物學的關係ノ變動

藤繩氏型鼠肉腫ハ本來定型性紡錘形細胞肉腫ノ像ヲ呈シタルモノナレドモ同種動物ノ皮下ニ於テ移植世代ヲ重ヌルニ從ヒテ紡錘形細胞ハ漸次減少シ遂ニ多形性細胞肉腫ノ組織像ヲ呈スルニ至リシモノニシテ、余ガ本實驗ノ初ニ於テモ多形性ノ像ヲ呈シ居タリ。サレド猿ヲ除キタル上記各異種動物腦髓内ニ移植シ、腦髓ニ於テ移植世代ヲ重ヌルニ隨ヒテ多形性ヲ保ツコトアレド細胞ノ大多數ガ著シク圓形或ハ紡錘形ニ其ノ形態ヲ變ズルコトアリ。其ノ強弱ノ程度ハ動物ノ種族ヲ異ニスルコトニヨリテ差別アルコトナシ。サレド各世代毎ニ移動シテ一定セズ。猿ニ於テハ各世代ニ於テ常ニ多形性ヲ保テリ。

第四章 鳩ノ腦髓内ニ於テ重ヌル各世代ノ移植腫瘍ヨリ鳩ノ皮下竝ニ筋肉

内ニ移植シタル組織片ノ運命

異種動物ニ於ケル腫瘍ノ移植試験ニ於テ常ニ陰性成績ニ終ルベキ普通移植地タル皮下竝ニ最近余ガ實驗シテ移植成績陰性ニ終リタル鳩ノ筋肉内ニ、其ノ動物ノ特殊臓器タル腦髓ニ於テノミ移植シ増殖セシメ得タル異種動物腫瘍組織片ヲ移植シテ其ノ運命ヲ究ムコトハ生物學上重要ナル事項ニシテ興趣多シ。而シテ其ノ實驗成績ハまうす、家兎、猿ノ皮下ニ於テハ移植成績陰性ニ終リタリ。サレド鳩ノ皮下竝ニ筋肉内ニ於テハ確實ニ陽性成績ヲ得タリ。但シまうす、家兎、猿ニ於テハ筋肉内移植試験

鳩腦髓内ニ於テ腫瘍ノ世代重疊ニヨル陽性率ノ消長ハ第四表ニ示スガ如ク數字上ニ於テハ移植世代ノ累加ニヨリテ陽性率ニ影響ナシ。

第十代以下ニ於テハ用ヒタル動物數少ナキガ爲メ其ノ陽性率ノ消長ヲ知ルコト困難ナリ。

サレド其ノ發育ガ益々旺盛トナル點ヨリ推察シテ陽性率ハ漸次上昇スルヲ想ハシム。但シ第三十八代迄移植世代ヲ重テ止テ得ザル事情ノ爲實驗ヲ中止セリ。

發育ハ家兔腦髓内移植ニ於ケルモノニ比シテ迅速ナリ。移植後第六日ニ於テハ小豆大、第十七、八日ニ於テ多クノモノハ食指頭大ニ達ス。サレド腫瘍ノ發育最旺盛ニシテ移植後第三十日前後ニ於テ猶生存シ得タルモノ、ウチニハ、左側大腦半球ノ殆全部ガ腫瘍ニヨリテ占領セラレ大腦皮質ハ唯菲薄ノ層トシテ殘存セルモノ少カラズ。動物ハ移植後第十四日頃ニ至リテ漸次ニ蹣跚スルガ如キ姿勢ヲ取り歩行ヲ好マズ、頸部ヲ縮メテ殆ド常ニ俯ク。此等ノ症狀ハ日ヲ經ルニ從ヒ益々著明トナリ多クハ眼ヲ閉ヅ。

第五項 猿ニ於ケル實驗成績

移植ニ供シタル猿ハ其ノ數甚僅少ナリ。加之移植後二日乃至三日ニ於テ斃死セルモノアリテ各世代ニ於ケル陽性率ヲ定ムルコト能ハズ。サレド發育日數ト發育程度トヲ比較對照スルニ移植世代ノ累加ニ隨ヒテ腫瘍ノ増殖力漸次旺盛ニ傾キツ、アルヲ以テ爾後ニ於ケル陽性率ハ少クモ低下スルコトナキヲ想ハシム。

其ノ實驗成績ハ第五表ニ示スガ如シ。但シ第三代迄移植世代ヲ重テ研究作業ノ都合上實驗ヲ中止セ

テ其ノ成績ニ影響ヲ及ボサズ。

發育ハ皮下ニ移植セルモノニ於ケルヨリモ迅速ニシテ移植後第十九乃至第二十日ニ於テ鳩卵大ニ達セルモノ八例アリ。

第五章 移植腫瘍ノ肉眼の所見

第一節 腦髓内ニ移植シ増殖シタル腫瘍ノ一般所見

第一 まうすニ於ケル所見 腫瘍ハ多ク小腦内ニ於テノミ球形乃至橢圓形ヲ呈シテ増殖シ、周圍組織ト銳利ニ區劃セラレ恰モ擴大性ノ増殖ヲ營ミタルガ如キ觀ヲ呈ス。發育ノ甚シキモノニアリテハ、小腦ハ僅ニ一小部分ヲ殘スノミニシテ大部分ハ腫瘍組織ニヨリテ置換セラレタルモノアリ。但シ大腦内ニ侵入發育セル部分ハ、白鼠ノ腦髓内移植ニ於ケルト同ジク往々境界ノ不明ナルモノアリ。何レノ場合ニ於テモ、移植後第七日ニ於テ腫瘍組織ハ頭蓋骨穿孔ヲ經テ涌出セルガ如キ觀ヲ呈シツ、皮下ニ向ツテ増殖シ、麻實大乃至小豆大ニ達ス。各實驗例ヲ通ジテ増殖腫瘍ニ壞死竈ヲ形成セルモノナシ。

第二 家兔ニ於ケル所見 家兔ニアリテハ其ノ肉眼の所見まうすト多少異ナリ、腫瘍ハ寧浸潤性ト稱スベキ増殖態度ヲ示シ、顯著ノ境界ヲ劃スルモノ少ナシ、且まうすニ於テ認ムルト異ナリテ頭蓋骨穿孔ヲ經テ涌出増殖セルモノ一モナシ。但シ増殖腫瘍ニ壞死竈ヲ形成セルモノナキコトまうすニ於ケルト同ジ。

第三 鳩ニ於ケル所見 鳩ニ於テハ腫瘍ハ略球形乃至橢圓形ヲ呈シ、境界全ク不明ニシテ増殖ノ浸潤性ナルヲ想ハシム。多數ノ例ニ於テハまうす、家兔ニ於テ認ムルト異ナリテ其ノ中心部ニ壞死竈ヲ

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物株ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ
ヲ行ハズ。

八

第一節 皮下ニ移植シタル組織片ノ運命

鳩ノ腦髓内各世代ノ移植腫瘍ヨリ鳩ノ皮下ニ移植シタル實驗成績ハ腦髓内移植世代ヲ重ヌルニ隨ヒ各世代ノ移植腫瘍ヨリ皮下、及ビ皮下ヨリ皮下ヘノ移植能率ハ減少ス。コノ現象ハ同一實驗ヲ五回反復スルモ變ルコトナシ。

第六表ハ實驗中ノ一ヲ繼續シテ得タル實驗成績ニシテ腦髓内移植第一代、第二代、第三代、第四代、第九代、第十代、第十八代、第十九代ニ於ケル移植腫瘍ヨリ鳩ノ皮下ニ移植シタル場合ニ於テノ移植成績陽性ニシテ他ハ悉ク陰性ニ終リタリ。

發育ハ腦髓内移植第一代ヨリ皮下ニ移植セルモノ最佳良ニシテ、皮下ニ於ケル移植世代ノ累加ニ隨ヒテ其ノ増殖力益々旺盛トナリ。皮下移植第十四代ニ至リテ其ノ極點ニ達シ大サ鳩卵大ニ達シ遂ニ動物ハ斃死スルニ至リシモノアリ。而シテ第十五代ヨリ漸次増殖力衰ヘ、第二十二代ニ至リ全ク吸收セラル、運命ヲ辿レリ。他ノ腦髓内移植世代ヨリ皮下ニ移植シ陽性成績ヲ得タルモノ、發育ハ樞實大乃至梅實核大ナリ。

第二節 筋肉内ニ移植シタル組織片ノ運命

鳩ノ筋肉内移植試驗ハ鳩腦髓内移植第十四代ヨリ開始シ、各筋肉内ニ於テ研究作業ノ都合上第三代迄移植世代ヲ重テ實驗ヲ中止セリ。

其ノ成績ハ第七表ニ示スガ如ク腦髓内移植各世代ヲ通ジテ陽性ニシテ腦髓内移植世代ノ累加ニヨリ

ツテ甚シク浸潤性増殖ヲ營ミ境界全ク不明ナリ。

第六章 移植腫瘍ノ組織學的所見

第一節 腦髓内ニ移植シ増殖シタル腫瘍ノ一般所見

猿ニ於テ増殖シタル腫瘍ハ各世代ヲ通ジテ鼠肉腫ト組織像全ク相同ジ。サレドまうす、家兎、鳩ニ於テハ其ノ組織内ニ甚シク圓形或ハ紡錘形細胞ヲ混淆シ來ル。但シ其ノ強弱ノ程度ハ各世代毎ニ移動シテ一定セズ。其ノ増殖態度ハ全ク浸潤性ニシテまうす、家兎、猿ニ於テハ主トシテ血管周圍腔ニ沿ヒテ増殖ス。

鳩ニ於テハ全ク血管周圍腔ニ沿ヒテノミ増殖シ、血管腔内ニハ有核赤血球及ビ少數ノ白血球アリテ之ヲ充タセリ。周圍組織ニ於ケル所謂間質反應、即チぐりあ細胞ノ増生、毛細血管ノ新生ナキコト、及ビ鳩腦髓内移植第九代ノ一例ニ於テノミ僅ニ淋巴球ノ集簇ヲ認メタルノミニテ他ニ全ク之ヲ缺クコトハ著シク注意ヲ牽ク。

第二節 鳩ノ腦髓内移植各世代ノ移植腫瘍ヨリ鳩ノ皮下竝ニ筋肉内ニ移植シ増殖シタル腫瘍ノ一般所見

第一 皮下ニ於ケル増殖腫瘍ノ所見 鳩ノ皮下ニ於テ移植世代ヲ重テラレタル肉腫ノ組織學的特長ハ、其ノ構成ノ細胞ガ比較的圓形ニシテ皮下ニ於ケルヨリモ盛ニ筋纖維間ニ侵入シ筋纖維ヲ壓排シ之ヲ萎縮消滅セシメツ、旺盛ナル發育ヲ遂グルコト、及ビ皮下ニ於テハ筋肉内ニ於ケルヨリモ淋巴球竝ニ白血球ノ浸潤所ニヨリテ甚シク高度ナルコトニシテ、腦髓内移植ニ於ケルモノト相對照シ注目ニ値

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

藏セリ。竈ノ大サ約粟粒大乃至黍粒大ニシテ竈ニ密接シテ點狀乃至線狀ノ壞死竈數個ヲ散見ス。發育最佳良ナルモノニ於テハ、腫瘍増殖ノ爲メ頭蓋骨縫合ハ離開セラレ其ノ裂隙ヨリシテ腫瘍組織ヲ見ルヲ得ルモノ多數ニ存ス、腫瘍ノ増殖セル腦半球實質ハ腫瘍ノ増殖シテ露出セル部ヲ圍ミテ僅ニ菲薄ノ層トシテ殘存ス。又腫瘍組織ガ廣キ範域ニ互リテ腦底ノ硬膜ト相癒著セルモノアリ。腫瘍組織ガ頭蓋骨穿孔ヲ經テ涌出セルガ如キ觀ヲ呈シツ、皮下ニ向ツテ増殖セルモノ多數ニ存在スル點ニ於テミ、うすニ於ケル所見ト相同ジ。

第四 猿ニ於ケル所見 猿ニ於テハ其ノ増殖態度ノ浸潤性ナル點ニ於テ家兔竝ニ鳩ニ於ケル所見ト相同ジ、増殖腫瘍ニ壞死竈ヲ藏セルモノナク、且ツ腫瘍ノ頭蓋骨穿孔ヲ經テ涌出増殖セルモノナシ。

第二節

鳩ノ腦髓内移植各世代ノ移植腫瘍ヨリ鳩ノ皮下竝ニ筋肉内ニ移

植ジ増殖シタル腫瘍ノ一般所見

第一 皮下ニ於ケル増殖腫瘍ノ所見 腫瘍ハ各例ヲ通ジテ皮下ニ於テ略半球形ニ隆起ス。

コレヲ觸ル、ニ略球形乃至橢圓形ナリ。皮膚及ビ筋膜トハ密ニ癒著シ移動性ヲ缺ク。硬度一般ニ彈力性韌ナリ。局所ノ皮膚ニ於テハ些ノ性狀ノ變化ヲ認メズ。刀割ヲ加ヘテ其ノ斷面ヲ檢スルニ、平滑髓樣ニシテ淡紅色ヲ帶ブ。而シテ腫瘍ガ皮下ニ於ケルヨリモ筋肉内ニ向ツテ旺盛ナル發育ヲ遂ゲ境界全ク不明ニシテ其ノ増殖ノ浸潤性ナルコトハ注目ニ値ス。

第二 筋肉内ニ於ケル増殖腫瘍ノ所見 腫瘍ハ各例ヲ通ジテ皮下移植ニ於ケルモノト略其ノ外觀の所見相同ジ。但シ硬度稍軟ナリ。剖面ニ於ケル所見ハ平滑髓樣ニシテ淡紅色ヲ帶ビ、周圍筋組織ニ向

蓋シ Lewin 氏及ビ Kossel 氏ノ實驗例ニ於テ

氏ノ實驗例ニ於テ上皮性腫瘍ヲ移植シ其ノ細胞ノ化學的刺戟ガ

長時日周圍ノ結締組織細胞ニ加ハルコトニヨリテ肉腫ノ發生シタルコトアルヲ以テ、結締組織性腫瘍ヲ移植シタル場合ニ於テハ其ノ細胞ノ長時日ニ互ル化學的刺戟ガ其ノ周圍ノ結締組織細胞ニ加ハリテ肉腫ノ發生スルコトアルハ當然考ヘラルベキコトナレバナリ。

(ハ)一程度迄増殖シテ漸次吸收セラル、移植腫瘍ハ、移植後直ニ機化吸收セラル、モノニ於ケルヨリモ腫瘍ノ素因要約ノ研究ト相俟チテ興趣多シ。サレドコレ眞ニ移植陽性ナリト稱スルヲ得ズ。

蓋シ無限ニ増殖ヲ營ムコトガ腫瘍ノ特性ノ一ナレバナリ。サレバ眞ニ移植陽性ナリト稱スベキ腫瘍ハ無限ノ増殖ヲ營ムヲ要ス。

(ニ)同種動物ニ於ケル腫瘍ノ移植試驗ニ於テハ、移植世代ノ累加ニ隨ヒ其ノ移植腫瘍組織ガ被移植動物體內ニ於テ増殖ニ對スル適應性ヲ益々馴致スルモノナレバ、異種動物ニ於テ腫瘍ノ移植ガ眞ニ陽性成績トシテ認メラル、ニハ世代ノ累加ニ隨ヒテ其ノ増殖力ノ衰ヘザルヲ要ス。

(三)余ノ鼠肉腫ノ成熟異種動物ニ於ケル移植ガ眞ニ陽性成績ヲ得タル理由

(イ)腫瘍ハ移植部ニ於テ増殖セリ。

(ロ)移植腫瘍細胞ガ其ノ周圍組織ニ對スル態度ハ其ノ増殖、最初期ヨリ全ク浸潤性ニシテ主ニ血管周圍腔ニ沿ヒテ増殖シ、周圍組織ニ於テハ全ク間質反應ヲ缺ク。サレバ増殖シ新生シタル腫瘍ハ全ク移植シタル腫瘍組織片ノ増殖ニヨルモノニシテ移植シタル腫瘍組織片ノ化學的刺戟ニ

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

ス。

第二 筋肉内ニ於ケル増殖腫瘍ノ所見 筋肉内ニ於テ移植世代ヲ重テラレタル肉腫ノ組織學の所見ハ、皮下ニ於ケル移植腫瘍ガ筋肉内ニ向ツテ増殖シタルモノニ於ケルト全ク同ジ。

附 小口氏ト共同作業ニ係ル藤縄氏型鼠肉腫ノ血清學的研究ノ概要

小口氏ト共同作業シテ學ビ得タル所ニヨレバ、鳩ノ腦髓内移植第二十八代ノ腫瘍組織ハ少クモ蛋白沈降反應ノ上ニ於テハ白鼠ニ於テ世代ヲ重テタル同種腫瘍組織ト何等異ル所ナシ。余ハ他ノ世代ニ於テモ亦タ恐ラク同様ナルベキヲ惟フ。

第七章 考案及ビ結論

(一) 哺乳動物タル白鼠ニ原發シ白鼠ニ於テ移植世代ノ重テラレタル肉腫ガ獨リ特殊臟器タル腦髓ヲ籍ルコトニヨリテノミ確實ニ之ヲ一般ノ哺乳動物ノミナラズ人類ニ近キ猿、竝ニ鳥類タル鳩ニ移植スルコトヲ得、更ニ鳩ノ腦髓内移植腫瘍ヨリ鳩ノ皮下及ビ筋肉内ニ移植シ得タル事實ハ肉腫ノ發生増殖ニ關シテ最重要ナル素因要約ヲ闡明スルニ向ツテ一光明ヲ投ジタリ。

(二) 異種動物ニ於ケル腫瘍ノ移植ガ陽性トシテ認メラルベキ諸要件

(イ) 腫瘍ハ移植部ニ於テ移植腫瘍組織片ノ増殖シタルモノナルヲ要ス。

(ロ) 移植地ニ於テ長時日(例ヘバ Koushiki 氏例ノ如キ)後發見シタル腫瘍ハ、假令移植腫瘍ト組織學的造構ニ於テ異ル所ナシト雖モ直ニ必ズコレガ移植腫瘍組織片ノ増殖シタルモノトシテ認ムル能ハズ。

第 一 表

	ま	う	す	
	移植數	陽性數	陰性數	陽性百分率
第一代	120	120	0	100%
第二代	3	3	0	100%
第三代	3	3	0	100%
第四代	3	3	0	100%
第五代	5	5	0	100%
第六代	3	3	0	100%
第七代	3	3	0	100%
第八代	3	3	0	100%
第九代	3	3	0	100%
第十代	3	3	0	100%
第十一代	3	3	0	100%
第十二代	3	3	0	100%
	中		止	

第 二 表

家		兎		
	移植數	陽性數	陰性數	陽性百分率
第一代	115	77	38	66.9%強
第二代	5	3	2	60%
第三代	5	5	0	100%
第四代	5	3	2	60%
第五代	5	4	1	80%
第六代	5	5	0	100%
第七代	5	4	1	80%
中		止		

第 三 表

と つ も る も				
	移植數	陽性數	陰性數	陽性百分率
第一實驗	7	0	7	0%
第二實驗	13	0	13	0%
第三實驗	10	0	10	0%

サレド筋肉内移植試験ニ於テハ鳩ノ腦髓内移植世代ノ累加ニヨリ其ノ成績ニ影響ヲ及ボス。以上ノ如キ相違セル結果ヲ生ジタルハ、腦髓内移植世代ヲ重テタルコトニヨリテ必然腫瘍自身ニ起リ得ベキ特殊ナル生物學的關係ノ變動ノミニヨルモノナリヤ、或ハ皮下及ビ筋肉内ガ其ノ特殊ナル生物學的關係以外ニ移植腫瘍ニ對シ個々ニ異ナル影響ヲ及ボス結果ナリヤ、或ハ兩者ニ由來スルヤ未ダ決定シ難シ。

欄筆ニ臨ミ恩師草間、川上兩教授ガ本實驗中不斷ノ懇篤ナル御指導並ニ本論文ノ御校閲ニ對シ滿腔感謝ノ意ヲ表ス。尙本研究ハ癌研究會ノ補助ヲ仰グコト甚大ナリ。記シテ以テ謹謝ス。

假ニ百分率ヲ以テ示ス

假ニ百分率ヲ以テ示ス

○白井。鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

一四

ヨリ周圍組織ガ肉腫性變化セシモノニアラザルハ明ナリ。

(六)第三章第一節ニ於テ記載シタルガ如ク各異種動物腦髓内ニ移植セル腫瘍ハ其ノ發育頗ル迅速ニシテ無限ニ増殖シ遂ニ其ノ動物ヲシテ斃死スルニ至ラシム。且世代重疊ニヨリテ腫瘍ノ増殖力ハ些ノ衰ヘタル例ナシ。

コノ諸條件ノ完備セルコトハ異種動物ニ於ケル腫瘍ノ移植ガ眞ニ陽性成績ヲ得タルコトヲ實驗スルモノナリ。

(ニ)余ガ小口氏ト共同作業シテ學ビ得タル鳩ノ腦髓内移植第二十八代ノ移植腫瘍組織ハ少クモ蛋白沈降反應ノ上ニ於テ世代ヲ重キタル同種動物腫瘍組織ト何等異ル所ナキ事實ハ、余ノ移植試驗ガ確實ニ陽性成績ヲ得タルコトヲ追證スルモノナリ。

(四)藤縄氏型鼠肉腫ハ其ノ發見當時ニ於テハ定型性紡錘形細胞肉腫ノ像ヲ呈シタルモ、移植世代ヲ重ヌルニ隨ヒテ紡錘形細胞ハ漸次減少シ遂ニ多形性細胞肉腫ノ像ヲ呈スルニ至リシモノナリ。サレド余ノ實驗ニヨレバ、現在我が教室ニ於ケル同肉腫ハ甚シク紡錘形ニ形態ヲ變ジ居レリ。

サレバ異種動物腦髓内ニ於ケル同肉腫ノ移植腫瘍ガ移植世代毎ニ細胞ノ大多數ガ圓形或ハ紡錘形ニ其ノ形態ヲ移動シテ一定セザルハ寧當然ト云フベキナリ。

(五)鳩ノ腦髓内ニ於テ移植世代ヲ重ヌルニ隨ヒ、各世代ノ移植腫瘍ヨリ鳩ノ皮下、及ビ皮下ヨリ皮下ヘノ移植能率ハ減少ス。

第六表

鳴門體內移植世代重疊線(藤澤氏和鼠肉腫)



鳴門體內移植各世代ノ移植履歴
鳴ノ皮下ニ移植シ於ケル世代重疊線

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物株ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

第 四 表

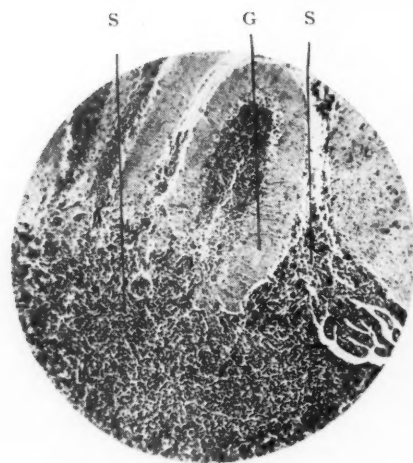
第 五 表

○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物株ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ
假ニ百分ヲ以テ示ス

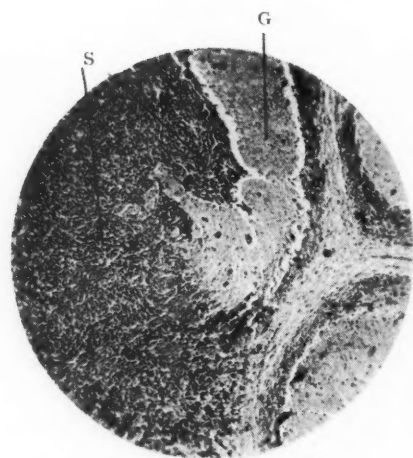
第三代	第二代	第一代	移植數	初死亡及生存數	陽性數	陰性數	發育日數	發育程度	陽性百分率ヲ定ムル能ハズ
2	2	2							
1 2	1 3	0							
1	1	1							
不明	不明	1							
42	18	23							
拇指頭大	大豆大	小豆大							

鳩					陽性百分率
	移植數	陽性數	陰性數		
第一代	95	76	19		80%
第二代	62	51	11		82.3%弱
第三代	45	34	11		75.6%弱
第四代	36	32	4		88.8%強
第五代	28	25	3		89.2%強
第六代	24	19	5		79.1%強
第七代	20	17	3		85%
第八代	15	13	2		86.6%強
第九代	13	11	2		84.6%強
第十代	10	7	3		70%
第十一代	7	3	4		42.8%強
第十二代	7	4	3		57.1%弱
第十三代	7	5	2		71.4%弱
第十四代	5	4	1		80%
第十五代	5	5	0		100%
第十六代	5	4	1		80%
第十七代	3	3	0		100%
第十八代	3	2	1		66.6%強
第十九代	4	2	2		50%
第二十代	5	4	1		80%
第二十一代	5	5	0		100%
第二十二代	3	3	0		100%
第二十三代	5	4	1		80%
第二十四代	3	2	1		66.6%強
第二十五代	3	3	0		100%
第二十六代	3	3	0		100%
第二十七代	3	1	2		33.3%弱
第二十八代	3	2	1		66.6%強
第二十九代	3	3	0		100%
第三十代	3	2	1		66.6%強
第三十一代	5	5	0		100%
第三十二代	5	3	2		60%
第三十三代	5	4	1		80%
第三十四代	5	5	0		100%
第三十五代	5	2	3		40%
第三十六代	5	4	1		80%
第三十七代	5	3	2		60%
第三十八代	5	4	1		80%
中 止					

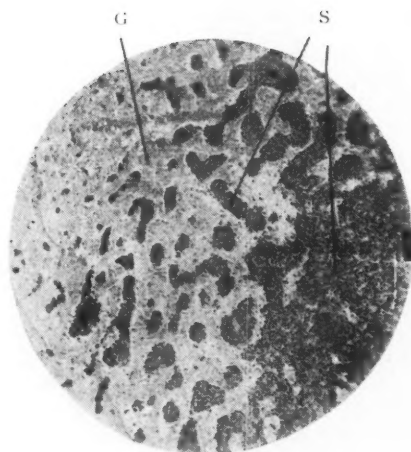
第一圖



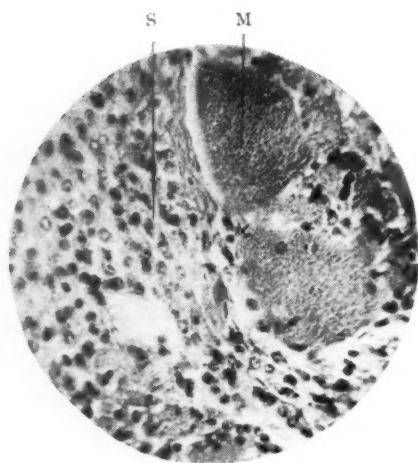
第二圖



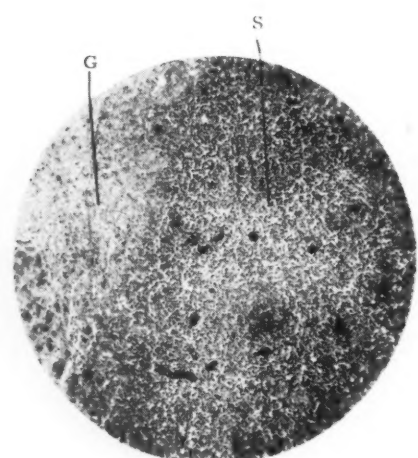
第三圖



第四圖



第五圖



(C. Shirai.)

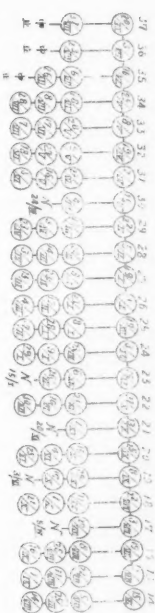
○白井・鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

第

七

表

鳩胸腔内移植世代重疊線(藤澤氏鼠肉腫)



鳩胸腔内移植(陰性)

鳩胸腔内移植各世代移植環境ヨリ鳩ノ筋肉内ニ移植シ、筋肉内ニ於ケル世代重疊線

文 獻

- 1) 長興, 和合, 癌腫ノ移植ニ關スル一ニツテ試驗, 癌, 第十五号, 第三册, 2) 山極, 鈴木, 村山, 肉腫ノ發生原因ニ關スル實驗的研究, 癌, 第十五号, 第一册, 3) 藤澤, 疾病ノ素因殊ニ腫瘍素因ニ就テ, 日新醫學, 第二年, 第八號, 4) 藤澤, 比較腫瘍學一併及腫瘍ノ實驗的研究, 殊ニ移植試驗就中我國ニテ發見セラレタル可移植性動物腫瘍ニ就テ, 日新醫學, 第五号, 第二號, 5) 藤澤, 鼠肉腫ノ移植増殖ニ關スル知見補遺, 京都醫學雜誌, 第十六卷, 第九號, 6) 清野, 川上, 嚢化島脚内ニ於ケル腫瘍移植ノ實驗的研究(第一回報告の豫報), 日新醫學, 第五号, 第十號, 7) 白井, 鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ, 腫瘍醫學, 第一卷, 第五號, 8) 白井, 鼠肉腫ノ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ, 腫瘍醫學, 第一卷, 第八號, 9) Fischl, Transplantation von menschlichen Melanomen auf die weiße Maus, Zeitschr. f. Krebsforsch., Bd. 18, 114/6, 1922, 10) Hegner, Über experimentelle Übertragung von Tumoren auf das Auge, Minch. med. Woch., No. 49, 1912, 11) Keysser, Weitere untersuchungen menschlicher maligner Geschwülste auf Mäuse, Arch. f. klin. chir., Bd. 114, 112, 1920, 12) Keysser, Weitere untersuchungen über experimentelle nach Einführung von menschlichen Carcinomen und Sarcomen entstandene Mäusegeschwülste, Arch. f. klin. chir., Bd. 117, 112, 1921, 13) Lewin, Die Entstehung histologisch neuartiger Tumoren bei der Transplantation und ihre Beziehungen zur Keimbahn, Zeitschr. f. Krebsforsch., Bd. 17, 113, 1920.

附圖說明 ツァイス顯微鏡寫眞

- 第一圖 まうす 腦髓内ニ於テ移植シ増殖セル肉腫組織S(肉腫組織)G(腦組織)(弱擴大)
- 第二圖 家兎 腦髓内ニ於テ移植シ増殖セル肉腫組織S(肉腫組織)G(腦組織)(弱擴大)
- 第三圖 鳩 腦髓内ニ於テ移植シ増殖セル肉腫組織S(肉腫組織)G(腦組織)(弱擴大)
- 第四圖 鳩 腦髓内ニ於テ移植シ増殖セル肉腫組織片ヲ鳩ノ筋肉内ニ移植シ増殖シタル肉腫組織(肉腫組織)M(筋組織)(強擴大)
- 第五圖 猿 腦髓内ニ於テ移植シ増殖セル肉腫組織S(肉腫組織)G(腦組織)(弱擴大)

○白井、鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ



腦 重量八六五瓦(腫瘍及ビ腦水ノ多少ヲ含ム)ニシテ、摘出ニ際シ、波動ヲ呈ス。腦廻轉ハ一般ニ扁平トナリ、溝ハ淺クナレリ。表面ハ一般ニ浮腫樣ヲ呈シ輕度ニ潤濁セリ。蜘蛛膜下血管ハ充血稍著シ。第三及ビ兩側腦室ハ透明ナル液ヲ容レ、極メテ強度ニ擴大シ、爲メニ腦質ハ菲薄トナリ、宛カモ液ヲ容レタル囊ノ如キ觀アリ。腦質ノ厚徑ヲ大腦水平横斷ニテ測定スルニ、左半球ニ於テ側腦室下角部ニテ二・〇乃至二・五浬、側腦室前角部ニテ一・〇浬、後角部ニテ一・六浬ヲ算スルニ過ギズ。而シテ右腦半球ニ於テモ殆ド左側ニ於ケルト同ジ。腦室内面ハ稍々充血シ、一般ニ輕度ノ潤濁ヲ呈セリ。

腫瘍 腫瘍ハ斯ノ如ク強度ニ擴大セル第三腦室及ビ左右腦室ニ在リ。即チ第三腦室中、左右兩モノイ氏孔ノ中間ニ固定シ、左右側腦室ニ向テ突出シ、紙薄ニ壓平セラレタル透明中隔板、穹窿柱及ビ穹窿體ノ兩側ニ互レリ。故ニ是等ノモノヲ以テ腫瘍ハ中央部ニ隔壁ヲ設ケラレタル觀アリ。而シテ腫瘍ノ基底ハ腫瘍自身ニ比シテ非常ニ小ニシテ、兩側腦室脈絡叢ニ連リ、腫瘍ハ腦室壁其他ト何等ノ連絡ナク、宛カモ腦室中ニ浮揚セルノ觀アリ。

腫瘍ノ大サハ略々小兒手拳大ニシテ前後徑ハ左側腦室ノモノ四・三浬、右側腦室ニ入レル部分三・八浬左右徑ハ兩者ヲ合シテ四・五浬ニシテ腫瘍ノ基底ヨリ最上部迄三・八浬ヲ算ス。腫瘍ノ表面ハ細微顆粒狀或ハ絨毛狀ヲ示シ、宛カモ花野菜ヲ見ルガ如シ。色ハ紅赤色ヲ呈シ、硬度稍々柔軟ナリ。

モノロイ氏孔ハ極度ニ擴大シ腓胝體ハ殆ド全長ニ互リテ上方ニ壓平セラレ膜樣ヲ呈ス。視神經牀モ強度ニ壓迫セラレ、尾狀體ハ腦室壁ヨリ多少隆起セリ。松果腺ハ後下方ニ壓迫セラレジルビー氏導水管及ビ第四腦室モ中等度ニ擴大セリ。

○岡部・脈絡叢腫瘍ノ一例

二二

一ヲ超ヘテ噴流ス。トナリ死ニ至ル迄高壓ヲ保テリ。腦脊髄液ハ透明ニシテノンチアツベルト反應著明ナル外特記スベキ點ナシ。十日頃ヨリ嗜眠狀態ヲ續ケ、食慾全ク無ク大顙門ハ益々緊張膨隆シ正中縫合哆開シ遂ニ小顙門ト連絡スルニ至ル。二週日頃ヨリ兩眼球內轉斜視ヲ呈シ、兩手ヲ各腕關節ニテ屈曲シ、右手ヲ絶ヘズ動かス。入院中一回ノ全身痙攣來ル。嘔吐ナシ。入院後十七日ニシテ遂ニ永眠ス。

臨牀的診斷 所謂腦膜炎。

二、剖檢記事摘記

大正十二年十月三十日午後三時解體（死後十時間ヲ經テ）著者執刀、解體番號三八九二

病理解剖的診斷（一）脈絡叢腫瘍、（二）内外腦水腫、（三）大腸淋巴濾胞腫脹、（四）臟器實質性變性。

一乳兒男性屍、身長七五釐、體重六九疋、骨骼中等大榮養稍不長、死後強直四肢關節ニ輕度ニ存ス。屍斑ハ瀰漫性ニ身體下垂部ニ在リ。外皮蒼白、乾燥セリ。皮下脂肪組織、筋肉ノ發育中等度ナリ。

內臟諸器官、腹膜腔及ビ肋膜腔ニ異狀ノ液ヲ見ズ。肺、左右共表面平滑、灰白色ニシテ一般ニ氣腫樣ヲ呈シ、剖面血液及ビ液含量僅少ナリ。限局性ノ病變ヲ觸レズ。心、外膜白色ニ潤濁セリ。內膜及ビ瓣裝置ニ異常ヲ認メズ。腎、皮質稍、潤濁シ腫脹セル外異常ナシ。肝、線小葉不分明ニシテ血液ニ富ム。大腸ノ孤在濾胞ガ多數粟粒大乃至小豆大ニ腫脹セルヲ見ル外、腸間膜淋巴腺、肺門淋巴腺、扁桃腺其他ノ淋巴腺ニ腫脹ナシ。

三、頭腔所見

頂蓋ヲ開キタルニ約五〇・〇〇珎ノ透明ナル漿液流出セリ。大顙門竝ビニ小顙門廣ク開キ、矢狀縫合ハ前額部ヨリ小顙門ニ至ル迄、冠處縫合ハ其大部分〇・二乃至〇・五釐ノ幅員哆開セリ。硬腦膜ハ一般ニ充血セルガ、殊ニ顙頂部ニ於テ著シク、此處ニハ大小幾多ノ出血點ヲ認ム。

ル骰子形乃至圓柱狀上皮細胞ヨリナリ、兩者ハ少許ノ結締組織ヲ以テ隔テラル、カ、或ハ兩者間ニ殆ド結締組織ヲ見ル事ナクシテ、上皮細胞ハ直チニ血管壁ニ接著セリ。血管ハ強度ニ擴大シ赤血球ヲ充シ、其口徑ハ大小不同ニシテ一定セズ。ワイゲルト氏彈力纖維染色法ニテ檢スルニ、彈力纖維可成豐富ナリ。血管ガ横斷セラレタル所ニ於テハ上皮細胞ハ放射狀ノ排列ヲナシ簇生品狀ヲ呈セリ。

血管ヲ圍繞セル上皮細胞ハ大部分ニ於テ唯一層ナルモ、場所ニヨリテ重層ノモノアリ。而シテ一般ニ互ニ密接セルガ殊ニ強度ニ密接セル所ニ於テ細胞ハ圓柱狀ヲ呈ス。

結締組織ハ極メテ僅少ニシテ、著シク疎トナリ、浮腫狀ニ腫脹セリ。而シテ何處ニモぐりや細胞ノ存在ヲ認メズ。

尙精細ニ上皮細胞ヲ檢スルニ、細胞原形質ハえおじんニ淡染シ、網狀ヲ呈セルモノ多少アレ共之ヲ見ザルモノ大多數ヲ占ム。ハイデンハイン氏顆粒染色法ニ依ルニ、顆粒ヲ含メルモノ約半數ヲ占ムルモ、全ク之ヲ含マザルモノモ見ラル。空胞ヲ含メルモノ或ハ顫毛ヲ有セルモノハ之ヲ認メズ。核ハ骰子形細胞ニ在リテハ一般ニ類圓形又ハ卵圓形ヲ呈スルモ、圓柱狀細胞ニ在リテハ長橢圓形西洋梨子狀ノモノ多シ。而シテ核ハ細胞ノ中央ヨリ稍々血管壁ニ近ヅキテ細胞基底ニ近ク偏在シ、くろまらんニ富ム。

絨毛ト絨毛トノ間隙ニハ脱落壞死ニ陥リタルえおじんニ汚染セル上皮細胞等顔敗物ヲ容レタル所多シ。

側腦室脈絡叢 血管及び上皮細胞ノ性狀尋常ニシテ著變ナシ。即チ充血セル血管ハ腫瘍ニ於ケルガ

兩側腦室脈絡叢及ビ脈絡柱ハ尋常ノ狀態ヲ呈シ、尋常ノ位置ニアリテ増殖又ハ肥大等ヲ認メズ。視神經、動眼神經等ノ腦神經ハ強度ノ浮腫ヲ呈セリ。小腦ハ一般ニ浮腫樣ヲ呈シ、軟腦膜稍々潤濁セリ。腦及ビ身體ノ何處ニモ腫瘍ノ轉位ヲ認メズ。

四、顯微鏡的所見

內臟諸器官 肉眼の所見ニ舉ゲタル變狀ノ他特記スベキ事ナシ。

大腦 軟腦膜ハ浮腫樣ニ腫脹シソノ結締組織ハ疎トナレリ。圓形細胞浸潤殆ド認ムル能ハズ。腦質内ニ於テハ血管周圍腔稍々擴張セリ。血管ハ中等度ニ充血セルモ出血ヲ認メズ。

極メテ僅少ナレ共血管壁内被細胞ノ輕微ナル腫脹及ビ極少數ノ淋巴細胞ガ血管外皮淋巴腔ニ存在セシヲ認ム。

腦室壁(尾狀體附近) 腦室被膜細胞壓平セラレタル外腦質ノ變化ハ前記ノモノト大同小異ナリ。

小腦 軟腦膜結締組織ハ浮腫樣疎ニシテ、其中ニ中等度ノ淋巴細胞浸潤アリ。稀ニ多核白血球ヲ見ル。

小腦最表層淋巴腔ニ於テぐりや細胞ノ浸潤セル所諸所ニ見ラル。

腫瘍 諸處ヨリ小片ヲトリ、一〇%ふるまりん液ニテ固定シタル後、つゝのいちん及ビばらふじん

包埋法ニテ薄片ヲ製作シ、へまごきしりん、えおじん重染色法、ワイゲルト氏彈力纖維染色法、ワシグーソン氏纖維染色法、ハイデンハイネ鐵へまごきしりんニ由ル顆粒染色法等ヲ施シテ檢索ニ從事セリ。

腫瘍ヲ概觀スルニ、主ニ菲薄ナル管壁ヲ有シ、アラユル方向ニ分枝纏綿セル血管、及ビ之ヲ圍繞セ

本例ニ於テモ可ナリ豊富ナル彈力纖維ヲ證明シ得タリ。又 Vonwiler 及 J. Corner 1919 (20) ハ脈絡叢乳嘴腫上皮細胞中ニ空胞及ビ顆粒ヲ證明シ、之ヲ以テ腫瘍自身モ 腦脊髓液分泌ヲ營メル證據トセルガ、此說ノ當否ハ別トシテ、本例ニ於テモ顆粒ヲ含メル細胞ヲ諸處ニ認メタリ。本例ニ於テハ腫瘍ノ轉移トモ認ム可キ新生物ハ身體ノ何處ニモ發見セザリキ。尙大腸孤在濾胞ノ腫脹ヲ認メタルガ、コハ生時滋養注腸ヲナセルニ起因スベシ。

第三章 文獻竝ビニ考按

脈絡叢腫瘍ハ稀有ナル疾患ニシテ其文獻例モ亦極メテ尠シ。余ハ今茲ニ蒐集シ得タル文獻例ニ就キ、報告者ノ年代順ニ列記シ、患者ノ性及ビ年齡、腫瘍ノ種類、其大サ竝ビニ發生部位、其他注意スベキ事項ヲ表記シ以テ一般的見地ヨリ脈絡叢腫瘍ヲ概說シ聊カ本例ト對照セムト欲ス。

一、文獻例

表中「」ヲ用ヒタルモノハ原著表年代詳ヲニナシ得ザリシヲ以テ、抄録ニ現ハレタル年代ヲ假ニ表示セリ。

第一 表

報告者年次	性年	齡	腫瘍ノ種類大サ(種)	性	狀	發生部位	摘	要	經過
Kobin und Blondel 1858 (4)	♂	一	一歲乳嘴腫	六×四×三		第四腦室	爾餘ノ腦室ニ著明ナル腫		
Koktansky [1898] (6)			髓樣痛			第四腦室			
Koktansky [1899]			膠樣痛	喉果實大		側腦室			
Langhans 1881 (6)	♀	一三歲	肉腫			第四腦室	強度ノ腦水腫		

○岡部・脈絡叢腫瘍ノ一例

如ク分枝纏綿スル事ナク、上皮細胞ハ主トシテ單層、骰子形ニシテ圓柱狀ヲ呈セル所ナク核ハ圓形ニシテ細胞原形質ノ中心ニアリ。

五、實驗例ノ梗概

本例ハ生後五ヶ月ノ乳兒ニ於テ臨牀的ニ所謂腦膜炎ノ診斷ヲ附セラレタルモノニシテ、異常ナル腦壓ノ上昇及ビ種々ナル腦症狀ヲ現ハシタルモノナリ。而シテ剖檢ニ際シ著明ナリシハ、強度ノ内外腦水腫、小兒手拳大ノ脈絡叢腫瘍及ビ是等ニ依リテ惹起セラレタル肝臓體、腦穹窿等ノ壓平ナリトス。腦及ビ腦軟膜ニ於テハ浮腫最著シク、其他極メテ輕度ノ腦膜炎及ビ腦炎ノ像ヲ呈セリ。而シテ是等ハ腫瘍及ビ強度ノ腦水腫ニ依リテ誘致セラレタル續發的現象ナルハ想像スルニ難カラザルナリ。

本腫瘍ハ、表面微細顆粒狀纖毛樣ヲ呈シ、第三及ビ兩側腦室ニ在リテ、明カニ左右側腦室脈絡叢ト連レル外、他トノ連絡ナク、腦室被膜トモ何等ノ關係ナキヲ確カメ得タルモノニシテ本腫瘍ガ脈絡叢ヨリ發生セル乳嘴腫ナル事ハ、微顯鏡的所見ト相俟ツテ確認セラル、所ナリ。而シテ *Saxer, 1902* ⁽¹⁾ガ報告セル側腦室被膜ヨリ發生セル乳嘴腫トハ全然異レルモノナルハ明カナリ。即チ *Saxer* ⁽¹⁾ノ記載セル所ニ據レバ、該腫瘍ハ脈絡叢乳嘴腫ト非常ニ相似タル性狀ヲ呈セルモ、脈絡叢ト連絡セル何等ノ痕跡ヲモ認メ得ザリシナリ。

又本例ニ於ケル腫瘍ガ單ナル脈絡叢ノ増殖肥大ニ依ルニ非ザル事ハ、其血管ガアラユル方向ニ分枝纏綿シ、之ヲ圍繞スル上皮細胞ノ形態ガ一樣ナラザルニ依リテモ明カナル所ナルベシ。

Brichmanow 1898 ⁽²⁾ *Vonwiller 1911* ⁽³⁾ハ脈絡叢乳嘴腫ニ於テ豐富ナル彈力纖維アルヲ記載セルガ、

Batel 1908. (17)	♀	一五歳	脂肪腫(二個)			肝臓體ニモ一個アリ 慢性結核ニテ死亡	
Vigoureux 1908. (18)	♂	二八歳	乳嘴腫			強度ノ腦水腫アリテ鼻腔 ヨリ絶エズ腦脊髄液流出 ス、刺頭痛、顱縫發作、	三四ヶ年
Slavmaker 1909. (19)			乳嘴腫			強度腦水腫。 第四腦室孔ヲ變位ス。	
Borchers 1909. (20)			乳嘴腫 血管肉腫			右側腦室	
Margaret 1910. (21)	♀	八歳	乳嘴腫 むりてりあー			第四腦室	強度腦水腫、小腦、延髄 壓迫、嘔吐、鬱血乳頭
Vonwiler 1911. (3)	♂	十五歳六ヶ月	乳嘴腫 これすてあゝ	三・五×三・四		第四腦室	延髄壓迫、彈力纖維豐富、 刺頭痛、嘔吐、盲目、
Karl 1911. (22)	♀	六一歳	乳嘴腫 これすてあゝ	胡桃大		第四腦室	腦室水腫、頭痛、
Plath 1911. (23)	♀	三歳	乳嘴腫	胡桃大		兩側腦室	腦室擴大、
Hassius 1911. (24)	♂	三五歳	乳嘴腫	胡桃大	赤	第四腦室	先天性腦水腫ト診斷サル 爾餘腦室及ビシルビー氏 管擴大
Kühler 1914. (25)			乳嘴腫	六・五×三・五	赤	左側腦室	
Hierlich 1915. (26)	♂	二九歳	乳嘴腫	卵大	柔軟海綿 狀一部粥	第四腦室	小腦ハ空洞狀ニ壓迫、 第三腦室、大脳導水管擴大、 接續性嘔吐、後頭部頭痛、 脈搏緩慢、言語障礙 手術中ニ死亡
Beyrandi 1917. (27)	♀	一〇ヶ月	乳嘴腫	七・三×八・〇	球形	左側腦室	腦水腫、右側腦室擴大、頭 部增大、縫合哆開昏睡
Schwarzig 1917. (28)	♂	壯年	乳嘴腫			第四腦室	腦血症ニテ死亡、 尋常ノ脈絡叢構造ヲトル

○ 岡部・脈絡叢腫瘍ノ一例

Andry 1886(43)	↑	四五歳	乳嚢腫小			強度ノ腦水腫	
Schrebe 1893(7)	↑	九ヶ月	乳嚢腫				
Ittgen 1896(8)			乳嚢腫				
Bruchanow 1898(2)	↑	六ヶ月	乳嚢腫	直徑五・〇釐	球形褐色	左側腦室	高度ノ腦水腫、 多クノ彈力纖維ヲ見ル、
Cimbal, Fall II. 1901(9)	♀	八歳	嚢嚢腫	嚢嚢腫		第四腦室	嚢嚢腫、 内外腦水腫、
Arnold 1871(10)			嚢嚢腫	嚢嚢腫		第三腦室	嚢嚢腫、 小嚢、延髄ヲ壓迫
Pilez 1903(11)	↑	四九歳	嚢嚢腫	嚢嚢腫		左側腦室	嚢嚢腫、 小嚢、延髄ヲ壓迫
Mc Carthy 1904(12)			嚢嚢腫	嚢嚢腫		右側腦室	嚢嚢腫、 小嚢、延髄ヲ壓迫
Witzold 1905(13)	♀	四歳六ヶ月	嚢嚢腫	嚢嚢腫	赤黄褐色、 扁平形、 表面毛管 著明	左側腦室	嚢嚢腫、 小嚢、延髄ヲ壓迫
Bielschowsky u. Ugar. 1906(14)	♀	四三歳	嚢嚢腫	嚢嚢腫	嚢嚢腫	原發ハ中 心嚢嚢腫 アリテ硬 キ索ヲ以 テ右側腦 室脈絡叢 ニ續ク	嚢嚢腫、 小嚢、延髄ヲ壓迫
Goldnier 1906(15)			嚢嚢腫	嚢嚢腫	嚢嚢腫	第四腦室	嚢嚢腫、 小嚢、延髄ヲ壓迫
Scholz 1906(16)	↑	三〇歳	嚢嚢腫	嚢嚢腫	嚢嚢腫	第三腦室	嚢嚢腫、 小嚢、延髄ヲ壓迫

即チ乳嘴腫十六例、癌腫四例、ベリておゝむ四例、及び惡性上皮腫、乳嘴狀上皮腫、神經上皮腫、血管肉腫、肉腫、淋巴細胞肉腫轉移、內被細胞腫、脂肪腫、纖維腫ト血管肉腫トノ混合腫各一例、其他これすてあゝむ三例、ぶさゝむ一例ナリトス。就中これすてあゝむハ馬ノ脈絡叢ニ於テモ屢ミ見ラル、所ニシテ、Jewett, 1913, (34)ハ三十頭ノ馬ニ豌豆大乃至鵝卵大ノモノヲ發見セルヲ報告セリ。

腦室ニ來リ而モ脈絡叢以外ヨリ發生セル腫瘍ノ記載ハ脈絡叢腫瘍ニ比シ遙カニ多數ナリ。其二三ヲ舉ゲンニ Vowiller ノ左側腦室ニ於ケル腦室被膜神經膠腫 (Gerlach 1910, (35)ノ腦橋上半部ニ於ケル肉腫 Le Blanc 1909, (4)ノ左側腦室底ニ於ケル粘液腫狀乳嘴腫 Saxer 1901ノ左側腦室ニ於ケル腦室被膜ヨリ發生セル乳嘴腫及ビ同氏 1906, (5)ノ第三腦室ニ於ケル畸形腫等ナリ。

脈絡叢ヨリ發生セルヤ或ハ腦室壁其他ヨリ出デシヤ不明ナルモノモ亦屢ミ舉ゲラル。例ヘバ Arnold, Fall II, 1908, (37)ノ第三腦室ニ於ケルベリてりおゝむ (38)ノ左側腦室ニ於ケル癌腫等ノ如シ。

而シテ是等脈絡叢以外ヨリ發生セル腦室腫瘍モ、臨牀的ニハ脈絡叢ニ於ケルト大同小異ノ症候ヲ呈セルモノナリ。

四、腫瘍ノ大サ

Arnold ガ報告セル林檎大ノぶさゝむヲ以テ最大トナシ、Hitz ノ記載セル肉眼のニハ之ヲ認ムルヲ得ザリシ淋巴肉腫轉位ヲ以テ最小トス。而シテ一般ニ乳嘴腫ハ比較的大ニシテ胡桃大或ハ其以上ニ達セルヲ見ル。

五、腫瘍ノ位置及ビ局所所見

腫瘍ハ第四腦室ニ於テ最も多ク十六例ヲ算シ、次テ側腦室十一例、其中左側六例、右側三例、兩側一例、左右不明ナルモノ二例ナリ、尙第三腦室四例ニシテ第三腦室ヨリ兩側腦室ニ互レルモノハ本例ノ一例ノミ。而シテ稍々其位置ヲ異ニスルハ、Hutchinson (1905)ノ報告セル惡性上皮腫ニシテ、其右側腦室脈絡叢ト連絡セル原發蓋ハ中心廻轉ニ介在シ、其轉移ヲ諸處ニ生セルモノナリ。

局所所見ハ、腫瘍發生部位及ビ腫瘍ノ種類ニ依リテ各異レルモ、其記載サレタルモノニ於テハ大多數ノ場合強度ノ腦室水腫ヲ將來セル點ニ於テ一致セリ。又腫瘍發生部位ニ於テ、附近ノ腦組織例ヘバ胼脈體、腦穹隆、腦橋、小腦、延髓等ヲ壓迫シ、惡性腫瘍ニアリテハ近接腦組織中ニ腫瘍細胞ノ浸潤ヲ來セルモノアリ。

六、臨牀症狀及ビ經過

○岡部・脈絡叢腫瘍ノ一例

○ 岡部・脈絡叢腫瘍ノ一例

三〇

Kleinert 1918, (29)	♀	二一歳	乳嚢狀上皮腫	四・五		第四腦室	小腦壓迫、腦室擴大、頭痛、近視、頸乳頭
Körner Fall I 1919, (20)	♂	三二歳	癌	腫	胡桃大	第四腦室	肝臟腫大、側腦室第三
Körner Fall II. 1919.	♂	九歳	乳嚢腫	五・〇×八・五	腎形	右側腦室	視野減少、頸乳頭、腦脊液全ク壓平、右側腦室擴大、細胞ニ空胞、頸乳頭
Hess. [1919.] (31)			乳嚢腫		赤褐色	第四腦室	大量ノ腦脊液噴出ス
Ziegler [1919.] (32)			乳嚢狀癌		花野菜狀	第三腦室	小腦半球ヲ壓迫
早 1920 (33)	♀	二四歳	纖維腫ト血管合腫	小豆大		側腦室	嗜眠狀態
Dreiluss 1923 (42)	♀	六五歳	内被細胞腫	二・九×二・五 ×二・〇	硬灰白色	左側腦室	心竇膜閉鎖不全症ニテ死亡
本 1924	♂	五ヶ月	乳嚢腫	四・〇—四・三 四・五×三・八	花野菜狀	第三、兩側腦室	強度内外腦水腫、腦脊液、肝臟腫大、兩眼内斜視、痙攣、嘔吐、嗜眠狀態、異常腦壓上昇、

二、性及ビ年齡

男性十四例、女性十二例、男女性何レトモ記載ナキモノ十一例ニシテ、其發生頻度ハ男女性何レニ於テモ大差ナキガ如シ。
年齡ハ本例ノ五ヶ月ヲ以テ最小トシ Dreiluss ノ六十五歳ヲ以テ最高トス。而シテ Brichmanov ノ六ヶ月、Zacharew ノ九ヶ月、Kleinert、ノ十ヶ月等ハ何レモ乳兒ニ來リシモノナリ。

三、腫瘍ノ種類

脈絡叢ニハ種々ナル腫瘍發生ス。脈絡叢ハ元來上皮細胞、血管及ビ僅少ノ結締組織ヨリ成ル。從ツテ腫瘍ノ大多數ヲ占ムルモノハ、上皮細胞及ビ血管ヨリ發生セルモノナルガ、又屢々胎生期ニ於ケル胚芽ノ迷入轉位ニヨリテ來ル上記以外ノ腫瘍モ報告セラル。

脈絡叢乳嘴腫ハ一般ニ比較的大ナル大サニ達スルモノニシテ Keymanth ノ七・三×八・〇種 (Gierlich ノ卵大 Robin u. Moutel ノ六・〇×四・〇×三・〇種等ニシテ、本例ノ四・一×四・三×四・五×三・八種モ決シテ小ナリトハ言フベカラズ。而シテ第二表ニ於テ見ル如ク大部分ハ小兒手拳大位ニシテ、其小ナルモノモ胡桃大ヲ下ラズ。

第 二 表

脈絡叢乳嘴腫ヲ年齡順ニ摘記シ其大サ及ビ發生部位ヲ記ス

報 告 者	性 年 齡	腫瘍ノ大サ(種)	發生部位
本 例	五 ヶ 月	四・〇―四・三× 四・五×三・八	第三、兩 側腦室
Brichanow,	六 ヶ 月	直徑五・〇	左側腦室
Schäfer,	九 ヶ 月		
Keymanth,	十 ヶ 月	七・三×八・〇	左側腦室
Pruth,	三 歲	胡 桃 大	兩側腦室
Körner, Fall II,	九 歲	五・〇×八・五	右側腦室
Robin u. Moutel,	十一 歲	六・〇×四・〇× 三・〇×三・四×	第四腦室
Voewler,	十五 歲 六 ヶ 月	三・五×三・四× 三・〇	第四腦室
Schwarting	青 年		第四腦室
Vigorenz,	二十 八 歲		第四腦室
Gierlich,	二十 九 歲	卵 大	第四腦室
Blasius	三 十 五 歲	胡 桃 大	第四腦室

○岡部・脈絡叢腫瘍ノ一例

乳嘴腫發生部位ハ脈絡叢腫瘍一般ニ於ケルト同シク第三腦室ニ於テ最も多ク八例ヲ占メ、側腦室五例、第三腦室二例ニシテ第三腦室ヨリ兩側腦室ニ互レルガ如キ例ナシ。

茲ニ注意スベキハ脈絡叢ニ發生スル腫瘍ニ於テハ、乳嘴狀ヲ呈スルモノ多キ事ニシテ、文獻例ニ於テモ Kleinert ガ乳嘴狀上皮腫ヲ記載セルヲ見ル。其他 Nulmangel モ、脈絡叢ヨリ發生スル瘤腫ハ屢々乳嘴腫ノ性狀ヲ帶ブルモノナリト稱セルガ Zicker 及ビ Körner, Fall I, 等ハ此說ニ一致スルモノナルベシ。

一般ニ乳嘴腫ノ發生原因トシテ、ソレガ器械的デアレ、或ハ化學的デアレ、何レニシテモ連續的剝戟ガ其主ナルモノトシテ擧ゲラル、モ、又一方先天的ニ膀胱 (Steinmännchen) 咽頭 (Bornemann) 等ニ發生セルモノモ報告セラレ、胎生期ニ於ケル發育ノ畸形ニ其基底ヲオクモノト思惟サ

○ 岡部。脈絡叢腫瘍ノ一例

三二

臨牀症狀ハ腫瘍發生部位及ビ其大サニ密接ナル關係ヲ有ス。生前何等腦症狀ヲ呈セズシテ、剖檢ニ際シ偶然之ヲ發見シタル *Kelwig, Dreyfus* ノ如キ場合モアレ共、其多クハ強度ノ腦水腫ヲ伴ヘルヲ以テ、腦壓迫症狀例ヘバ頭痛、嘔吐、動血乳頭等ヲ呈シ、又腫瘍ガ第四腦室ニ在ル時ハ同時ニ小腦腫瘍ノ症狀ヲ發見スルニ至レル場合アリ。

又生前腦腫瘍ナル診斷ノ下ニ手術ヲ施サレタルモノニ例アリ。即チ *Friedrich*、及 *Wielandowsky u. Ungar* ノ場合ニシテ、其結果ヨリスレバ何レモ不成功ニ終レリ。即チ前者ニアリテハ手術中死亡シ後者ニアリテハ第一回ハ中心廻轉ニ介在セル腫瘍ヲ摘出シ得タリシモ、第二回ニ附録ノ轉移ヲ摘出セントシテ死亡ヲ來セリ。

本例ハ哺乳不充分、脫力ヲ以テ主訴トシ、眼球內轉斜視、腦水腫、腦壓異常上昇、嗜眠、痙攣等ヲ主ナル症候トセルガ臨牀上本例ノ最モ相似タルハ *Keyman* ノ場合ナリトス。即チ十ヶ月ノ乳兒ニ於テ、頭部増大、縫合哆開、營養攝取僅少、昏睡、痙攣、眼球異常廻轉、中等度腦壓等ノ症狀ヲ呈シ、漿液性腦膜炎ト診斷サレタルモノニシテ、此場合モ剖檢ニヨリテ左側腦室ニ大ナル乳嘴腫ヲ發見セルモノナリ。

初メ腦症狀ヲ呈シ死ニ至ル迄ノ期間ハ明記サレタルモノ少キモ、最短ナルハ本例ノ五週日ニシテ、最長ナルモノモ *Vicourous* ノ四年三ヶ月ヲ超ヘズ。即チ乳嘴腫等元來良性ナルモノモ、一般ノ良性腦腫瘍ヨリ比較的速度ニ死ノ轉歸ヲトルニ至ルハ、腫瘍ノ發生部位ガ生命ニ重要ナル中樞附近ニ相當スルニ依ルモノナルベシ。

七、脈絡叢乳嘴腫

乳嘴腫ガ脈絡叢腫瘍中最多數ヲ占ムル事ハ第一表ニ於テモ明ラカナル處ニシテ、三十六例中十七例即チ約四十七%ヲ占ム。而シテ最著明ナルハ比較的幼少ナルモノニ發生スル事ニシテ、本例ノ五ヶ月 *Prichnow* ノ六ヶ月 *Schriebe* ノ九ヶ月 *Keyman* ノ十ヶ月等ハ何レモ乳兒ニ來レルモノ *Plath* ノ三歳、*Köner Fall II* ノ九歳、*Rabin*、*Howdell* ノ十一歳、*Vonwiller* ノ十五歳六ヶ月等ハ幼年ニ來レルモノナリ。而シテ年長ナルモノモ *Vicourous* ノ二十八歳、*Masius* ノ三十五歳、*Aulry* ノ四十五歳ヲ超ヘズ。即チ壯年期以後ニ於テ見ラレタルモノハ僅カ一例ノミナリ。

尙乳兒ニ於ケル脈絡叢腫瘍トシテ舉ゲラレタルモノ、全部ガ乳嘴腫ナルハ興味アル事實ナリトス。

記諸種ノ原因ヲ肯定セラルベキモ是等ノミヲ以テ原因ナリトスルニハ餘リニ腦腔ノ上昇異常ナレバナリ。

結 論

一、脈絡叢腫瘍トシテハ諸種ノ腫瘍中乳嘴腫、癌腫、べりてりおゝむ、上皮腫、肉腫、内被細胞腫、脂肪腫、纖維腫ト血管肉腫ノ混合腫、これすてあゝゝむ、ぶさもゝゝむ等舉ゲラル。就中乳嘴腫ヲ以テ最多數トス。

而シテ脈絡叢腫瘍ハ第四腦室ニ於テ最モ多ク見ラレ腦水腫ヲ伴フヲ常トス。

二、本例ハ第三腦室脈絡叢ヨリ發生ル乳嘴腫ニシテ該腫瘍ハ兩側腦室ニ互レリ。

三、實驗例ハ強度ノ腦水腫ヲ伴ヒ異常ノ腦壓ヲ呈セリ。而シテ其原因ノ一ツヲ腫瘍自身ノ分泌過多ニ歸スベシ。

四、乳兒ニ於ケル脈絡叢乳嘴腫ハ其發生原因ヲ胎生期ニ於ケル發育ノ畸形ニ其基底ヲオクモノト思考セラル。

(大正十三年一月稿)

攔筆ニ臨ミ臨牀方面ニ於テ御高教ニアヅカリタル小兒科伊東教授並ニ文獻參集ニ多大ノ便宜ヲ與ヘラレタル精神科諸岡助教授ニ深謝ス。

本研究ニ際シ懇篤ナル指導ト本稿御校閲ヲ賜ハリシ恩師中山教授並ビニ多大ノ援助ヲ與ヘラレタル小野助教授及ビ鈴木講師ニ謝意ヲ表ス。

尙本例ハ余ガ親友ノ愛兒ナリ。謹ミテ哀悼ノ意ヲ表ス。

Literaturen.

1) Saxer: Ependymomphel, Gliome und epitheliale Geschwülste des Centralnervensystems. Zieg. Beitr. z. path. Anatomie, Bd. 22

○岡部・脈絡叢腫瘍ノ一例

○岡部・脈絡叢腫瘍ノ一例

三四

Kilbert		六・五×三・五	左側腦室
Hess			第四腦室
Littgen			第三腦室
Slaymaker			第四腦室
Andry	四十五歳	小	

ル、モノアリ。而シテ本例ニ見タル如キ乳兒ニ來リタル脈絡叢乳嚢腫ハ、後者即チ其發生原因ヲ胎生期ニ於ケル發育ノ畸形ニ其基底ヲ歸スルノ説ヲ以テ解釋スルヲ安當トスベシ。

ハ、脈絡叢乳嚢腫ト腦水腫

脈絡叢腫瘍ノ際ニハ記載サレタル殆ドホヘテノ場合ニ於テ腦水腫ヲ伴ヘルハ第一表ノ如クナルガ殊ニソレガ乳嚢腫ナル時ニ於テ最も甚シキガ如シ。例ヘバ Kitchin (三二) ハ九歳ノ小兒ニ於テ強度ノ腦水腫アリテ、腦脊液全ク壓平セラレ腰椎穿刺ニ際シ、腦脊髄液ノ噴出セルヲ報告シ。

Wernicke ハ二十八歳ノ男子ニ於テ、強度ノ腦水腫ノタメ數年ニ亙リテ鼻腔ヨリ絶ヘズ腦脊髄液ノ流出シタルヲ記載セリ。

本例ニ於テモ高度ノ腦水腫ヲ來タシ、腦脊液、肺底體ハ膜様ニ壓平セラレ、腦壓ハ異常ニ上昇シ六〇〇耗ノまのめ一ヲ超ヘテ尙液ノ噴流セルヲ見ル。而シテ斯ノ如キ高壓ハ、通常ノ腦腫瘍或ハ腦脊髄膜炎ニ於テハ極メテ稀有ナル現象ニシテ、伊東教授ノ高話ニヨレバ、斯ノ如ク短時間ニ急速ナル腦壓上昇ヲ來タセルモノ、即チ殆ド毎日又ハ隔日腰椎穿刺ヲナスニ拘ラズ、毎回六〇〇耗以上ノ高壓ヲ來タシタルガ如キ例ハ、未ダ曾テ經驗セラレザル所ナリト。

脈絡叢腫瘍ノ際ニ於ケル腦水腫ノ發現ニ關シテハ種々ナル要因ヲ數フルヲ得ベキモ、其ノ主ナルモノトシテハ腫瘍ノ大脳靜脈其他ノ血管及ビ淋巴管ニ及ボス壓迫ニヨル鬱血及ビ淋巴管、滯留、腦室被膜、實質及ビ腦膜ニ於ケル腫瘍刺激ニヨル反應性炎症性液ノ滲出モシロイ氏孔或ハマゲンチ氏孔ノ閉塞又ハ變位等ニヨリテ生ズル腦脊髄液流ノ阻止等ナリトス。

凡ソ脈絡叢ハ腦脊髄液ノ分泌、調節濾過等ヲ營ムモノナリトハ一般ニ信セラル、所ナリ。而シテ正常ノ脈絡叢ト其構造ノ非常ニ相似タル脈絡叢乳嚢腫自ガ調節ヲ失シ多量ノ分泌ヲナスナラントハ思考シ得ラル、所ニシテ Vanlille, Andry モ之ヲ以テ彼等ノ場合ノ高度ノ腦水腫ヲ説明セリ。

本例モ亦之ヲ是認スル症例ノ一タルベシ。何トナレバ本例ニ於テ血管及ビ淋巴管ノ壓迫、輕度ナル腦炎並ビニ腦膜炎等アリテ前

第一圖



第二圖



第三圖



(Y. Okabe.)

- S. 276. 1902. 2) **Brichanow**, zit. n. Vonwiler. 3) **Vonwiler**, Über das Epithel und die Geschwülste der Hirnkammern, Virch. Arch. Bd. 204. S. 230. 1911. 4) **Robin** und **Blondel**, zit. n. Vonwiler. 5) **Rokitansky**, cit. n. Haackel. Beiträge zur normalen und Patholog. Anatomie d. Plexus chorioideus, Virch. Arch. Bd. 16. S. 232. 1839. 6) **Langhans**, Über Urdarmbildung im Rückenmark als Folge von Blutstauung, Virch. Arch. Bd. 135. S. 1. 1881. 7) **Schröbe**, Ein Papillom d. Plexus chorioideus von einem 3/4 j. Kinde, Deutsche med. Wochenschr. 1892. S. 61. 8) **Lüttgen**, zit. n. Vonwiler. 9) **Cimbal**, Beiträge zur Lehre von den Geschwülsten im 4. Ventrikel, Virch. Arch. Bd. 166. S. 289. 1901. 10) **Arnold**, zit. n. Nodding. Specielle Pathologie und Therapie, Bd. 9. 1902. 11) **Pilez**, Ein Fall von metastatischem Lymphosarcom des Plexus chorioideus lateralis ventriculi, Centralblatt f. allg. Patholog. Bd. 14. S. 50. 1903. 12) **McCarthy**, Cholesteatoma vasculosa of the Choroid plexus of the lat. cerebral. vent. Jahresb. d. N. u. P. Bd. VIII. S. 242. 1904. 13) **Watzold**, Ein Perithelium des Plexus chorioideus d. linken Seitenventrikels, Ziegl. Beitr. z. patholog. Anatomie, Bd. 38. S. 388. 1905. 14) **Bielschowsky** und **Ungar**, Zur Kenntnis der primären Epithelgeschwülste der Adhärenz des Gehirns, Arch. f. klin. Chirurgie, Bd. 81. S. 61. 1906. 15) **Goldmeyer**, Neuroepithelium im Plexus chorioideus des 4. Ventrikels, Jahresb. d. N. u. P. Bd. X. S. 554. 1906. 16) **Schorz**, Einige Bemerkungen über das meningale Cholesteatom im Anschluss an einen Fall von Cholesteatom des 2. Ventrikels, Virch. Arch. Bd. 184. S. 255. 1906. 17) **Bartel**, Zwei seltene Fälle von Hirntumoren, Folia neuropathologica, Bd. 2. Nr. 2. S. 228. 1909. 18) **Vigourov**, Jahresb. d. N. u. P. Bd. XII. S. 248. 1908. 19) **Slaymaker**, Papilloma of the choroid, Jahresber. d. Neurolog. u. Psychiatrie, Bd. XIII. S. 506. 1909. 20) **Borchers**, zit. n. Vonwiler. 21) **Margaret**, zit. n. Cimbali. 22) **Karl**, Ein Fall von Cholesteatom im IV Ventrikel, Frankf. Zeitschr. f. Path. Bd. VI. S. 207. 1911. 23) **Plath**, zit. n. Vonwiler. 24) **Blassius**, zit. n. Vonwiler. 25) **Riebert**, Die Geschwülste, 1914. 26) **Gierlich**, Ein Papillom im 4. Ventrikel mit Operationsversuch und Sektionsbefund, Deutsche med. Wochenschr. 41. Jahrgang S. 882. 1915. 27) **Eysaardt**, Hydrocephalus mit Tumor, Neurolog. Zentralbl. Bd. 26. S. 479. 1917. 28) **Schwarting**, Das Papillom d. Plexus chorioideus im Anschluss an einen einschlägigen Fall, Neurolog. Zentralbl. Bd. XXXV. S. 574. 1917. 29) **Rheindorf**, Papillom Epithelium d. 4. Ventrikel, Jahresberichte d. N. u. P. Bd. XII. S. 248. 1908. 30) **Körner**, Geschwülste der Adhärenz des Centralbl. f. allg. Path. Bd. XXX. S. 121. 1919. 31) **Hess**, zit. n. Körner. 32) **Ziegler**, zit. n. Körner. 33) **早尾虎雄**, 再ニ血管脈絡腫瘍ニ就テ, 附其腫瘍ノ

- 一、例 神經學雜誌 第二十一卷、大正十一年、(34) Joest, Untersuchungen über das Plexus-cholostomum des Frenkes, Zentralblatt f. allg. Path. 1915, S. 541. (35) Gerlach, Zur Kasuistik der Plexismomien, besonders im Bereiche des Pont. Jahresb. der Neurolog. u. Psych. Bd. XIV, S. 611, 1910. (36) Saxer, Ein zum grossen Teil aus Derivaten der Medullarplatte bestehendes grosses Teratom im III. Ventrikel eines 7. wöchentlichen Kindes, Ziegl. Beitr. Bd. XX, S. 299, 1896. (37) Besold, zit. n. Witzold. (38) Spä, zit. n. Vornüller. (39) Steinmetz, zit. n. Borst. Die Lehre von den Geschwülsten, II Bd. 1902. (40) Bonnemann, zit. n. Borst. (41) Le Blanc, zit. n. Vornüller. (42) Dreifuss, Über Endothelion des P. Chorionicus, Ziegl. Beitr. f. allg. Pathologie, Bd. 71, S. 667, 1922. (43) Audry, zit. n. Vornüller.

附圖說明

- 第一圖 腦底ヨリ腫瘍及び強度ニ擴大セル腦室ヲ示ス。
 第二圖 腫瘍五十四倍擴大
 第三圖 腫瘍四百倍擴大



位シ前方視神經交叉及前穿行質附近ヨリ後方ハ左大腦脚ノ左側後穿行質ヨリロリー氏橋ノ左半ヲ經テ小腦左半球ノ前縁ニ互ル鴉母大ノ腫瘍ニシテ内部ニ侵入シ左側視神經牀ヲ占有セルモノニシテ定型的眞珠腫ニ屬セルモノナリキ余ハ偶々一結核患者屍ニ於テ腦底ニカクノ如キ腫瘍ヲ發見セルヲ以テ茲ニ之ヲ報告シ本腫瘍ニツキ乏シキ本邦文獻ニ其ノ一例ヲ加ヘントス。

壽繼例 西垣某 年齡二十四歲 職業學生

臨牀の所見 既往症 家族の關係ニ就テハ明カナラズ。

小兒期、六歲頃遊戲中倒レテ後頭部ヲ地上ニ打チシ外著患ナシ。

現症 大正十年春頃ヨリ漸次羸瘦シ初メタレド身體ニ異常ヲ認メザリシ爲其ノ儘ニ放置シ居タリシニ同年七月某夜野外活動寫眞見物後其ノ翌朝ヨリ熱發シ咳嗽咯痰ヲ伴ヒタリシ故某醫ノ診察ヲメケシ所右側肋膜炎ト診斷セラレ其ノ後約二ヶ月間醫藥ヲ受ケ治癒シタリト云フ同年十月上京シ就學セシガシバシバ咳嗽ヲ訴ヘタリ。

越テ大正十一年春ヨリ咯痰中ニ時々血液ノ混在セルヲ認メシガ其ノマ、放置シ同年七月歸郷シ新潟醫科大學第二内科ヲ訪ヒ肺結核ノ爲約一ヶ月入院治療ヲ受ケタリ。

同年十月再び上京セルガ咳嗽咯痰アリシモ其ノ儘ニナシ居タリシニ大正十二年三月ヨリ甚シク微候増悪シ再び歸省シ當大學第二内科ニ入院シ從來肺結核、結核性腹膜炎ノ許ニ治療ヲ受ケシガ同年六月二十五日午前八時三十分迄ニ急遽ニ入レリ主前特ニ耳疾患聴力障礙及弱症狀ヲ訴ヘザリシト云フ同日當病理學教室ニテ川村教授執刀ノ許ニ剖檢ニ付セリ。

病理解剖的診斷

一、兩葉性肺癆、二、氣管喉頭扁桃腺ノ結核潰瘍、三、小腸及大腸ニ於ケル多發性結核性潰瘍、四、肺臟、肝臟、脾臟、腎臟、腦軟膜ノ粟粒結核、五、結核性腹膜炎、六、腎盂及ビ膀胱粘膜炎ニ於ケル結核結節形成、七、乾酪性腸間膜及ビ氣管枝淋巴腺結核、八、腦底ニ於ケル眞珠腫、九、肉芽腫肝、十、纖維性左胸腔閉塞、十一、右肺炎纖維性癒著。

○佐野、腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例(附圖二)

新潟醫科大學病理學教室

副 手 佐 野 繁

緒 論

本腫瘍ハ一八二九年 Cuvellier 氏が初メテ記載セルモノニシテ其ノ外觀ノ眞珠樣ナルヲ以テ眞珠腫 Tumor Perleト呼名セラレタリ Johannes Müller 氏ハ一八三八年本腫瘍ノ肉眼的及顯微鏡的所見ヲ精述セル最初ノ人ナルガこれすてりんヲ必發的ニ其ノ成分トシテ有スルコトヲ信ジ Cholesteatom ト爲セリ Virchow 氏ハ一八五五年本腫瘍ヲ記述シこれすてりん成分ハ必發的ノモノニアラザルヨリ寧ロ眞珠腫ト呼ブヲ可ナリトセリ。

サレド本腫瘍ヲ根本的ニ研究シ其ノ性状及ビ發生ニツキ顯著ナル知見ヲ與ヘタルハ實ニ Wazemann 氏(一八九七年)ナリ氏ハ文獻ヨリ集メタルモノニ自己ノ一例ヲ加ヘ三十二例ニツキ精細ナル記述ヲ試ミ且ツ頭蓋腔内ニ發見セラレタルでもいど及脂肪腫ト比較研究シコノ三者ノ間ニ發生上ノ密接ナル關係ノアルコトヲ判明ナラシメタリ之レガ發生頻度ニ關シテハ一般ニ腦ニ生ズル眞珠腫ハ甚ダ稀有ナルモノトセラル一八〇五年 Benda 氏ハ一萬ノ剖檢中三例ニ遭遇セリト述ベオレリ M. M. Schulz 氏ノ統計ニ依レバ軟腦膜ニ生ズル頭蓋内眞珠腫ハ剖檢例ノ〇・〇四%ニ當リ同氏ハ一九一一年迄ノ文獻中ヨリ腦ノ眞珠腫六十四例ヲ數ヘソレニ自己ノ二例ヲ加ヘ全體六十六例ヲ算スト言ヘリ Postrem 氏研究發表以來頭蓋中ニテ單ニ腦底ニ發生セル報告例ヲ泰西ノ文獻ニ索メシニ E. Frankel, Verse, Kamm, R. W. R. Meyer, Ernst, Küttner, Fritz Stromeyer, Binder und Schwallie, Thomas, Van Gorp, Hebransen, Benda, Schultze, 氏等ノ諸例アリキ就中一九一三年 W. R. Meyer 氏ハ Schulz 氏統計ニ洩レシ露國文獻中ニ表ハレシ六例追加シ尙自己ノ腦底ニ發生セル一例ヲ加ヘ報告セリ。

之レニ反シ我が國ニ於テハ余ノ調査シ得タル範圍ニ於テハ山村氏ノ一例アルノミ氏ノ實驗例ハ四十三歳ノ男子ニシテ左側ノ腦底ニ

血ノ氣管枝淋巴腺ハ小サク相當量ニ炭末沈著セリ右氣管枝ハ少量ノ泡沫樣物質ヲ有ス。

十二指腸 黃色粘液性液體ヲ含有シ其ノ粘膜ハ輕度ニ充血ス胃幽門ハ閉塞セリ。

胃 中等量ノ黑灰色ノ凝固セル牛乳絮片ヲ含ム液體ヲ有シ其ノ粘膜ハ灰白色ニテ粘液物質ニテ覆ハレ胃底ニ於テ數個ノ粘膜炎ニシテおん存セリ。

肝臟 大サ二三・〇——一四・〇——一八・三 重サ一一・二〇 瓦表面ハ滑澤ニテ被膜ヲ透シテ一面ニ灰白粟粒大結節ヲ認メテ割面ニ於

テハ著明ニ肉苳莖狀ヲ呈シ肝實質ハ一面ニ腫脹潤シ所々灰白結節存セリ膽管ハ肥厚セザリキ。

膽囊ハ中等量ノ薄キ綠色ノ粘液性膽汁ヲ含有シ其粘膜ハ變化ナシ下大靜脈内膜ニ異常ナシ。

左腎臟 大サ一二・〇——五・〇——四・〇 重サ一六・五 被膜ハ容易ニ剝離シ腎臟表面ハ滑澤ニテ星芒狀靜脈著明ニ見ラレ尙少

數ノ灰白色結節ヲ認メテリ割面ニ於テハ皮質ハ多少腫脹シ髓質ハ黑赤色ニ著色シ數個ノ灰白色結節皮髓質ニ存セリ左腎盂粘膜ハ充血著明ナラザリキ。

右腎臟 大サ一一・〇——一四・〇——一三・五 重サ一三・五 被膜ハ容易ニ剝離シ表面ノ性狀ハ左腎ト同様ナリ割面ニハ帽針頭大

ノ乾酪變性セル結核病竈ト多數ノ灰白色結節存セリ又一ツノ乳頭乾酪變性ヲ呈シ此ノ乳頭ノ附近ニアル腎盂粘膜ニハ二三個ノ結節散布セリツノ他ノ所見ハ左腎ニ於ケルト同様ナリキ。

副腎臟 重サ左七・八瓦 右九・〇瓦 兩側共ニ皮質ハ灰白色透明髓質變化ナシ。

腺臟 重サ六・〇瓦 分葉硬度等一般ノ如シ。

頸部臟器 舌背輕度ニ顆粒狀ヲ呈シ兩側扁桃腺域ニ於テ結核性潰瘍及ヒ梨子狀窩ニモ數個ノ帽針頭大ノ潰瘍存セリ食道粘膜ハ多少

充血シ喉頭内面ニ數個ノ小ナル結核性潰瘍ヲ認ムサレド聲帶ニハ結節ナカリキ尙氣管粘膜ニハ多數ノれん寸狀潰瘍ヲ見タリ氣管淋巴腺ハ多數乾酪變性セル結節ヲナセリ。

甲狀腺 重サ一六・四瓦 兩側平等ニテ異常ナカリキ腸管大腸粘膜ハ所々充血シ數個ノ圓形ノ穿漏セル結核性潰瘍存シ盲腸部ハ多少肥厚シ尙多數潰瘍狀ニ破潰セシ所アリ多數ノ黃色結節散布セリバウヒン氏瓣膜ヨリ迴腸ノ下部ニ到ルマテ多數ノ圓形又ハ輪狀ノ種

〇佐野・腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

○佐野・腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

四〇

病理解剖的所見

男性ノ屍

身長一・五八米體重三二・〇〇 妊娠強度ニ瘰癧セシ屍ニシテ死斑ハ背部ニ斑點狀ニ弱度ニ顯ハレ死硬ハ

兩側下頸關節ニ著明ニ右肘關節ニ輕度ニ存セリ屍ハ未ダ多少溫感アリテ腹壁ハ多少陷凹シ觸診スルニ電鳴ヲ聞ケリ足背ニ浮腫ヲ有シ黃疸ハ全クナシ著シキ外部ヨリ觸知シ得ル淋巴腺ノ腫脹ナシ角膜透明眼珠結膜蒼白皮下脂肪及ビ脛間筋肉ハ極度ニ消耗セリ。

腹部切開ヲ成セシ所腹腔中ニ約二五〇ㄱ黄色濁潤セル腹水存シ體壁腹膜ハ滑澤ニシテ僅少ノ灰白結節アリヤ大網ハ消削シ膠樣狀ヲ呈シ多數ノ灰白色結節散布セリ腸ハ所々膨滿シ腸液膜ハ多クノ黑赤色ニ透過セル場所アリテ此所及ビ其ノ周圍ニハ粟粒大ノ結節アリタリ膀胱ハ強度ニ膨滿シ其液膜ニ少量ノ粟粒大結節ヲ見出セリ肝臟ハ萎縮シ表面滑澤脾臟ハ肥大シ多少硬シ腸間膜淋巴腺ハ僅少ニテ形成シ腫脹セリ剖面ハ全ク乾酪變性セリ橫膈膜ハ右側ハ第四肋間左側ハ第五肋骨ノ高サニ在リ。

胸廓ハ扁平ニテ肋骨及ビ肋軟骨ニハ異常ナク右肋間腔ニハ少量ノ黄色ナル液存シ右肺ハ多少膨滿シ肺尖部ニ於テノミ胸壁ト纖維性ニ癒著セリ之レニ反シ左胸腔ハ全ク纖維性ニ閉塞セリ縱隔實淋巴腺ノ腫脹ナク胸腺ハ膠樣性萎縮ヲ呈セリ心囊ニハ百耗ノ潤濁琥珀黃色ノ液存シ心囊内面ハ滑澤ニテ心囊下脂肪組織ハ豐ナラザリキ。

心臟 重サ二三〇瓦 大サハ屍拳ヨリ稍々小サク右房中ニ中等量ノ軟キ凝血ヲ有セリ右室ハ殆ンド血液ナク左房及ビ左室ハ少量ノ液狀血液ヲ含有セリ左心兩腔共ニ擴張ナク心筋ハ多少褐色ヲ帶ビ輕度ニ潤濁セリ右室ハ輕度ニ擴張シ右瓣膜裝置ニハ異常ヲ認メザリキ大動脈起始部ノ内膜ニハ多數ノ黄色結節存セリ。

左肺臟 容量大表面ハ纖維性物質ヲ以テ覆ハレ所々ニ出血ヲ認メ尙所々種々ノ大セシ結節ヲ認メタリ肺動脈ハ血液量ニ甚ダ富ミ上ニ於テ指頭大ノ腔洞存シコノ腔洞周圍及ビ肺臟全般ニ多數ノ灰白色結節ハ單獨又ハ群集シテ存シ尙乾酪變性セシ病竈ヲモ認メタリ下葉ニ於テハ二三ノ小サキ乾酪セル結節ト多數ノ單獨又ハ群集セル灰白黄色結節散布セリ小氣管枝粘膜炎ハ一帯ニ強度ニ充血シ氣管枝淋巴腺ハ多少炭粉沈著アレド乾酪化セル病竈ハナカリキ氣管枝ニハ泡沫狀ノ物質存シ粘膜炎ハ輕度ノ充血ヲ呈セリ。

右肺臟 容量大表面ハ黑赤色ニ著シ多クノ灰白半透明ナル結節散布セリ上葉剖面ニハ多數ノ灰白黄色ノ帽針頭大結節及ビ黑赤色ノ壁ヲ有セル梅毒指頭大ノ腔洞存セリ尙肺硬結ハ著カリキ浮游試驗ヲ施行セシ所右肺葉ノ小片ハ水中ニ沈降セリ中下肺葉ニ於テモ多數ノ灰白結節單獨又ハ集合的ニ存セリサレド肺組織ノ硬化ハ輕度ナリキ剖面壓迫ニヨリ泡沫狀液流出セリ右小氣管枝粘膜炎ハ強度ニ充

腫瘍及ヒ臓器ノ組織的所見

種々ナル臓器ノ組織ハ之レヲ一〇%ふるまりん液ふおるしゝるみゆゝれる液又ハ純あるこぼる等ニテ固定セルモノヲ用ヒ冰結切片ばらひん切片トナシ左ノ染色法ニテ檢索セリ

(一)へまときしりんえおじん複染色法(二)ギーソン氏染色法(三)すたんと里及ビにゝるぶらう脂肪染色法此ノ外特ニ腫瘍ニ對シテハ種々ナル方法ヲ應用セリ

(二)腫瘍部 剖檢後直チニ新鮮ナル狀態ニ於テ腫瘍ノ一部ヲ細析シテ檢鏡セシニ腫瘍ハ數多ノ鱗層板ヨリナリコレニ多量ノこれすてりん板及ビ不偏光性脂肪滴ヲ見出セシモ重屈折性脂肪ヲ見ザリキ次ニ一〇%ふおるまりん液ニテ固定後其ノ被膜ヨリ内容ヲ含ム切片標本ヲ作クリへまときしりん及ワンギーソン氏染色ヲ試ミシ所其被膜ハ血管ヲ有スル鬆粗ノ結締組織ヨリナレリソノ内側ニハ一層乃至數層ノ細胞層ヲ有セリ此ノ細胞層ノ結締組織ニ接近セル細胞ハ骰子形又多角形ニシテ核ハ染色質ニ富ミ瀾蔓性ニ著染ス中ニ一乃至二個ノ核小體ヲ認ムコレヨリ内部ニ進ムニ從ヒ細胞ハ扁平トナル而シテ多角細胞及ビ輕度ナル扁平ノ細胞間ニハ油浸裝置ニ依リ細胞間橋ヲ認ム尙コノ部ニ當リ細胞原形質内ニへまときしりんニテ濃染スル顆粒ノ帶狀ヲナシ現ハル、ヲ見ルコノ顆粒ハグラムワイゲルト氏法ニテハ濃紫色ぶしーへまときしりん復染色法ヲ試ミタルニ之ハ赤褐色ニ著染シオレリ即チけらごひありん顆粒ナルコト疑ヒナシ又内容タル肉眼的ニ絹様眞珠様光澤ヲ有セシ凝固様物質ハ檢鏡上壓平サレタル鱗層ノ著明ナル層疊配列ヲナシ其ノ間ニ透明ナル間隙又ハ大小種々ノ空胞ヲ認ム又核染色不良ナルカ不鮮明ナル細胞ノ孤在性又ハ群簇性ニアリ其ノ原形質中ニハ數多ノ空胞ヲ示スカ又ハ網狀ノ造構ヲ呈スルモ

○佐野・鹽底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

○佐野・腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

四二

種ノ大サヲ有スル潰瘍存セリ尙小腸粘膜ノ下部ハ黑色ニ著色セリ。

骨髄臟器 攝護腺異常ナシ膀胱ノ三角部粘膜ハ輕度ニ充血シ少數ノ小ナル結節散布セリ直腸粘膜ハ強度充血シ一部分出血性ナリキ
睾丸兩側共ニ異常ナシ。

頭蓋腔内ヲ披キシニ頭蓋穹窿ハ短頭型ニテ板障ハ普通ニ存セリ水平縱行竇ハ少量ノ凝血及ビ豚脂樣凝血ヲ有シ兩半球
左右半等ニテ硬腦膜ハ中等度ニ充血シ且シ多少ノ潤濁ヲ呈セリ然ルニ腦底ニ於テ偶然ワロリー氏橋ノ右基底部ニ一ツノ胡桃大ノ顆
粒狀ヨナシ灰白色ノ絹樣光輝ヲ有シ旋キ腫瘍及ビ附近ノ軟腦膜中ニ二三ノ眞珠樣ノ性狀ヲ有セル凝實大ノ圓キ小結節ヲ見出シタリ腦
底軟腦膜ハ一般ニ潤濁ヲ呈シ多少肥厚シ居レリ數多ノ灰白色ノ結節ガ散布セリ腦下垂體 重サ○・六瓦異常ナシ屍體ニ於ケル心臟血
液ハワ氏反應陰性心囊液ワ氏反應陰性ナリキ。

腫瘍ノ肉眼の所見

腫瘍ハ幅一・五厘米長サ二・八厘米ニテワロリー氏橋ノ右基底部ニテ右顳額葉トノ隅角ヲ占メリ此腫瘍ノ
表面ハ薄キ灰白色ノ被膜ニテ被ハレ内容ハ眞珠樣又ハ絹樣光澤ヲ有スル顆粒狀乃至ハ凝固樣物質ヨリ
ナリ甚ダ脆弱ニシテ容易ニ薄キ被膜ハ破レ内容ハ剝落セリ腫瘍トワロリー氏橋トノ關係ヲ見レバ腦質
ハ此ノ部ニ於テ多少扁平セラルトモ腦質内ニ侵入セズ之ヲ被フ軟腦膜ハ腫瘍ノ被膜ト癒著シ居レリ腦
神經中第三動眼神經ハ腫瘍ノ前面ニ第四滑車神經ハ其ノ側方第五又神經ハ後方ニ位シオルモコレガ
爲メ壓迫ヲ受ケオラズ精査スレバ腫瘍ノ後方被膜内ニ約四耗ノ直徑ヲ有スル圓形ノ眞珠樣結節アリ之
レハ腦ト比較的強固ニ癒著セリ、尙本腫瘍ヲ離レ前方ノ腦膜中ニ二個ノ麻實大ノ同様ノ性狀ヲ有スル
小結節ヲ散在セリ大腦ニ水平斷面ヲ加ヘ檢セルモ腦室及ビ腦絡叢ニ異常ナシ第四腦室及ビ小腦ニ於テ
モ變化ヲ認メザリキ腫瘍ノ表面ト接觸セル顳額骨及胡蝶骨ヲ檢セルニ何等ノ異常ヲ認メザリキ更ラニ
聽道ヨリ鼓室ヲ披キ精察セルニ本腫瘍ノ如キ性狀ヲ有スル物質ヲ含有セザリキ。

大動脈 内膜ハ瀰漫性輕度ニ肥厚ヲ呈シ輕度脂肪變性アリ。

脾臟 脾白膜肥厚ナク脾材異常ナシ實質ハ處々充血ヲ呈ス濾胞ハ中等度ニ存在ス濾胞動脈ハ内膜肥厚セズ脾髓及ビ濾胞内ニ小ナル粟粒結核ヲ撒種ス何レモ乾酪變性ヲ呈シ巨態細胞ヲ有シ結核結節中及其ノ周縁ニ多少ノ脂肪滴ヲ認ム

肝臟 被膜上ニハ不規則ニ結締織性ニ肥厚ス肝小葉末梢部及中間部ニ多數ノ乾酪化セル粟粒大結節アリ之レハ巨態細胞ニ富ム肝小葉中心部ハ多少ノ充血及ビ少量ノ脂肪滴アリコノ部ニ中等量ノ黃褐色色素ヲ認ム。

腎臟 被膜ニハ異常ヲ認メズ皮質髓質共ニ處々血管擴張セル所アリ赤血球ヲ以テ充滿ス絲毬體ハ多少小サク間質ノ増殖ナシ迂曲細尿管上皮細胞ハ微細ナル小顆粒ヲ以テ滿タサル、ヤ大ナル結核結節ニ三證明シ得ラル纖維性被膜ヲ有シ乾酪變性著明ナリ脂肪變性ハ輕度ニ存在ス。

副腎 髓質ハ相當ニ發達ス皮質細胞ニハ異常ナク皮質處々ニ輕度ノ充血ヲ認ム脂肪ハ極度ニ減少シ只微量ニ絲毬層ニ存在スルノミ

睪臟 異常ナシ。

甲狀腺 間質ハ増加シ血管多少擴張シテ血液ヲ以テ充滿ス濾胞ハ大小不同ナリ。

小腸潰瘍部 定型の結核潰瘍ヲ呈シソコニ結核結節多數ヲ在ス之レハ筋層ニ及ビ漿膜ニ波及シコノ部ハ爲メニ肥厚セリ結節周圍ニハ脂肪ノ多量ヲ認ム。

辜丸 間質ニ富ミ血管中等度ニ擴張ス細精管中ニ精細胞形成ヲ認ム固有膜ハ層狀ヲナシ肥厚セルモ

○佐野・腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

ノアリ層疊ヲナス鱗屑ハ其ノ大部分ハ無核ニテタバー一部分ノミ扁平ノ核ノ疎ニ散布セシ所アリワンギ
ーソン氏染色ニテハ細胞層ハ黃褐色ニ染リ鮮紅色ノ被膜ト明カナル區別ヲ示シ決シテ結締組織維乃至
ハ血管ノ細胞間ニ侵入ナシ鱗屑ヲ呈セル部モ黃褐色セリ冰結標本ニ於テ顯微化學的方法ニヨリ脂肪檢
査ヲナセシニ(重屈折、加熱時ノ重屈折に―るぶらうすだんⅢスミスチアチオフィシユラー氏法)多數
ノこれすてりん板鱗屑ノ間ニ存在シ又滴狀ノ或ハ束狀ニ集合セル針狀結晶多數ニ存在セリ尙顯微化學
的反應ニ依リ脂肪滴ハ中性脂肪及少量ノ狹義ノ類脂肪ヨリナルモ針狀結節ハ脂肪酸ニ屬スルコト明ト
ナレリこれすてりんえすてるハ何處ニモ發見セザリキ。

尙本腫瘍ヨリ前方ニテ隔離セル灰白結節 Tubercinereum 附近ノ軟腦膜中ニ存在セル麻實大眞珠樣小
結節ノ一ツヲ連續切片トナシ檢索セリ組織的所見ハ前腫瘍ト全ク同一ニシテ薄キ結締組織性被膜ニ包マ
レオル扁平上皮細胞群ニシテ主腫瘍ト全ク分隔シオリ連續的關係ナク全然獨立的ノモノナリキ。
(二)次ニ主ナル内臟臟器ノ變化ハ次ノ如シ。

心臟 心筋内ニハ少量ノ褐色ノ色素ヲ有ス脂肪變性ナシ

肺臟 血管ノ充盈ハ可ナリ高度ナリ古キ又新鮮ナル多數ノ結核性結節ヲ見之ハ單獨ニ又融合シテ大
ナル結節ヲ作クルモノアリ結節ニ増殖性及肺炎性ヲ區別シ得纖維性結核ニテハ巨態細胞ノ發生ヲ認ム
其ノ中央ノ乾酪化セルアリ其ノ周圍ノ肺組織ハ肺氣腫ヲ呈ス脂肪標本ニテハ結節中又此ノ結節ノ間ニ
存在スル肺組織ニハ脂肪顆粒ノ中等量アリ肺ノ表面ハ肋膜ハ結締組織性ニ肥厚シ擴張セル小血管ヲ多數
含有ス。

ノアリ小動脈ニ硬變性肥厚ヲ認ムルモノアリ間質細胞内ニ多量脂肪沈著アリ細精管ニ中等度ニ存在ス。

總括及ヒ考按

本例ハ二十四歳ノ男子ノ結核屍ニ於テ腦底ニ偶然ニ發見セル眞珠腫ナリ腫瘍ノ大サハ胡桃大ニシテ位置ハ右側顳額葉尖端トワロリー氏橋トノ界ニ存在ス橋ハ爲メニ多少扁平ヲ呈スルトモ腫瘍ノ侵入ヲ蒙ラズ其ノ周圍ノ腦神經モ何等ノ壓迫ヲ受ケズ腫瘍ハ薄キ被膜ヲ以テ覆ハレ基底面ニ於テ橋ノ軟腦膜ト癒著セル外周圍トノ境界ハ分別ナリ橋ノ軟腦膜附著部及ビ周圍ノ軟腦膜内ニ二三ノ小ナル結節ヲ散在セリ。

組織的ニハ腫瘍實質ハ菲薄ナル結締織性被膜ニ接シ層疊ヲナス扁平上皮細胞ヨリナリコレガ中央ニ於テハ核ヲ缺ク鱗屑ニ化シ層疊性ニ重積セリ多量ノこれすてりん板及脂肪殊ニ脂肪酸ヲ含有スコレハ鱗屑間又ハ細胞内ニ存在セリコノ肉眼的及ビ顯微鏡的所見ニヨリ本例ハ定型的眞珠腫ニ屬スルモノナルコト疑ヒナシ。

凡ソ眞珠腫ハ種々ノ處ニ出現ス頭蓋腔内外聽道中耳及ビ尿道路ノ腎盂ヨリ尿道間等ナリ其ノ中外耳中耳及ビ尿道路等ニ來ル多數ハ慢性炎衝ノ結果上皮ガ化生ニ陥リ表皮化シ角化層疊ヲ來タセルモノニシテ炎衝性化生ニ屬シ眞性ノ眞珠腫ナラザルモノ多シコレハ眞性眞珠腫ニ對シ假性眞珠腫ト呼稱セラレベキモノナリ之レニ反シテ頭蓋腔ニ發生セル大多數ハ炎衝ト何等ノ原因の關係ヲ有セズ眞性眞珠腫

織的性状ハ主腫瘍ト同様ニ結締組織膜ヲ以テ被ハレオル上皮性組織ヨリナル主腫瘍ト何等ノ連絡ヲ發見スルコト能ハザリキ故ニ本例ハ其ノ發生ハ多發性ニシテ主腫瘍ノ他コレト發育時期ヲ異ニスル他ノ小結節ヨリナリオルモノナリ本例ガモシ結核ノ爲メ死亡セザリシトセバ腫瘍ハ尙増大シ從テ其周圍ノ小結節ト癒合シ單獨性腫瘍ニ變化スル可能性アルベシ故ニタトヘ孤在性ニ見ユルモ實際ニテハ癒合性腫瘍ト見做スベキモノ、在存ハ拒ミ難シ故ニ余ハ本例ノ如ク眞珠腫ノ多發性ノ發生ハアリ得ベキモノト信ズ而シテコレガ研究ニハ發育ノ早期者ニ待タザルベカラズ加之胎生時組織ノ迷芽ハ屢々多發性ニ出現スベキハ他ノ臟器ノ場合ニ於テモ實驗セラルモノナレバナリ

本腫瘍ノ呈スル症狀ニ就テハ一般ニ腫瘤ノ大ナル割合ニコレヲ起コスコト少ナキヲ常トスコレ腫瘍ノ存在ノ部位及其ノ大サニ關係スルモノナルモコレ本腫瘍ガ良性腫瘍ニ屬シ其ノ發育ノ頗ル緩慢ニ行ハレオルガ爲メナリ從テ病理解剖上ニ於テ偶然ニ發見スルモノ多シ本例ノ如キハコレニ屬シオリ橋ノ右側ニ於テ多少ノ壓平ヲ生ジオルモ腦症或ハ腦神經幹ノ刺戟或ハ癲癇症狀ヲ見ザリキサレド被膜下ノ表皮組織ハ尙充分ナル増殖性ヲ有スルヲ以テ若シ本患者ガ長生センカ或ハコノ存在部ニ相當セル症狀ヲ生ジタルヤモ計ラレズ唯 *Ependymoma* ノ例ハ、小腦橋角ニ存在セル腫瘍ニシテ脊髓ニ發生的畸形ヲ伴ヒ本腫瘍ガ癌腫性ニ變性シ腦室腦脚及ビ脊髓ノ軟膜ニ浸潤シ居レリ如斯キ例ニ於テハ相當ノ腦症ヲ伴フモノナリ

結 論

本例ハ二十四歳ノ男子ノ腦底ニ發生セル定型的眞珠腫ナリ患者ハ結核ノ爲メニ早年ニ死亡セルモノニシテ本腫瘍ニ依ル腦症ハ全ク缺如セリ。

本腫瘍ハ其ノ存在ノ部位ハ *Boström* 氏ノ第二群ニ位シ主腫瘍ノ他數個ノ小ナル同様ノ腫瘍結節ヲ伴ヘリ而シテ其ノ發生ハ多發的ナリ。

稿ヲ終ルニ臨ミ恩師川村教授ノ懇切ナル御指導ト御校閲ノ勞ヲ賜ハリシニ對シ深く感謝ノ意ヲ表ス

主ナル文獻

○佐野・腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

○佐野・腦底ニ發生セル眞珠腫ノ一例

四八

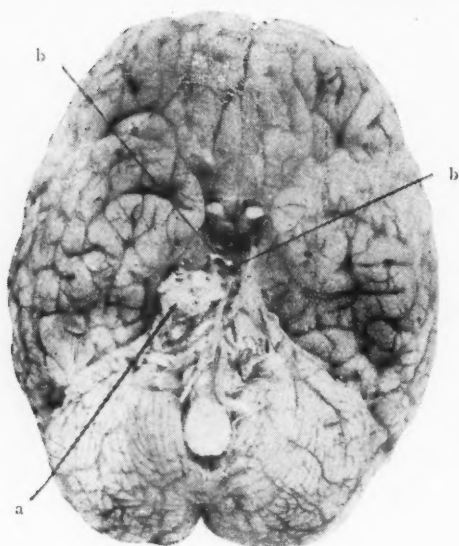
由是 *Maclean* 氏ノ考案ニテハ眞珠腫ハ個々ノ腦部ノ最初ノあんならげ及發育期ニ於ケル表皮胚芽ノ迷芽ニ依リテ起ルモノニシテコノ説ヲ立證スル他ノ事實ハ中腦小胞ヨリ發生スベキ *Polythrichocercari*, *Topera quadrigemma*, *geniculata int.*, *Amygdalus*, *Sylvii* 等ニハ未ダ確實ナル眞珠腫ノ發生ヲ證明セザルナリト今コレヲ本例ニ鑑ミルニ其ノ存在ノ部位ハ *Bassem* 氏ノ第二群ニ相當スルモノナリ

本腫瘍ノ年齡的關係ニツイテ *Maclean* 氏ハ明カナリシニ二十八例ヲ調査セルニ一 十歳 一例 十 二十歳 三例 二十三十歳 四例 三十一 四十歳 十三例 四十 五十歳 一例 五十一 六十歳 四例 六十 七十歳 一例 七十一 八十歳 一例 ニシテ四十年代ニ多ク實驗セラレタリ

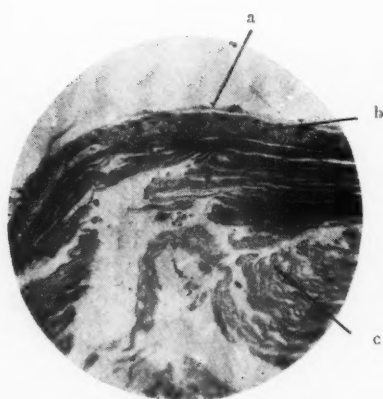
一 十歳ノ一例ハ *Neumüller* 氏ノ五歳ノ少女ナリキ余ノ例ハ二十四歳ニシテ比較的早期ニ發見セラレオル例ニ屬セリ *Bassem* 氏ニヨレバ腦小胞ヨリ分離スル表皮胚芽ハ明カニ甚ダ小ナルモノニシテ唯少數ノ細胞ヨリナルモノナルヲ以テ出産ノ際肉眼ヲ以テ認識シ得ベキ大サニ達シオラズ從テ觀過サレ易シコレ眞性眞珠腫ガ幼年兒ニ發見セラレズ唯十年代ニ於テ僅カニ一例ノ報告アルノミナリト

眞珠腫ノ多發性ニ就テハ *Bassem* 氏ハ同時ニ二ツノ或ハ數多ノ表皮胚芽ガ腦軟膜ノ基地ニ到達シコレガ發育スルヲ可能性アルモ多發原發性眞珠腫形成ノ確實ナルモノハ未ダ實驗セラレザルコトヲ述ベオレリ、サレド *Virehow* 氏ノ眞珠腫ヲ以テ蜂蟻性又ハ多室性腫瘍ト考ヘ腦軟膜ノ小結締織囊中ニアル各眞珠ハ主腫瘍ノ周圍ニ新生シコレガ其ノ結締織性牆壁ノ消失ニ依リ二次的ニ癒合スルコトヲ述ベオレリ *Nietzer* 氏 本腫瘍ヲ以テ孤在性ノ結締織膜ヨリ圍繞セラレオルカ或ハ多發性ニ光澤アリ疎鬆ニ腦軟膜又ハ大腸中ニ存在スル小結節或ハ結節ヨリナルコトヲ成書ニ記載シオレリ *Thomas* 氏モ同様ニ述ベオレリサレド *Bassem* ハカクノ如キ多發性發生ヲ以テ事實ニ添ハザルコト、ナシ迷芽セル上皮ノ生長乃至増殖條件ノ適當或ハ不都合ナルニ依リ腫瘍ノ種々ナル部分ヨリ周圍ニ向テ前進シカクシテ腫瘍ノ周圍ニ多少分離セル周圍ヲツタルモノニシテ氏ハ其ノ兩者非難ナキ連絡ヲ證明シ得タルコトヲ述ベ居レリ且ツ主腫瘍ノ周圍ニ存在セル小結節ハ腫瘍組織ノ異物トシテノ作用ニヨル蜘蛛膜蓋ノ内被細胞ノ増殖ノ結果ナラント考ヘオレリ余ノ例ニ於テハ主腫瘍ノ直接破膜ニ密接セル小眞珠腫及コレヨリ少離ンタル部分ニ於テ腦軟膜中ニ二三ノ實質大ノ小結節ヲ發見セリ其ノ粗

第一圖



第二圖



(S. Sano.)

- 1) **Ribbert**, Geschwulstlehre. 1904. 2) **Borst**, Die Lehre von den Geschwülsten. Band I. 1902. 3) **Kaufmann**, Lehrbuch der Spezielle Pathologische Anatomie. 1922. 4) **Boström**, Über die platten Epidermoide, Dermioide und Lipome und deren Dermioide. Centrall. f. allg. Path. und Path. Anat. Band VIII. 1897. 5) **E. Fränkel**, intrakranielles echtes Cholesteatom. Münchener. Med. Wochenschr. 1921. 6) **Vorse**, Zwei Fälle von Cholesteatom der Hirnbasis. Münch. Med. Wochenschr. 1918. 7) **Ramm, R.**, Zur Histologie und Histogenese des Hirncholesteatoms. Centrall. f. allg. Path. und Path. Anat. 1921. 8) **W. R. Meyer**, Zur Kasistik der epi-dermoidealen Cholesteatome des Gehirns. Virchows Archiv. Band 211. 1912. 9) **Ernst**, Häufung dysontogenetischer Bildungen am Zentralnervengystem. Verhandlungen der Deut. Path. Gesellschaft. Band XV. 1912. 10) **Küttner**, Cholesteatome der Gehirnbasis und Kleinhirnrücken winkeligeschwulstige. Münch. Med. Wochenschr. 1910. 11) **Fritz Stromeyer**, Über ein mit Sarkom kombiniertes Cholesteatom des Gehirns. Beiträge zur Path. Anat. Band 47. 1910. 12) **Binder und Schwalbe**, Ein Cholesteatom des Gehirns. Verhandl. der Deut. Path. Gesellschaft. 1909. 13) **Thomas**, Cholesteatomata of the brain. The Journal of Medical Research. Vol. III. 1901. 14) **Behrendsen**, Ein Fall von gleichzeitigem Auftreten zweier Verschiedenartiger Hirntumoren. Deut. Med. Wochenschrift. 1899. 15) **Van Oordt, M.**, Beitrag zur Symptomatologie der Geschwülste des Mittelhirns und der Brückenhaube. Centrall. f. allg. Path. und Path. Anat. 1901. 16) **Benda**, Zwei Fälle von Cholesteatom des Gehirns. Münch. Med. Wochenschrift. 1897. 17) **Nehr Korn**, Ein Fall von meningealer Perigeschwulst. Beiträge zur Path. Anat. 1897. 18) **山村氏**, 腦底ニ發生セルこれすてあと一む. 醫學中央雜誌. 四卷. 二號. 日本醫學. 三十二ノ三. 日本外科學會雜誌. 七ノ五六六.

附圖說明

第一圖 腦底ニ發生セル眞珠腫

a 主腫瘍 a 其ノ他ノ小ナル腫瘍結節

第二圖 腫瘍ノ顯微鏡寫眞(強擴大)

A 被膜

B 層疊上皮細胞層ノ基底部及顆粒細胞層

C 内側ノ層疊ラナセル鱗層

鯛 (*Pagrus major*) 並ニ比目魚 (*Paralichthys olivaceus*) ノ腫瘍ニ就テ (附圖五個)

新潟醫科大學病理學教室

助 手 風 間 美 顯

種々ナル刺戟ガ腫瘍發生ノ原因トナリ得ルコトハ單ニ臨牀上乃至病理解剖上想像セラレシノミナラズ今ヤ實驗的ニフイービーゲル、(すびろぶらら癌) 山極市川(たゝる癌)こふし(圓蟲類寄生ニヨル蛙癌)バルロック及カーチス (*Taenia crassicoilis*) 飼食ニヨル(らて肉腫) 諸氏並ニ余ノ(びちろゝる、ら) のりん注入、石、膽石、縫合絲結節等ノ插入ニヨル膽囊破壞性腺腫)ニヨリ確證セラレタル所ナリトス、即チ刺戟ハ腫瘍發生ノ原因トナリ得ルコト明カナリ。

然レドモ是レ等刺戟ニヨル腫瘍形成ニ於テハ刺戟ノ種類(性質)強サ(量)ト臓器的個人的乃至生物學的素因トノ間ニ於ケル要約ノ完備ヲ必要トスルモノナルベキコトハ余ノ唱道セル所ナリ。

從テ腫瘍發生原因ニ對スル素因ノ研究モ腫瘍發生學上亦重要ナルコト多言ヲ要セズ

此ノ見地ヨリシテ余ハ吾人ガ常ニ對象動物トシテ使用セル溫血動物ニ對シ生物學的ニ比較的大ナル差異ヲ有スル冷血動物ニ於ケル腫瘍ノ如キ亦興味アルモノナリト信ジ魚類腫瘍ノ研究ヲ企テ其ノ第一歩トシテ魚類偶發腫瘍ノ發見ニ努メ既ニ蛙ノ肉腫ノ一例ヲ發見セルコトヲ報告セルガ其ノ後鯛並ニ比目魚ニ於ケル腫瘍ヲ發見セルヲ以テ其レ等ニ就キ茲ニ略述セント欲ス。

○風間・鯛 (*Pagrus major*) 並ニ比目魚 (*Paralichthys olivaceus*) ノ腫瘍ニ就テ

第四例 體長一尺六寸、體重三百五十匁。

體外面ニ異常ヲ見ズ第七、八腰椎下刺狀突起ノ略、中央ニ於テ輕度ノ紡錘狀肥厚ヲ認ム、硬固ニ觸知ス。

第五例 體長一尺八寸、體重四百匁。

體外面ニ變化ヲ認メズ、第六、腰椎下刺狀突起ノ略、中央ニ於テ小指頭大紡錘狀ノ隆起ヲ認メ表面ニ縱ニ走レル平行セル溝ヲ見ル、骨樣硬度ヲ有ス。

第六例 體長一尺五寸、體重三百匁。

第七腰椎下刺狀突起ノ略、中央ニ於テ小指頭大紡錘狀ノ隆起ヲ見ル、表面縱走セル溝ヲ認ム。

剖面ハ何レモ第二例ノ其レト同様ノ像ヲ呈ス。

顯微鏡的所見 第二例ヨリ第六例ニ至ル五例ハ顯微鏡的ニハ全ク同様ノ所見ヲ呈ス。

即チ腫瘍外面ハ全ク正常骨ノ如キ造構ヲ呈シ其レヨリ内面ハ全ク海綿狀ノ骨梁ヲ形成スルコト正常魚骨骨梁ノ如ケレドモ各骨梁間ノ間腔ノ大サ竝ニ形狀甚ダ不整ニシテ各骨梁ノ幅著シク正常ノモノヨリ廣シ、各間腔ハ主トシテ脂肪組織ヨリナルモ其ノ脂肪顆粒ノ大サ大小不同ニ且ツ屢々粘液變性ニ陷レルヲ見ル而シテ其ノ間大ナル核ヲ有スル骨髓細胞竝ニ血球ヲ混在ス。

總括及考案

一、余ハ新潟海濱產鯛 五百尾中六尾ニ於テ骨腫ヲ發見セリ。

二、第一例ハ下顎骨中央部ニ發生セル拇指頭大磊塊狀ノ骨樣硬度ヲ有スル腫瘍ニニシテ顯微鏡的ニハ主トシテ骨實質ノ外方ニ増殖セル外骨腫ト認ムベキモノナリ。

第二例乃至第六例ハ何レモ腰椎下刺狀突起ノ恰モ腎鰭附著部ニ一致セル第六、七、八刺狀突起ニ於

○風間・鯛 (*Pagrus major*) 竝ニ比目魚 (*Paralichthys olivaceus*) ノ腫瘍ニ就テ

一、鯛ノ骨腫

實驗例

魚類ノ骨腫ニ就テハ余ノ寡聞ナル *Plehn* 氏ノ鮫ニ於ケル報告例アルノミニシテ未ダ嘗テ鯛ノ骨腫ノ報告ヲ見ズ

余ノ検査材料ハ何レモ新潟海濱ニテ捕獲セルモノニシテ常市學校町一番町鮮魚商水勝ニ到着セルモノナリ其ノ總數五百尾中六尾ニ於テ骨腫ヲ發見セリ。

第一例 體長一尺二寸、體重二百匁。

肉眼の所見 下顎部略中央ニ於テ約拇指頭大不正半球狀ノ隆起ヲ見ル更ニ其ノ中央竝ニ左側方ニ於テ大豆大ノ半球狀隆起ヲ生ジ骨樣硬度ヲ有ス、此レヲ覆フ皮膚ハ著シク緊張シ多少灰白帶褐色ノ調ヲ有ス。

剖面 外面ニ接近セル部特ニ隆起部ハ灰白色同質性ナレドモ深部ニ於テハ點狀ノ白色ノ斑點ヲ認ム。
其ノ他外面竝ニ内臟、骨骼等ニ全ク異常ヲ認メズ。

顯微鏡的所見 腫瘍ヲ覆フ皮膚ハ或ル部ハ多少肥厚シ或ル部ハ却テ薄クナレリ。腫瘍部ハ全然へまときしりんえおじんニ淡紫紅色ニ一樣ニ染色セル骨組織ヨリナリ、其ノ中ニ大小形狀種々ナル管狀乃至圓形、橢圓形、不整圓形等ヲ呈セル間腔ヲ見ル、而シテ是レ等間腔ハ腫瘍内部ニ移行スルニ從ヒ其ノ數竝ニ大サヲ増加シ中心部ニ於テハ全ク海綿狀ヲ呈ス、而シテ是レ等間腔ハ脂肪組織及骨髓細胞竝ニ毛細管ヲ混有ス、脂肪體ハ所ニヨリ粘液變性ニ陷レルヲ見ル。其實ハ纖維樣構造ヲ有スルモ骨髓細胞ヲ認メズ。

第二例 體長一尺五寸、體重三百匁

外部ハ全ク異常ヲ認メザルモ第六、七、八腰椎下刺狀突起ノ(臂鰭ノ附著部ニ一致セル部)略中央ニ於テ示指頭大乃至拇指頭大ノ紡錘狀乃至球狀ノ腫瘍ヲ認ム、灰白色ニシテ光澤ヲ有シ滑カナル表面ヲ有シ骨樣硬度ヲ有ス、剖面ハ粗鬆ニシテ摺硝子ノ如キ觀ヲ呈ス。

第三例 體長二尺、體重五百匁

外部ニ著變ヲ見ズ前例同様第六、七腰椎下刺狀突起ノ略ニ中央ニ於テ中指頭大紡錘狀ノ隆起ヲ認ム其ノ性狀ハ全ク前例ト同様ナル毛表面ノ縱走セル溝著明ナリ、

脂肪組織中一部結締組織ノ強ク發育セル部ヲ認ム、

第二例 腸間膜囊腫 (大正十一年六月二十三日)

體長六寸五分、體重百匁。

體ノ外面ニ著變ヲ見ズ、體腔中腸間膜ニ一致セル部ニ於テ約鳩卵大ノ囊性腫瘍ヲ見ル其ノ壁ハ纖維性ノ薄キ膜樣物ヨリナル内容ハ暗赤色ノ柔軟ナル粘稠性物質ヨリナルモ一部ニ於テハ骨樣硬度ヲ有スル組織ヲ含有ス此ノ部ニ於テ内容ハ囊壁ニ癒著ヲ營ム。

顯微鏡的ニハ囊壁ハ纖維性結締組織ヨリナリ其ノ内面(内容ニ接セル面)ニ於テハ多クノぶそいとむ細胞ヲ認ム、其ノ間諸處ニ圓形細胞浸潤ヲ見ル。

内容ハへまとさじりんえおじんニ淡紅紫染セル同質性粘液樣物質トへまとさじりんニ濃紫染セル大小種々ナル顆粒狀物質ト竝ニ囊壁ニ癒著セル部ニ於テハ骨髓ヲ有スル不規則ナル骨組織トヨリナル。

總括及考案

余ハ新潟海濱產比目魚一千尾中二尾ニ於テ腫瘍ヲ發見セリ即チ筋肉内脂肪腫及腸間膜囊腫ノ各一例之レナリ。

第一例ハ比目魚臀部背面ニ於ケル指頭大ノ筋肉内脂肪腫ニシテ恐ラク筋鞘ヨリ發生セルモノナルベク。

第二例ハ其ノ腸間膜ヨリ發生セル鳩卵大ナル腸間膜皮樣囊腫ト稱スベキモノナリ。

何レモ其ノ發生原因ニ就テハ全ク不明アリ。

三、結論

以上余ノ檢索セル蛙、鯛竝ニ比目魚ノ腫瘍ノ所見ヨリ結論スルコト左ノ如シ。

○風間・鯛 (*Paralichthys olivaceus*) ノ腫瘍ニ就テ

テ多發性ニ發生セル小指頭大乃至拇指頭大ノ紡錘狀乃至球狀ヲ呈シ表面平滑ナレドモ縱走セル溝ヲ有シ骨樣硬度ヲ有スル腫瘍ニシテ顯微鏡的ニハ海綿狀造構ヲ呈セル骨質ヨリナル内骨腫ト稱スベキモノナリ。

而シテ何レモ骨質ハ纖維狀造構ヲ呈シ骨細胞著明ナラズ。

四、本骨腫發生原因ニ就テハ明カナラズト雖モ恐ラク第一例ハ外傷等ニヨルモノナルベク。

第二乃至第六例ハ何レモ腎鰭附著部ニ一致セル腰椎下刺狀突起(第六、七、八)ノ略々中央ニ發生セルコト及大ナル鯛(高齡)ニ多キコトヨリ考フル時ハ本骨腫發生ハ腎鰭ノ運動ニヨル機械的刺戟ガ原因的關係ヲ有スルモノナルベク思考サル。

二、比目魚ノ腫瘍

比目魚ノ腫瘍ニ就テハ余ノ寡聞ナル未ダ其ノ報告ニ接セザル所ナルガ余ハ新潟海濱産(ニシテ當市學校町鮮魚商水勝ニ到著セル)比目魚一千尾中脂肪腫及ビ腸間膜囊腫ノ各一例ヲ得タリ。

第一例 脂肪腫(大正十一年五月十二日)

體長二尺七寸、體重一貫二百目、[♀] 比目魚ニシテ體ノ外面ニハ全ク異常ヲ認メズ。

尾部腹面上刺狀突起ニ面セル部ノ筋肉内ニ於テ約中指頭大球狀ノ灰白色ヲ呈セル腫瘤ヲ認ム、硬度柔軟ニシテ周圍筋肉トハ比較的銳利ニ境セラル。

顯微鏡的ニハ腫瘍ハずだんニテ紅染セル脂肪組織ト此レヲ海綿狀ニ區分セル細胞ニ乏シキ結締組織纖維トヨリナリ是レ等間質結締組織纖維ハ諸處強ク發育セル所ヲ見ル斯ル部ニ於テハ圓形細胞浸潤ヲ見ル而シテ是レ等脂肪組織ハ徐々ニ筋組織中ニ移行ス其ノ境界部ニ於テハ筋纖維束ハ不規則ニ配列シ且ツ筋間結締組織ハ所々肥厚シ圓形細胞浸潤ヲ認ム

圖 一 第



圖 三 第

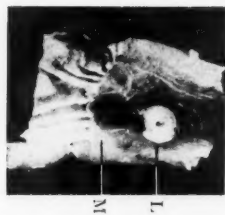


圖 四 第

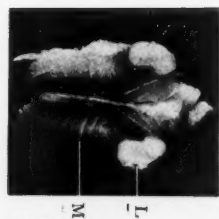


圖 二 第

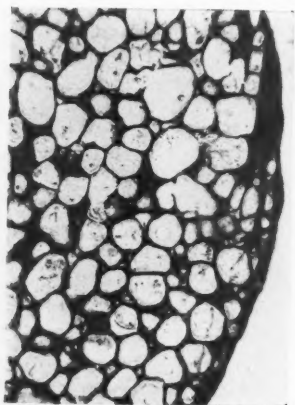
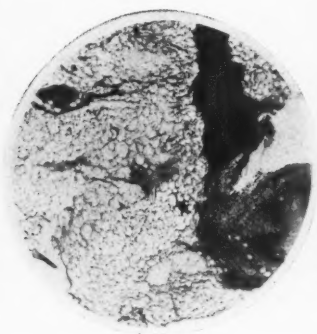


圖 五 第



(M. Kazama.)

○風間・鯛 (*Lagus major*) 竝ニ比目魚 (*Paralichthys olivaceus*) ノ腫瘍ニ就テ

五六

一、從來甚ダ稀有ナリト信セラレタル魚類ノ腫瘍モ精査スルコトニヨリ種々ナル魚屬ニ種々ナル腫瘍ヲ發見スルヲ得ベシ。

二、余ノ發見セル鮭ノ肉腫、鯛ノ骨腫、比目魚ノ脂肪腫竝ニ腸間膜囊腫ニ於テハ形態學的ニ腫瘍構成組織ノ固有ノ生物學的差異ノ存スルノミニシテ腫瘍ノ生物學的性狀ニ於テハ全ク人間乃至溫血動物ノ其レト殆ド同様ナリ但シ鮭ノ紡錘狀細胞肉腫ニ於テハ形態學的ニ甚ダ惡性ノ像ヲ呈スルニモ拘ラズ轉移ヲ認メザリシハ溫血動物トハ冷血動物トノ間ノ生物學的差異ト稱スルヲ得ンカ。

(本編ノ大要ハ大正十一年十一月北越醫學會例會席上ニ於テ發表セルモノナリ)

附圖ノ説明

第一圖ハ鯛ノ腰椎下刺狀突起ニ於ケル骨腫ノ肉眼の標本寫眞(第二例)○ハ骨腫

第二圖ハ同第四例ノ顯微鏡の標本寫眞

第三圖ハ比目魚ノ尾部筋肉内脂肪腫ノ肉眼の標本寫眞

第四圖ハ同斷面Lハ脂肪腫、Mハ筋肉、

第五圖ハ同顯微鏡の標本寫眞

癌腫ノX線治療成績(報告第二)

醫學士 山川 保城

癌研究會ガ學術研究ノ獎勵補助事業以外癌腫ノ治療計劃ヲ立テ東京帝國大學ノ好意ニヨリ其ノ附屬醫院内ニ治療所ヲ設ケ診療ヲ開始シテヨリ一ケ年(大正十二年一月ヨリ同年十二月迄)ヲ經過セリ其ノ間治療セル癌患者合計百〇五例ニシテ其ノ大多數ハ病勢ノ著シク進捗セルモノナリ即チ手術不可能ノモノ或ハ廣汎ナル轉移ヲ有スルモノ或ハ羸瘦甚シキモノニシテ從ツテ其ノ成績ノ餘リ思ハシカラザルハ止ムヲ得ザル所ナリ先ヅりえんふると管球ガX線深部療法裝置ラじおしれくすニヨリ發生スルX線ノ性質及量ヨリ述ブ可シ。

X線ノ硬サ

X線管球ヨリ射出セラル、X線束ノ性質ハ其ノすべくごるむ分布ニヨルモノニシテ波長吸收率半價層吸收曲線不均等性因數等價電壓等ヲ以テ定ム深部療法ノ目的ヲ充分ニ達セシムルニハX線ノ硬キ事即チ透過力大ニシテ一定ノ病竈ニ作用スルX線量充分ナラザルベカラズ現今深部治療ニ使用サル、X線管球ヨリ放射セラル、線ハ透過力大ナリト雖モ實用的均等性ヲ得ルニハ充分ナル濾過ヲ要スカクテ濾過セラレタルX線ノ性質ハ前記波長吸收率等ヲ以テ測定スルモノナレドモ單ニ最短波長ノミ又ハ吸收率ノミヲ測レルニテハ不充分ニシテ兩者ヲ測定シテ始メテ全キヲ得ルナリ。

波長 X線管球ヨリ射出セラル、ガ絶對的均等性即チ同一波長ノ線ヨリ成立スルモノナレバ其ノ定



線ハ單色ナラザルベカラザルガ若シ不均等性ナレバすべくとるむニ分解スルカ單ニ實用ノ目的ニハ充分ニ濾過シテ吸收率ガ吸收體ノ厚サニハ關係セザルガ如キすべくとるむノ一部トナシテ測定ス之レガ即チ實用的均等光線ニシテ深部治療ニ用キラル、モノナリえれくとるすこーぶヲ用キテ 300K.V 管球電壓8mA電流 0.5 亞鉛+2.0 あるみにゆーむ濾過ノ際ノあるみにゆーむノ吸收率ハ次ノ如シ。

$$nAl = 0.41 \quad \left(\frac{H}{S}\right) Al = 0.15$$

濾過	$n Al$	K.V
デッサウエル氏	0.49	182.
ロキントツ氏	0.65	"
ローレンツ氏	0.42	"

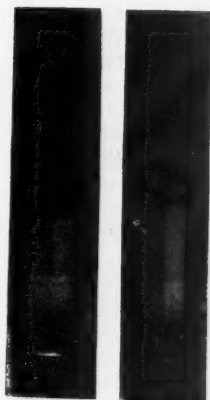
デッサウエル氏ハあるみにゆーむノ吸收率ヲ $\frac{H}{S}$ ヲ以テ現ハセシガウキンツ氏ハ水ノ吸收率ヲ測定シ%深部量ヲ以テ現ハセリ例ヘバ二〇%深部量トハ實用的均等光線ガ二三浬皮膚焦點距離六乃至八平方浬放射野ニテ皮膚表面ニ作用スル時其ノえねるぎーノ二〇%ガ尙水層一〇浬ノ深サニテ尙ホ測リ得ルコトヲ示スいおんごくわんちめーたーヲ用キテ種々ノ距離、種々ノ放射野ニテ反復測定セルニ次ノ如シ。

皮膚焦點距離	放射野	%量	濾過	電壓
23	6×8	23	0.57m+2.0Al	90K.V
50	10×15	46	"	"

吸收曲線 坐標ノ縱軸ニ吸收層ヲ通過セル後ニ測定セルX線ノえねるぎーノ對數ヲ取り横軸ニ吸收

義ハ絶對ニシテ且ツ一義ナレドモ實用的均等線束ハ其ノ波長相互ニ約一〇%相違スルモノナレバ測定セルモノハ平均ノ波長ナリ即チ全線束ニ等シキ性質ヲ現ハス波長ナリ左圖ハりえんふゐると管球ガラジおしれくすニテ發生スル白金ノ高週波すべくさるむナリ。

管球電壓 90K.V. 管球電流 5mA 週波數 5001 秒最短波長 $\lambda_0 = 0.68\text{\AA}$.



1.04E/Cu 濾過 平均波長 $\lambda_0 = 0.16\text{\AA}$ E.
無濾過

0.5FE/Zn+2FE/Al 濾過 平均波長 $\lambda_0 = 0.19\text{\AA}$ E.

考

ガラスセル $E_{\lambda_0} = 0.15\text{\AA}$ E. 200KV. 0.75cu+1.0Al (一リツち管球)

吸収率X線束ガ一ノ物體ヲ通過スル際ニハ多少吸収サル、モノニシテ普通ノ吸收體ニ對シテハ波長ノ短縮ト共ニ吸收ハ減少スルモノナリ對陰極ヨリ射出セラレタルX線束ガ吸收體ニ射入スル時ノ強度ヲI₀トシ射出後ノ強度ヲI₀トスレバ

$$I = I_0 e^{-\mu d}$$

ニシテeハ自然對數ノ基數dハ吸收體ノ厚サ μ ハ吸收率ナリ μ ハ波長 λ 及ビ原子數Zノ函數ニシテ吸收率ハ眞性吸收率 μ ト散亂吸收率 μ_0 トヨリナルサテ實驗ニヨリテX線ノ吸收率ヲ測定スルニハ其ノ

皮膚焦點距離	濾過	放射野	電流	電壓	F
30cm	$0.5Zn+0.5Al$	6×8	8mA	90K.V	8

如述ノ物理學的量ノ代リニ生物學的量ヲ以テセルハサイツ及ウキンツ兩氏ナリ兩氏ハ表面放射量ヲ皮膚極量ニテ定メ之ヲ一〇〇單位トセリ之ハ以前ノ紅斑量ヨリ稍價低キモノニシテ放射後八乃至十日目ニ僅ニ皮膚紅潮ヲ呈シ四乃至六週後ニハ褐紅色ヲ呈スルモノナリ然シ皮膚ノ著色變化ヲ見ルハ視方ニヨリテ異ルモノニシテ正確ナルモノナラズ次表ヲ參考トシテ大體ニ皮膚極量ニ達スル時間ヲ測定セリ

ヒルマン・ソリー氏	0.5Zn+2mmAl	23種	80K.V.	6×8 野 8mA	20—22分
ヘルマン・シューマン氏	"	"	90K.V	"	15分

斯クノ如クシテ使用セシX線ノ硬サ及ビ強サヲ知リサイツ、ウキンツ氏ノ所謂癌量ヲ病竈ニ送ルコトヲ努メタリ。

前處置

診斷ヲ確實ニスル爲ニ臨牀的觀察ノ外ニ可及的組織的檢查ヲ行ヘリ放射ハ空腹時ニ行ヒ既ニX線治療ヲ受ケシ患者ニシテ六週間以內ノモノニハ該時間ノ經過ヲ待チテ放射セリ蓋シ放射ニヨリ變化ヲ受ケシ血液像ハ大體コノ期間內ニ正常ニ復スル故ナリ又胃及ビ腸ノ診斷ノ目的ニ藥物ヲ投與セシ場合ニハ全ク體外ニ排泄セラル、迄待テリ數日前ヨリ便通ヲ整調シ殊ニ腹部放射ノ際ニハ其ノ直前ニ排尿排便ヲ行ヒテ腸及ビ膀胱ヲ全ク空虚ニシ以テ糞便ニヨリ著シク腸ノ刺戟サル、コトヲ防グリなるこぼんぱんとぼん等ノ注射ヲ併用セリ。

○山川・癌腫ノX線治療成績

層ノ厚サヲトレバーノ吸收線ヲ得ルモノニシテ若シ均等光線ナレバ直線ヲナス。實驗スル機會ヲ得ザリシガリリエンフルド氏ガらぢおしれくすニテナセル實驗ニヨレバ半價層ノ對數ハ直線ヲナスト。

X線ノ強サ

X線ノ表面えねるぎーハ任意時間 t 内ニ單位面積ニ垂直ニ放射セラル、線ノ流レヲ意味シ對陰極ヨリ射出スル線ノ流レヲ ϕ トスレバ

$$I = \frac{\phi}{f \cdot t}, \quad \frac{\phi}{f} = J \quad I = J \cdot t$$

トナリJハ強サヲ示ス強サノ測定ニハ直接、間接法トシテ種々アレドモ空氣ノいおにざちおんヲ應用スルトキハ選擇吸收ノ缺點ヲ除去シ得ル故ニ比較的正確ニ強サヲ測定シ得ルナリX線ガ空氣ノ充チタル間腔ヲ通過スルトキニハいおにざちおん起リ發生スルいおん量ハ吸收サレタルX線ノえねるぎーニ比例スコノ理ヲ應用シテ作レルいおんごくあんちめーたーノ指針ノ走行スル時間ハ吸收サレタルえねるぎーノ大ナル程速シ即チ走行時間ハ強サニ逆比例シ半價層ニ正比例ス。故ニ比較的同種類ノX線ナレバ一定ノ示標内ヲ走行スル時間ニテ強サヲ比較シ得ルナリ。

皮膚焦點距離	放射野	濾過	電流	電壓	時間秒	指標
60	6×8	0.5/2+2.0Al	8	50K.V	20	10

フュールステナウ氏深部治療用いんでんじめーたーニテ測ルニ次ノ如シ該器ハせれにうむノ抵抗ノ變化ヲ利用セルモノニシテ選擇吸收ヲナス缺點アレドモ短波長ノ際ニハ比較的少シ唯 $\lambda = 0.96\text{\AA}$ ニ $\lambda = 0.43\text{\AA}$ ニ E ノ間ニ選擇吸收大ナリ。

續時間ヲ短縮シ或ハ注射セザル場合ニ比シ副作用ヲ輕度ナラシムルヲ得タリマーチルト、ツアッヘル氏等ハ之レ葡萄糖注射ニヨリ組織ヨリ血液ニ向ツテ體液ノ流通ヲヨクシ以テ放射ニヨリテ起レルあしどーじすヲ中和シテあるかり平衡ヲ保タシムルニ依ルト解セリ其ノ他ウキダール、ハンスチーベルマン等ハ植物性神經ニ關聯アリトシヘンリヒルシユハ内分泌臓器ニ關係アリトセリ次ニ血液ノ蒙レル障礙ヲ補足スル意味ニテ砒素劑、鐵劑等ヲ投與シ分解產物ヲ速ニ體外ニ除去スル意味ニテ腸洗滌（直腸癌）合嗽（口腔内癌腫）過まんがん酸加里ノ濕布（皮膚癌）等ヲ施セリ一時的疼痛ノ劇増ニハ種々ノ鎮痛藥ノ注射ヲナセシガあごふあんノ内服ニヨリ著效ヲ奏セシ場合モ少カラズ。

上顎齶癌（七例）

病側ノ前面、側面ヨリ健康側ノ側面ヨリ及ビ口腔側ヨリ放射セリ同時ニ頸腺轉移ヲモ放射セリ時ニハ臭化らじうむヲ頸竇内ニ插入併用ス手術後再發セルモノニアリテハ放射後一兩日ハ劇シキ頭痛、局部疼痛ヲ訴ヘ潰瘍ノ分泌物増加シ或ハ體溫上昇シ疲勞感アレドモ次デ疼痛減退シ分泌止リ約一ヶ月後ニハ腫瘍及腺轉移縮小シ始メ臨牀上殆ンド觸知シ難ク潰瘍面モ清淨平滑トナリ體溫平常ニ復シ體重増加ス然レドモカ、ル良好狀態ノ持續スルコト約二ヶ月ニシテ二例トモ再發シ急劇ニ病勢進行シ死亡セリ原發癌ニアリテハ手術後ノ夫程效果ナケレドモ疼痛減ジ一時腫脹モ著シク縮小スレドモ暫クニシテ再發セリ七例中三例ハ一旦殆ンド治癒シ後再發他四例ハ影響ナシ

頬粘膜癌（二例）

手術後再發シテ頸部淋巴腺轉移甚シク頸強直ヲ呈セル故外方ヨリ遠距離放射口腔内ヨリらじうむヲ

後處置殊ニ放射後ニ現ハル、副作用ト其ノ療法

放射後屢々不快ナル隨伴現象ニ遭遇スルモノニシテ爲ニ患者ハ次回ノ放射ヲ厭ヒ或ハ連續放射ヲ困難ナラシメ充分ノX線量ヲ病竈ニ作用セシムル事不能トナリ從ツテ完全ニ治療ノ目的ヲ達スルコト能ハザル故ニ可及的コノ副作用ヲ豫防除去スルニ勉メタリ副作用トハ全身倦怠、頭痛、違和、惡心(屢々嘔吐下痢)等ノ症狀群ニシテ放射後ハ乃至八時間後ニ現ハレ數時間乃至兩三日間持續スルモノナリガウス氏ハ之ヲれんごげんカーてると命名セリ放射量放射部位及ビ個人的感受性ノ相違ニヨリ症狀ニ輕重アリ其ノ原因ニ關シテハ見解區々ニシテ未ダ真相ヲ捕捉スルニ至ラズ以前ハX線放射ニヨリ癌組織破壊セラレテ其毒素ノ吸收ニヨル血液中毒症ナリト考ヘシガ放射ト副作用發現トノ時間餘リニ早キニ過グ或ハおぞーんニヨル瓦斯中毒ナリト説クモノアリ然シ吾ガ裝置ニテハ瓦斯ノ發生殆ンドナク治療室ハ能フ限り換氣ヲヨクセリキーンベック氏ハ細胞ノ退行變性經過中ニ現ハル、前驅的發揚狀態ナリト解セリウキンツ・シュルンブビーロンリーデルノ諸氏ハ放射ニ際シ人體ガ荷電スルモノナレバ地上ニ導クコトニヨリテ防ギ得ト稱ス然シ直接患者ヨリ地上ニ導ク時ニハ球管ト人體トノ距離少クモ四十糎以上ナラザレバ危險ナル故ニ此ノ方法ヲ試ミシ事ナシ、近來フォールツシールマン、アングーソン等ハ食鹽液ノ靜脈内注射經口の投與注腸ニヨリ副作用ヲ治シ且ツ實驗ニヨリ放射後急速ニ血清中ノ食鹽量ノ減ズル點ヨリ原因ハ血清中ノ食鹽ノ減量ニアリトセリ余モ之ニ倣ヒ十%食鹽液五耗ヲ靜脈内ニ注射シテ良效アリシ場合アリ然シ食鹽液調製ノ煩ヲ避クル爲ニ十%葡萄糖液(武田製)二〇耗ヲ放射後靜脈内若クハ皮下注射ヲナシ多數ノ例ニ於テ副作用ヲ全然豫防シ或ハ既ニ惡心頭痛ヲ起セルモノニハ持

部淋巴腺轉移ヲ起シ衰弱セルモノニハ影響セザリキ四例中二例ハ治愈一例ハ一時輕快。

惡性甲狀腺腫(五例)

左右兩側及ビ前面ヨリ放射ス聲門水腫ヲ起セルモノナシ疼痛減ジ心氣亢進和ギ頸部ノ運動多少自由トナリ腫脹モ少シク縮小スレドモ或ハ衰弱或ハ放射後出血甚シクテ死亡スルモノ多シ五例中四例一時症狀輕減ス。

食道癌(七例)

腫瘍ノ位置及ビ廣狹ハ消息子、れんごげん照射れんごげん寫眞及食道鏡ニヨリテ正確ニ知リ得尙出來得ルモノハ食道鏡ニテ試驗切除ヲナセリ既ニ潰瘍アリテ汚穢惡臭アル粘液分泌物アルモノ初メ疼痛及分泌増惡スレドモ次第ニ疼痛去リ分泌物減少シ一時僅少ナガラ嚥下困難輕減セラルレドモ其以上ノ好果ヲ齎スヲ得ズ七例中三例一時輕快胸面及背面各二部位ヨリ放射シ足ラザル所ハらじうむヲ併用セリ然シ長時らじうむ插入ニ患者耐エズ。

胃癌(十四例)

組織的検査ハナシ得ザレドモ種々ノ方面ヨリ胃癌ニ近キ診斷ヲ下セルモノヲ放射セリ多クハ腫瘍ヲ觸レれんごげん寫眞ニテハ著明ノ陰影缺損アリサイツ及ウキンツ氏ニ從ヒ(イ)遠距離放射 \parallel 五〇 \times 十五放野 \parallel ト(ロ)近距離放射 \parallel 二五 \times 六 \times 放野 \parallel トヲ併用セリ又ステットチル氏ニ從ヒ約百二十度ノ角度ヲ以テ五十 \times 十五放野ニテ放射セリ此際副作用ヲ除クノ意味ニシテ光線角錐束ガ副腎ヲ避クル様ニ球管ヲ傾斜セリ直後既ニ嘔吐、胃痛、惡心、大量ノ吐瀉、全身違和等アレドモ翌日ヨ

○山川・痛腫ノX線治療成績

併用セリ同時ニ淋巴腺轉移ヲモ放射セリ、頬皮膚強キ炎症ヲ起セドモ潰瘍ヲ生ゼズ約二週目頃ヨリ疼痛去リ分泌減ジ腫脹ノ一部ハ柔軟トナリ縮小スレドモ消失スルニハ至ラズ途中口腔内竝ビニ口唇ニ乾燥灼熱感アリ時ニ口唇ノ乾燥甚シク破裂ヲ生ゼル事アリ自覺症狀ハ輕快セシモ其他ハ良影響ナシ

扁桃腺及咽頭腫脹(四例)

頭部ヲ後方ニ彎曲セシメ砂囊ニテ固定シ廣ク開口シ含鉛硝子鏡ヲ以テ中心線ガ扁桃腺ニ向フ如クシ外方ヨリ斜ニ下顎部位ヨリ扁桃腺ニ向フ如ク放射ス同時ニ淋巴腺轉移ヲモ放射ス三週目頃ヨリ特發痛竝ビニ壓痛去リ嚥下困難除去サレ淋巴腺轉移ハ殆ンド觸レザルニ至リ扁桃腺ノ小潰瘍ハ消失セリ只少シク顎強直ヲ殘セリ四例中如上ノ良結果ヲ得タルモノ一例放射後舌著シク腫脹シ腫瘍ヨリ口腔内ニ多量ニ出血シテ死亡セルモノ一例ナリ他二例ハ不詳ナリ

舌癌(四例)

開口器ニテ廣ク開口シ兩側ヨリ放射ス附近淋巴腺轉移モ同時ニ放射ス放射時間中ハ時々舌ノ位置ノ變ゼザルヤニ注意ス病氣ノ初期ニテ未ダ淋巴腺轉移ヲ形成セザルモノニアリテハ臨牀上殆ンド治癒シ約半歲後ノ今日未ダ再發セズ放射後兩三日間ハ局部疼痛劇増シ爲ニ言語障礙セラレ食物攝取モ困難トナリ全身倦怠ヲ覺エタリ次デ疼痛次第ニ消散シテ全ク無痛トナリ舌運動自在トナリ潰瘍面ハ清淨サレ全ク平滑トナリ硬結消失シ體重モ増加シ元氣全ク恢復セリ併用療法トシテ患者ノ近親者(一例ハ娘一例ハ甥)ノ血清ヲ數回注射セリ手術後再發シテ疼痛、潰瘍、硬結ヲ訴ヘシモ未ダ著シク進行セザルモノヲ放射セルニ奏效顯著ニテ全ク疼痛去リ潰瘍硬結ヲ觸視セザルニ至レリ然レドモ浸潤著シク左右ノ

陰莖癌(三例)

陰莖切除後其ノ局部ニ再發セルモノヲ單ニ前面ヨリ六×八厘米放射野ニH放射セシニ一旦疼痛分泌増加セシガ次第ニ潰瘍面ハ清淨サレ腫瘍軟トナリ縮小シ始メ二ヶ月後ニハ疼痛全ク去リ腫瘍ハ痕跡ヲ止メズ消失セリ手術後鼠蹊腺ニ轉移シ潰瘍ヲ生ゼルモノハ一時多少作用セシ如クナレドモ再ビ増悪セリ三例中一例全治。

副腎腫(一例)

腹面、背面ヨリ各二放射野ヲ以テ放射セリ放射後頭痛、疲勞ノ感甚シ放射後腫瘍ハ少シク縮小シ特ニ一方縮小シ疼痛及呼吸困難一時少シク減退セシガ其以上好影響ナシ一例(解剖)。

乳癌(九例)

腫瘍ノ著シク隆起セル時ニハ前後尙側面ヨリ腫瘍ノ中心ニれんごげん線ノ交叉スル如ク放射シ平坦ノ場合ニハ遠距離放射ヲナセリ同時ニ腋窩ハ前後下三面ヨリ鎖骨上下窩ニ浸潤ノ度ニ從ヒ一乃至二放射野ヨリ放射セリ手術不可能ニシテ上下鎖骨窩及腋窩ニ腺轉移ヲ有スル初發癌ヲ放射セルニ數日ナラズシテ腫瘍ハ縮小シ始メ疼痛減ジ浸潤去リテ固定セル腫瘍モ移動シ得ルニ至リ數回ノ放射ニテ著シク縮小セシガ治療持續中ニ疼痛再現シ病側ノ胸部次デ背部次デ健康側ノ皮膚ニ多數ノ散在性豌豆大ノ轉移發生シ全身症狀障礙サレ衰弱加ハリ遂ニ斃レタリ之ハ「硬乳癌」ナリキ手術後胸部皮下ニ數個再發セル拇指大乃至鶏卵大ノ腫瘍ハ放射後約一週ニシテ縮少シ始メテ三乃至四週ニテ消失シ尙再發セザルモノ三例アリ潰瘍ヲ作レルモノハ放射潰瘍面ノ腐敗減ジ惡臭少シク去リ多少清淨サレシガ其以上良好果ヲ收メザリキ、九例中三例全治一例一時輕快ナリ。

リ胃痛モ減ジ嘔吐ノ回數モ減少シ咖啡樣吐物ノ色殆ンド消失スコノ時期ニ於テモ胃液檢査ニテハ治療前ト大差ナク腫瘍ノ硬サ、大サ等モ大差ナシ患者ハ爽快ニ覺ユルニ拘ラズ衰弱次第ニ加ルガ如シ然シ腹膜炎ヲ起シ腹水ノ溜レルモノハ淋巴腺凝塊ヲ觸レルモノニハ經過ヲ速ナラシムルガ如シ胃腸吻合術ヲ施シテ後放射セルモ影響少シ十四例中三例一時全身症狀良好トナレリ約一ケ年繼續セルアリ。

肝臟腫瘍(三例)

腹面及背面ヨリ各二放射野ヲ以テ放射セル腫瘍殆ンド消失シ今尙健在ニ活動セルモノアレドモ組織的檢査ノ不能ト診斷ノ困難ナル爲ニ癌腫ナラザルヤモ知レズ他ノ例ハ殆ンド反應ナシ三例中二例ハ病勢却ツテ進捗セリ。

直腸癌(九例)

腫瘍ノ位置ハ肛門或ハ腔ヨリ檢査シ又測定器ニヨリれんごげん線中心線ガ丁度腫瘍ニ當ル様ニシ且ツ皮膚ヨリ腫瘍迄ノ距離ヲ正確ニ測定シテ腫瘍ニ作用スル量ヲ正確ニ定ム前方三後方三部位ヨリ放射セリ腫瘍ノ爲ニ甚シク便秘シ浸潤甚シキ者ニハ人工瘻管或ハ人工肛門ヲ設ケ同時ニ血清療法及ビラジウむヲ併用セリ浸潤及ビ狹窄症狀著シカラザルモノニアリテハ下痢便ノ回數次第ニ減ジ血液及粘液ヲ混ゼルモノモ消失シ糞便硬クナリ腫瘍著シク縮小シ(二例殆ンドフンズ)體重増加シ元氣恢復シ約一ケ年ヲ經過セル今日好狀態ヲ繼續セルモノ二例アリ浸潤強ク疼痛劇甚ニシテ排尿障礙ヲ訴フルモノハ一時多小自覺症狀ヲ輕減スト雖モ其以上效果ナク衰弱又ハ肝轉移等ニテ死亡セリ九例中二例良好尙持續ス肛門ヨリ高位ニ占居セザルモノガ良好ナルガ如シ。

- A.**, Zur Strahlentherapie des Uteruscarzinoms. M. m. W. 1917. 3) **Arnold**, Über Blutveränderungen bei der Tiefenbehandlung maligner Tumoren. M. m. W. 1916. 4) **Aeffter**, Spectrographische u. ionenquantitative messungen an Kongenparapaten F. auf d. G. d. Röntg. 1922. 5) **Boggs**, Röntgenbehandlung des Brustkreises F. auf d. G. d. Röntg. Bd. XVII. 6) **Bergmann**, Behandlung von Kankroiden F. auf d. G. d. Röntg. Bd. VII. 7) **Bergmann**, Epitheliome u. ihre Behandlung. F. auf d. G. d. Röntg. VIII. 8) **Bumm**, Zur Kenntnis der Wirkung der Röntgenstrahlen auf das uteruscarcinom. Centr. f. Gynack. 1912. 9) **Bumm**, Heilung tiefliegen der Carzine durch Röntgenstrahlen von der Oberfläche aus. M. m. W. 1914. 10) **Bornhard**, Röntgenbehandlung inoperabler magendarmcarzinome. Beil. z. klin. Chirurg. Bd. XCIV. 11) **Blumenthal**, Über eine besondere Art günstiger Einwirkung von Röntgenstrahlen einer Schädelgeschwulst. F. auf d. G. d. Röntg. 1921. 12) **Baernh. W.**, Die Röntgentherapie der Mundhöhlencarzinome M. m. W. 1921. 13) **Baumeister**, Das Filter für die Röntgentherapie M. m. W. 1921. 14) **Bordier, H.**, Über die Ursache des Erbrechen nach Röntgenstrahlenbehandlung Kongr. für inn. Med. 1922. 15) **Bachem Albert**, Die physikalischen Grundlagen der Strahlentherapie. B. k. W. 1921. 16) **Boggs Russel**, Radium und röntgentreatment in malignancy. Urol. a. cent. ver 1920. 17) **Calm Adolf**, Die Grundlagen der Röntgentherapie Therap. d. Gegenwart 1920. 18) **Cernack**, Die Röntgenstrahlen 1922. 19) **Dieterich, W.**, Erfahrungen in der Behandlung des mammarcarzinoms mit Röntgenstrahlen Strahlentherapie 1920. 20) **Dessauer**, Wendepunkt in der Technik der Tiefentherapie. Strahlentherapie 1920. 21) **Dessauer**, Radium, Mesothorium und harte X-strahlen 1914. 22) **Dessauer u. Krieger**, Nachbehandlung operierter Carzine mit homogenen Bestrahlung B. k. W. 1908. 23) **Decker u. Bornhard**, Die Röntgenbehandlung bei magendarmcarzinom M. m. W. 1915. 24) **Dessauer, Fr.**, Zur Therapie des Carzinoms mit Röntgenstrahlen 1922. 25) **Dauvillier, A.**, Über den Betrieb der Filteinfachheit opt. nat. kelson des scannes 1921. 26) **Douglas Webster**, The clinical Results of the treatment of malignant Disease by X-Ray. The Lancet 1923. 27) **Egon Loreuz**, Measurements of absorptioncoefficient of aluminium and water for hard X-rays. Amer. Jour. of Rontg. 1923. 28) **Edgar Wohlsch**, 25 Jahre Röntgenstrahlenforschung 1922. 29) **Exner**, Zur Röntgenbehandlung von Tumoren. W. k. W. 1903. 30) **F. Sauerbruch**, Die Behandlung der lösartigen Geschwülste. D. m. W. 1922. 31) **Fried, Carl**, Ein Tisches fall durch Darmruptur nach Röntgenfeldern Behandlung, zugleich ein kritischer Bericht über den Leistung der Radio-Siles. Strahlentherapie 1922. 32) **Friedrich Krönig**

皮膚癌(三例)

何レモ病竈廣ク手術不可能ノ者ナリ組織上扁平表皮癌ナリ始メ分泌増加シ腫脹著シクナリ局部疼痛甚シク食慾不振、體溫上昇セシガ次デ腫瘍ハ次第ニ扁平トナリ堤狀邊緣ハ陷沒シ肉芽組織消失シ浸潤ハ吸收サレテ潰瘍面ハ綺麗ニナリ大部表皮新生セリ内一例殆ンド治癒セシガ途中ヨリ不感性トナリ強放射ヲ續行スル程れんごげん火傷ヲ起スニ至リ其ノ疼痛ノタメ自覺症狀著シク障礙サレ經過ヲ速メタル感アルアリ三例中一例治癒二例一時良好、然シ皆半歳後死亡セリ。

子宮腔部癌及腔壁癌(三十九例)

サイトツ及ウキンツ兩氏ノ様式(所謂れんごげん、うゑるごはいむ)ニ從ヒ初メハ腔部次回ニハ右側骨盤腔其結締織三回目ニ左側骨盤腔内結締織ヲ放射ス瘦セタル婦人ニハ一回ニ放射セリ腔部ヲ放射スルニ三輦距離六×八放射野ニテ腹部ニ三ヶ所即一ハ胸骨縫合直上、他二ハ其左右及ビ背部ニ三ヶハ二所即チ一ハ薦骨直上他二ハ其左右ナリ放射後約二週以內ニ出血、白帶下及疼痛(腫瘍ガ鞣帶ヲ侵ス時ニ現ハレ強直ナル浸潤セル鞣帶ガ柔軟ニナルニツレ疼痛去ル)去リ其レヨリ次第ニ出血シ易キ惡臭アル腫瘍崩壞物ニテ覆ハレタル潰瘍面ハ清淨トナリ一見普通ノ腔部ヲ見ルガ如クニナル他覺的良好ノ經過ヲ取ラザルモノモ出血、帶下、疼痛ノ去レル爲ニ食慾増進シ爽快ヲ覺ユルニ至ルモノアリ然シ少シモ症狀ノ變化セザルモノアリ三十九例中三例治癒セリ

Literaturen.

- 1) Albert Simons, Über den Koenigenkater und seiner therapeutische Beeinflussung. Strahlentherapie 1922.
- 2) Amann, J.

- behandlung inoperablen Geschwülsten. M. m. W. 1903. 61) **Junpe Rudolf**, Die Veränderungen des Bluthlutes und ihre prognostische Bewertung in der Strahlentherapie des carcinoms. Strahlentherapie 1921. 62) **L. Ascher**, Operationslose Heilung eines Riesentumors der Schilddrüse mit Enzytol und kleiner Röntgenstrahlenmenge. D. m. W. 1922. 63) **Linnest Gerhard**, Erfahrungen mit der kontinuierlichen Strahlenbehandlung des carcinoms. M. m. W. 1917. 64) **Kohlmann u. Andersen**, Röntgenstrahlen und Mineralstoffwechsel. F. auf d. G. d. Röntg. 1922. 65) **Klein Gustav**, Primäre Ergebnisse der kombinierten Carcinombehandlung. M. m. W. 1914. 66) **Kraemer**, Behandlung von Carcinomrezidive durch Röntgenbestrahlung D. m. W. 1915. 67) **Kienböck**, Über Röntgenbehandlung des bösartigen geschwülste. Strahlentherapie. 1914. 68) **Krönig, Gausse**, Weitere Erfahrungen bei des nicht operativen Behandlung des Krebses. D. m. W. 1914. 69) **Klark**, Ein ulcerierendes mammarcarcinom mit Röntgenstrahlen behandelt. The. Brit. med. Jour. 1901. 70) **Küpferle Seemann**, Die Spectralanalyse der Röntgenstrahlen im Dienste der Strahlentherapie. F. auf d. G. d. Röntg. 1922. 71) **Karl Berger**, Dauerfolge der Strahlentherapie des Krebses. Strahlentherapie. 1922. 72) **Lenk, Robert**, Biologische Dosierung der Röntgenstrahlen nach Seitz und Wintz. D. m. W. 1920. 73) **Lobenhoffer**, Beiträge zur Röntgentherapie des Krebses. M. m. W. 1920. 74) **Lehmann Johann**, Bestrahlungen iller Carzinomosis. Centrall. für. Chirurg. 1920. 75) **L. Küpfer E. Lilienfeld**, Grundlagen therapeutischer Anordnung von Röntgenstrahlen. 1907. 76) **Lehmann**, Zur Kritik der Tiefen dosimetrie. M. m. W. 1922. 77) **Loose, Gustav**, Für und wieder der Röntgenbehandlung des Brustkrebses. F. auf d. G. d. Röntg. 1920. 78) **Ludig, Adler**, Die Radiumbehandlung maligner Tumoren 1919. 79) **Mahnert A. und H. Zacherl**, Die Behandlung des Röntgenkaters mit hypertensischen Lösungen. W. k. W. 1923. 80) **Margardt**, Mammarcarcinom mit Röntgenstrahlen-geheilt. D. m. W. 1903. 81) **Müller**, Die Indicationen zur Röntgenstrahlenbehandlung der Carzinoe. M. m. W. 1920. 82) **Müller**, Über Stand und Ziele der Röntgentiefentherapie der Carzinoe. Strahlentherapie 1920. 83) **Miescher, G.**, Die Röntgenempfindlichkeit des Mogens als Ursache des Röntgenkaters. Strahlentherapie 1920. 84) **Max, Steiger**, Zur Röntgentiefentherapie der Portacarcinome Strahlentherapie. 1922. 85) **Nend u. Sielmann**, Röntgenkater. W. k. W. 1923. 86) **Opitz**, Zum Problem der Röntgenbehandlung des Krebses. Klin. W. 1923. 87) **Opitz, Erlich**, Zum Problem der Dosierung von Röntgen und Radiumstrahlen. Klin. W. 1923. 88) **Otto, Kingreen**, Zur Behandlung der bösartigen Hirntumoren. D. m. W. 1923. 89) **Otto, Stranss**, Moderne Kreisbehandlung. D. m. W. 1921. 90) **Opitz, Erlich**, Die Freilanger Strahlenbehandlung des Uterschrebes. M. m. W. 1920. 91) **Fahler George**, Clinical results from the newer technique of deep röntgentherapy in malignant disease. The Lancet 1922.

- Die Strahlenbehandlung des Brustkreises in einmaliger Sitzung. M. m. W. 1916. 33) **Frohwein**, Bei einer Basalzellcarcinom. und 4 ulcerierten gute Erfolge mit R-strahlen. F. auf. d. G. d. Königl. Hl. X. 34) **Platau**, Ueber wir. operative Uteruscarcinome ausschließlich bestrahlen. Strahlentherapie Hl. I. 35) **Fränkel Manfred**, Die Bedeutung der Röntgenstrahlen in der Medizin mit besonderer Einwirkung auf das endokrine System und seiner Beeinflussung des carcinoms. Strahlentherapie 1921
- 36) **Gotthard u. Wertheimer**, Über Wellenlängenmessungen für Therapiaröntgenreihe. M. m. W. 1923. 37) **Gaiffe u. Gallot**, Die Tiefentherapie und ihre Verwickelung durch französischer Apparate Kong. f. ges. medicin 1921. 38) **Gocht**, Lehrbuch der Röntgenlehre 1922. 39) **Gerhartz, H.**, Leitfaden der Röntgenologie 1922. 40) **Groedel, Franz**, Die Röntgentherapie des Mammacarcinoms mittels Nahbestrahlung. D. Z. f. Chirurg. 1921. 41) **Gal, Felix**, 6 Jahre Strahlenbehandlung des Krebses der weiblichen Geschlechtsorgane. Strahlentherapie 1920. 42) **Gotthardt**, Spectrometrische Untersuchungen an Röntgenröhren. F. auf. d. G. d. R-strahlen. 1923. 43) **Hans Hofelder**, Die Strahlensensibilität der Neutromiere und Wege zur Verfüllung von Neutromierschädigungen in der Röntgentherapie. Strahlentherapie 1923. 44) **Heinrich Gutmann**, Zur Technik der Fernbestrahlung. Strahlentherapie 1923. 15) **Herman Wintz**, Injuries from Röntgen-Rays in Deep Therapy. Amer. Jour. of Röntg. 1923. 46) **Hans Neumann**, Zur Behandlung der Röntgenallergenschädigung. Kl. W. 1923. 47) **Hirsch, Henri**, Zum Problem des Röntgenkaters Strahlentherapie 1922. 48) **Haendly, P.**, Pathologische anatomische Ergebnisse der Strahlenbehandlung Strahlentherapie 1921. 49) **Haenisch**, Umfrage über die Behandlung der bösartigen Geschwülste mit Röntgenstrahlen. Med. Klin. 1912. 50) **Heimann, Fritz**, Die Bewertung des Bluthalts nach Bestrahlung beim Uteruscarcinom. D. m. W. 1916. 51) **Hirsch und Arnold**, Taschenbuch der Röntgenologie. 1922. 52) **Haupt u. Pinoff**, Die Fernmethode des erweiterten Kräftigwertheim. D. m. W. 1921. 53) **Halbsträtter**, Biologische Fragen der Strahlentherapie maligner Geschwülste. Strahlentherapie 1921. 54) **Hahn**, Röntgentherapie bei malignen Neubildungen M. m. W. 1903. 55) **Hirsch Henri**, Die Koch-Lilienfeld'sche Röntgenapparatur. D. m. W. 1921. 56) **Hofelder Hans**, Fernröntgenbestrahlung oder Röntgenwertheim? Strahlentherapie 1920. 57) **Herzheimer**, Günstige Erfolge der Einwirkung der Röntgenstrahlen auf Krebs. W. m. W. 1906. 58) **Jungling, Otto**, Gibt es in der Röntgentherapie eine einheitliche Carcinomdosis M. m. W. 1920. 59) **James T.**, The technique of radiation therapy of Esophageal carcinoma Amer. Jour. of Röntg. 1922. 60) **Johnson**, Resultate der Röntgen-



(前射放) 燕 舌



(後射放月ヶー) 同
(H. Yamakawa.)

- 92) **Perthes**, Über die Strahlenbehandlung bösartiger Geschwülste. Arch. f. klin. Chirurg. 1921. 93) **Perthes, Georg**, Erfolge der Brustkrebsbehandlung von und nach Einführung der prophylactischen Röntgenbestrahlung der operierten Fälle. Zeits. für Chirurg. 1920. 94) **Pankow**, Zur Frage der Grossfelderbestrahlung des Uteruscarzinoms. Strahlentherapie 1920. 95) **Pfungen**, Über die verheilende Bestrahlung nach radical operierten malignen Neoplasmen. W. k. W. 1915. 96) **Pfahler**, Die Behandlung der Rezidine und metastasen des Brustcarzinoms. F. auf. d. G. d. Röntg. XXI. 97) **Pape Carl**, Der Röntgenkater. Strahlentherapie XIV. 98) **Rieder W.**, Vermeidung der Allgemeinscheinungen nach Röntgenbestrahlung. Strahlentherapie 1921. 99) **Rieder, Rosenthal**, Lehrbuch der Röntgengunde Bd. III. 1922. 100) **Robert, Lenk**, Röntgentherapeutisches Hilfsbuch 1921. 101) **Runge**, Praktikum der gynaeologischen Strahlentherapie 1921. 102) **Schwitzer**, Über Dauererfolge nach Bestrahlung des Uterus collumcarzinoms mit radioactiver Substanz. Strahlentherapie 1921. 103) **Schwarz**, Heilung tiefgelegener Carzinome durch Röntgenbestrahlung von Körperoberfläche aus. M. m. W. 1914. 104) **Simon**, Die Behandlung der inoperablen Geschwülste. Berl. kl. W. 1914. 105) **Steiner**, Zur Röntgenbestrahlung des Mammacarzinoms. F. auf. d. G. d. Röntg. XXI. 106) **Schmieden, Otto**, Über postoperative Bestrahlung des Carzinoms. D. m. W. 1921. 108) **Seitz u. Wintz**, Unsere Methode der Röntgentherapie 1920. 109) **Seitz u. Wintz**, Die kombinierte Röntgen und Radiumbehandlung in Rahmen der biologischen Dosen. Centr. f. gynaeck. 1920. 110) **Seitz, Ludwig**, Carzinomdosis und carzinomgenese. M. m. W. 1921. 111) **Seuffert**, Strahlentiefenbehandlung 1923. 112) **Salzmann, Fritz**, Die Röntgenbehandlung innerer Krankheiten. 1923. 113) **Simons, Albert**, Über den Röntgenkater und seine therapeutische Beeinflussung. Strahlentherapie 1922. 114) **Telemann, Walter**, Röntgenbestrahlung bei Mammacarzinome. D. m. W. 1920. 115) **Teilhaber**, Zur Frage der operationslosen Behandlung des Carzinoms. Strahlentherapie Bd. I. 116) **Volz, Friedrich**, Die physikalischen und technischen Grundlagen der Messung und Dosierung der Röntgenstrahlen. Strahlentherapie (VI. Sonderband) 1921. 117) **V. Mertens**, Über die diagnostische Anwendung des Serums von bestrahlten Krebskranken und über die Wirkungsweise der Röntgenstrahlen. D. Z. f. Chirurg. 1923. 118) **Vilvandré, G.**, Observations on the X-ray treatment of Neoplasms. Brit. m. jour. 1920. 119) **Werner, R.**, Zur Strahlenbehandlung bösartiger Neubildungen. Strahlentherap. 1920. 120) **Wetterer, Josef**, Die Strahlenbehandlung der bösartigen Geschwülste Strahlentherapie 1920. 121) **Wohlgemuth**, Durch Röntgenstrahlen gelassertes Mammacarzinom. M. m. W. 1905. 122) **Wichmann**, Die Bewertung der Röntgenstrahlen in der Therapie des tieferliegenden Carzinoms. D. m. W. 1914. 123) **Wintz**, Die Bestrahlung der in und direct unter der Haut gelegenen Carzinome. M. m. W. 1920. 124) **Werner, R.**, Über den gegenwärtigen Stand der Strahlenbehandlung bösartiger Geschwülste. Ergsb. d. Chirurg. 1921. 125) **Wetterer, J.**, Handbuch der Röntgen u. Radiumtherapie 1920. 126) **Wintz, H.**, Die Vor- und Nachbehandlung bei der Röntgenbestrahlung. Therapie der gegenwart 1923.



(前射放) 癌茎陰發再



(後射放月ケー) 同

(H. Yamakawa.)



(前射放) 癌移轉腺巴淋部蹊鼠



(後射放月々二) 上 胸

(H. Yamakawa.)

抄

錄

實驗的癌形成ノ際ニ於ケル結締織

ノ關係

R. Bierich, Über die Beteiligung des Bindegewebes

bei der experimentellen Krebsbildung.

てゐる癌ニ於てゐる中ノ如何ナル成分ガ組織内ニ侵入シ細胞原形質ノ性質ヲ變化セシメ、癌ヲ發生スルカノ重要ナル問題ヲ究ムルト同時ニ癌形成ニハ如何ナル組織ガ關與シ如何ナル作用ガ行ハル、ヤヲ知ルハ必要ナル問題ナリ。てゐる塗布ニヨリ平均四十日ひーべるけらこーぜ、八十日乳嘴腫、百三十一日ニシテ深部發育ヲナシ遂ニ轉移ヲ有シ移植陽性ナル惡性癌ヲ發生スルヲ常トス。てゐるノ不溶解性成分ノ形態學的ニ證明セラレタルハ上皮ニテハ圓柱層ニシテ核ノ周圍ニ顆粒狀ヲナシテ存ス、真皮ニ於テハ顆粒狀又ハ不規則細片トナリ結締織自身中ニアリ他ハ其間ニアリテへもじでりん含有組織球及遊走細胞ニ圍マル。

〇抄錄

以上ハてゐるニヨル變化ナレド砒素、乳酸及れんこけん線ハ生理的乃至病理的發育ヲ促進シ或ハ防止シ癌ヲモ發生シ得ルモノアリテ是等ヲ用ヒ一定量ヲ以テてゐるノ作用ノ定量的標準ヲ定メ得レバ便利ナラン。

砒素ノ作用

亞砒酸ノ少量宛ヲ初生家兎ニ與ヘ體重増加ヲ促セリ、即チ慢性輸入ハ新陳代謝ヲ高ムルガ爲ナリ、今ヤ十四匹ノまうすニ其體重ノ割合ニ亞砒酸ノ量ヲ換算シ毎日與ヘタルニ二匹ハ三十日以内ニ死シ他ハ體重ノ變化ヲ來サズ百三十八日乃至百九十六日間生存セリ。皮膚ハ上皮ニ輕度ノ肥厚ヲ見、結締織贅肉ニナリ、纖維ノ膨脹、ますこ細胞出現、結締織細胞及彈力纖維ノ増加ヲ示セリ、但シひーべるけらこーぜ及腫瘍ノ發生ナシ。

次ニ二十六日間まうす三十二匹ニ亞砒酸ヲ與ヘ後てゐる及亞砒酸處理ヲナシタルニ上方及深部發育共ニてゐるノ



Melanocarcinom
(前射状)



(後射状月ヶ一) 同

(H. Yamakawa.)

てゐる癌ノ發生原因

R. Bierich, Zur Histogenese der Teckarzinoome.

塗布セルてゐるハ血液ニ入り第一日目ニ既ニ(ろい)ちん
ーゼアリ、尿ニハ蛋白ヲ證シ圓柱及赤血球ヲ檢シ腎ニ To-
xische Nephrose ノ像ヲ見ル之してゐる中ノ或成分ガ血液
中ニ入り尿中ニ排泄セラル、證ナリ。

局所ノ皮下結締織ハ二反應型ヲ區別シ得ベシ第一期(平均
八十日)ハ上皮ニ於テハ高方發育期ニシテ結締織ハ鬆疎ニ
ナリ其纖維ノ膨脹、ますミ細胞ノ出現及彈力纖維ノ増加ヲ
示ス第二期(平均百三十一日)ハ以上ノ變化ガ凡テ退行變
性ニ陥リ其際上皮ニ於テハ深部發育ヲ來ス此ノ時期にて
ゐる途布ヲ中止スルモ發育止ム事ナシ即可逆性ヲ有セズ
上皮ハ病的ノ發育ヲナスモノニシテ第一期ノ結締織ノ變
化ハ上皮ニ對シテ起ルモノニ非ズシテ一次的ノ變化ナリ。
てゐるノ皮膚ニ對スル作用ハてゐる中ノ或成分ニヨル生
物化學的變化ニシテ一定ノ物質ニヨリ同様ナル變化ヲ起
シ得ルモノアリ即砒素慢性皮下輸入及れんミけん線放射
ニヨル變化ニシテ是等ニヨリ癌ヲモ發生セシムベシ。

○抄 錄

てゐるト砒素トヲ共ニ用ヒタル實驗ニテ癌發生期ノ延長
ヲ見タルハ砒素ニヨル結締織變化ガ深部發育ヲ妨ゲタル
ヲ證スルモノナリ。
(福田抄)

實驗的てゐる癌發生點ニ關スル組 織的檢索

E. Müller, Histologische Untersuchungen über
den Ausgangspunkt der experimentellen Tec-
kercarcinome.

まうすハてゐる塗布ニヨリ局所皮膚ノ變化ト共ニ一部吸
收セラレ尿中ニ排泄セラル、間ニ一般症狀ヲ起ス、主トシ
テ腎臟ノ變化ニシテ體重ハ第一月増加、第二月減少、第三
月輕度ノ増加ヲ示ス。皮膚ニ於テハ八日ニ全部脫毛再生ナ
シ傳染ニヨリあふせず起ス事アリ三十日ひべるけらミ
ーゼ七十日乃至七十五日乳嘴腫發生四ヶ月深部發育ヲナ
ス。乳嘴腫ハ融合シ、或ハ脫落潰瘍ヲ作り遂ニ惡性腫瘍ノ
狀ヲ呈ス。

組織のニ上皮ニ變化ヲ見ラル、ハ既ニ二週ノ後ニシテ上
皮ハ肥厚小島狀ヲナス、マルピキ氏層ノ基底部ハ鬆疎ニ

ミニテノ動物ヨリ明白ナル遅延ヲ來セリ、組織のニハ前同
様ナリ此ノ實驗ヨリ亞砒酸ニ對シ上皮ハ反應ヲ異ニシ、結
締組織ハテゝる塗布ニ於ケル第一期上皮上方發育期ニ相當
セル反應ヲ示ス。サレバ後實驗ナル二者合併法ニヨルニ
第一期作用ナル結締組織反應ノ増進ニヨリ深部發育ハ後レ
タルナリ、ますミ細胞及彈力纖維ノ關係ハテゝるノ場合ニ
最モ著明ニシテれんぎけん線、亞砒酸ノ場合之ニ次グ。

乳酸ノ作用

乳酸ト共ニ非病原菌ガ體內ニ入ル時ハ病原性ヲ示ス、移
植性腫瘍ト合併セル試験ニハ此ノ毒性増進ノ變化ヲ見ズ、
テゝる癌ニ於テ次ノ如キ實驗ヲナセリ、八日間皮下及腹腔
内ニ〇・一乃至〇・五%溶液一〇・二ミリヲ注入セルニ刺入溝
ニろいこちこぜヲ見タルモ他ニ變化ナシ。尙十四ノまう
すヲ九十日間テゝる塗布ヲナシ乳酸ヲ與ヘタルモ何等ノ
變化ヲ見ル能ハズ。
れんぎけん線ノ作用

放射ノ強サニヨリ障礙増加シ死ニ至ル、皮膚ニハ頭部或ハ
全身ノ浮腫ヲ來ス。鉛、ごむ又ハ濾過器ヲ用フル場合ニハ
上皮ノ全壞死ナク、組織ハ鬆疎ニナリ原形質ハ泡狀膨脹ヲ

來シ、乳頭部ノ真皮組織ハ硝子樣膨脹ヲナシ真皮下ニ中
等度ノ浮腫ヲ見ルますミ細胞及彈力纖維ノ増加アリ。
テゝる、砒素及X放散線ニヨル組織ノ變化ハ二期ニ分タ
ル。第一期、テゝる及X線ノ下ニ一定ノ上皮機能ノ増進ア
リ、即チ上方發育ヲ示ス、前二者ハ勿論砒素ニヨルモ結締
組織ハ此ノ時有形單位ハ非常ノ増加ヲ見ル。

第二期、上皮素ハ結締組織中ニ擴ガリ第一期ニ建設セル
モノ、破壊ニ移ル、即彈力纖維ノ減少、ますミ細胞ノ消失
及結締組織ノ破壊ナリ。

斯クシテテゝる及X線(砒素モ一定度迄)ノ作用ノ下ニ上
皮及結締組織ニ變化ヲ起シ此ノ變化ハ全系統ノ狀態變化ト
考ヘラル、規則的ニ進メル反應ハ其ノ產物トシテ上皮及結
締組織ノ化學的及物理的變化ヲナセル構造ヲ産セリ。此ノこ
ろいぎ系統ノ機能ハ病的ニ變化シ上皮ハ發育えねるぎ
ヲ高メ深部ニ發育セントス結締組織ハ抵抗ヲ高メ之ニ應ズ。
初期癌形成及テゝる、砒素共作用ノ場合ノ如ク二者ノ生
物學的進行ハ一定時平衡ヲ保ツモノナルガ遂ニ一方ガ勝
利ヲ得レバ進行ノ運命ハ決定的ニ終末ヲ告グルモノナリ。

(福田抄)

胞迷入ニヨル遠型發育、(二)寄生蟲傳染、(三)化學的物理的慢性刺激ノ三トス。癌腫ガ以上ノ有效因子ニ對スル原形質反應產物トシ、其際行ハル、作用ヲ分解スルニ如何ナル單位の作用ニ基クカ、從來形態學的觀察ヨリ確カメラレタル事實ヨリ考フルニ、要ハ自然ノ結合ニアル細胞組織ガ結合ヲ離レ他ノ組織中ニ侵入スルヲ以テ惡性ノ出發點ヲナス事ナリ。(一)、實驗的迷入法ヲ行ヒシハ Belogolow氏ニシテ蛙及魚類ノ Embryo ヲ同動物腹腔内ニ移植シ肉腫ヲ作りシガ著者ノ追試ニヨリ普通ノ組織反應產物ナル肉芽組織ナルヲ知レリ。

(二)寄生蟲ニヨル實驗ハ Bilharzia 氏ノ Distomum felinum ヲモル上皮惡性腫瘍、Fibiger 氏ノ Spiropteren ニモルらて胃癌、Tania crassicolles ニモル肝肉腫等アリ。尙 Fibiger-Wassink 氏ハ Spiroptera ト同種ノ Trichosoma ニテ實驗シ癌發生陰性ニ終レリ。之レ寄生動物ノ代謝物質ニヨルモノニシテ是等動物ノ體外培養法ナキ爲メ此物質ヲ取リテ實驗スルヲ得ズト云ヘリ。

(三)慢性刺激ニヨル實驗ハてゝる癌發生ニシテてゝる塗布ニヨリ一部血液ニ入り腎ヨリ排泄セラル其際一般症狀

ヲ起スト同時ニ局所ニ結締織反應ヲ起シ後ニ上皮ノ深部發育ヲナス。

Spiropteren 癌ニテ扁平細胞ヨリナル前胃稀ニ舌ニ癌ヲ見タレド食道及胃ノ圓柱細胞ニ癌發生ナキ事ヨリ素質ヲ考ヘラレ著者ノ言フ原形質ト有效因子トノ間ノ特種反應ヲ證スルモノナリ。以上ノ諸物質ハ原形質系統ニ構造的變化ヲ起シ新タニ獲タル特質ノ直接作用ガ癌發生上重要ナル意義ヲ有スルモノナリ。(福田抄)

Klinische Wochenschrift 1922 11. Nov. Nr. 46 S. 2272.

家鶏肝臟ニ混合上皮ヲ有スル囊胞

ノ發生ニ就テ

Schlamm, Über die Genese einer Zyste mit (gemischten Epithel in der Leber eines Huhnes

一九一四年 Teutschlander 氏ガ尾脂骨部肉腫ヲ有セル家鶏肝臟内ニ氈毛上皮及扁平上皮ヲ同時ニ備ヘタル囊胞ヲ見タル以外ニ嘗テ報告例ナキ肝内囊胞ヲ家鶏ニ於テ見タリ。上皮ハ氈毛、圓柱、角化扁平、無角化扁平、細胞等種々ノモ

ナリ其部ノ細胞核ハ泡狀肥大シ、染色質ニ富ミ多數ノミ
ーゼヲ示ス、其後真皮ニ於テ變化現ハルます細胞出現、
結締織ノ鬆疎、膨脹、潰瘍發生、壞死及白血球集合ヲ來
ス。限局性上皮肥厚ニ次デ上皮及乳頭部ノ病的上方發育ヲ
ナス際ニ孰レノ細胞ヨリ起ルカニ就テハ注目セラル、論
點ニシテ神經細胞ノ如キ高等ノモノハ再生ナキモ多クノ
臟器ニ Indifferenzzone アルハシヤベル氏ノ説ク所ニシテ
成長中ノ臟器ニアリテハみこぜヲ絶ヘズ示スニ反シ、成
長セルモノニハ示サズシテ潜在性發育能力ヲ有ス即生理
的再生及病的ノ腫瘍ノ場合ハ此ノ能力ヲ説明スルモノナ
リ。上皮ニ於テマルビキ氏層ニ Indifferenzzone アルヲ説ク
者てゝる癌發生點ハ此所ニアリト言ヒ其他種々ノ説ヲ爲
ス者アリ、山極、市川氏ハ最初ノ變化トシテ細胞間橋ノ疎
間ト上皮ノ網狀配列ヲ説キ同時ニ淡染色ト數多ノみこ
ぜヲ示スト云ヘリ。著者ハマルビキ氏層ノ基底層ニ於ケル
變化ヲ最初ノ變化トセリ、上皮細胞疎間、みこぜ増加ハ
Indifferenzzone ノ活動ヲ示スモノニシテ此ノ時期ニ上皮ノ
他部ニ於テハ形態學上ノ變化ヲ見ズ。尙深部發育モ此層ヨ
リ行ハル。

クロムベツヘル氏ニヨレバ基底細胞層ヨリ出ル角化ヲ有
セザル癌トすたへる細胞層ヨリ出ル角化癌トテ區別セ
ルガ若シ著者ノ角化ヲ有セザル一例ノ肉腫狀癌ノ發生ガ
他例ノ角化癌ト所ヲ異ニシク氏ノ意味ニ於ケル如ク區別
セラル、モノトセバ其ノ最初基底細胞層ノミノ變化ヲ
示シ他ニ變化ナキヲ以テ肉腫狀癌發生ノ續出ヲ見ルベキ
理ナリ而シテ果シテク氏ノ言ガ真ナラバ分化程度低キ基
底細胞ヨリ出タル癌ハかんくろいぎヨリ惡性ナルベキナ
リ然ルニ人間ニ於テ二者ノ區別ハ見ラレズ尙二者ハ屢々
混合セリ是レ發生點同一説ヲ示スモノナリ。

最後ニてゝるノ作用ハ其儘全體トシテカ其或成分トシテ
カハ癌發生上重要ノ點ニシテてゝる中ノ砒素ノ作用ヲ説
クモノアレド少量且含量不定ニシテ其實驗ニモ成功セズ。

(福田抄)

Zeitschrift für Krebsforschung Bd. 19 Heft
7/6 1923 S. 393

實驗的てゝる癌ニ就テ

Hierich, Über den experimentellen Teckreis

癌腫ノ發生原因ト考ヘラル、モノ(一)先天性及後天性細

感作セルモノヲモ入レタリ。實驗ノ經過中縫合部ト腹腔内臓トノ癒著ハアリシモ炎症化膿等ノ變化ヲ見ザリキ、卵ハ其六〇%宿主ト癒合シ、或ハ鬆粗或ハ固キ結締織ニテ固定セルモノアリ、凡テ同種移植ノ時ノミニ見ラル。

卵ノ側ニ於ケルニ反應型ハ Begonow 氏ノモノト同様ニシテ、(一)卵ハ癒著ヲ起セルモ之ト前後シテ死シ、(二)卵ノ生存シ一定時發育セルモノトニ區別セラレ、前者ハ造構消失シ全體一樣ニ顆粒狀ニシテ核見エズ、後者ハ各發育期ニ保タレタル明瞭ナル核ヲ有セルぶらすこめーれ、周緣部ニ卵黃細胞及臟器芽ヲ見ル。寒天樣包被ハ新陳代謝產物及呼吸器ノ作用ヲナシ二次的ノモノニシテ完全ニ再生ヲ行フ事ハ證明セラル、卵ノ癒著ハ有莖又ハ廣基ニシテ寒天樣包被ハ結締織中ニ包マル。是等ノ組織ハ毛細血管ニ富ミB氏ノ言フ肉腫樣細胞型ナル大遊離内被細胞、遊走細胞及組織球(血球、卵黃細胞、顆粒ヲ喰フ)其他赤血球、白血球、淋巴球、ぶらすこ細胞、卵黃細胞及巨大細胞アリ、肉腫樣細胞ハ肉芽組織ト見ルベキモノトナリ。B氏ノ言フ胎生細胞ガ發生部位ニ於テモ寒天樣包被ヲ通過シテ發育セルヲ證シ得ザリシハ、卵ノ能動的作用ニヨラズシテ宿主側ノ

發育產物ナルヲ説明スルモノナリ。著者ハ實驗上ノ根據ヨリB氏ト異レル見解ヲ有ス、即チ動物ニ於テ外界ノ生存條件ニ變化ヲ來セル場合ニ新生活狀態ニ不要ニナリシ動物種屬特性ハ退化シ行ク事ヲB氏ハ考ヘズシテ通常様々ノ臟器ヲ作ルベキ成形えねるぎーガ用ヒラレズシテ遂ニ病的發育えねるぎーニ變化セリト云ヘリ、而シテ此ノえねるぎーノ變化ハ極メテ早く起リシモノト言フベシ即チ手術後十一日ニ肉腫樣細胞ヲ認メタリ。移植物質ニ腹腔内ナル新培養基ヲ與ヘシ事ハ元來ノ生活條件ニ比シ決シテえねるぎー惠與ノ高上ト云フベカラズ性質上ノ降下アルベキナリ。

人工的ニ移植セル胎生細胞ト發生時ノ迷芽細胞トハ腫瘍發生上同一視スベキモノナラズ、腫瘍發生ニハ二次的ニ細胞中ニ貯ヘラル、えねるぎー系統ノ發生ガ重大ニシテ斯クシテ尙不明ノ生理化學的有效因子ガ輸入セラレタル後造構上ノ變化ト之ニヨリ新機能ガ發生スルヲ以テ腫瘍發生ノ因ノ成立ヲ見ルモノナリ。

(福田抄)

Archiv für Entwicklungsmechanik der Organismen 1922 12 Mai Lfd. 3-4 Heft. S. 593

ノヨリ成立セルモノナリ。

囊胞ハ肝臟ノ前方ニ位シ漿膜下ニアリ、其壁ハ彈力纖維及結締組織纖維ヨリナリ、全體トシテ球形ヲナセル腔胞ニシテ層積セル角化物質及少量ノ細胞頽敗物ヲ容レタル組織組成ノ高度ノ畸型ナリ。其最も異狀ナル上皮群ハ(一)各上皮細胞群ガ夫々異レル *Keimbätter* ニ屬スルカ、(二)一ノ *Keimbatt* ヨリ出來タルモノカノ二様ヲ考ヘラル、囊壁ハ二次的ニ孰レヨリモ發生シ得ルモノニシテ上皮ノミヲ考フルニ(一)ノ場合ハ即チてらこいニ腫瘍ナリ。實際家鶏ノてらこいハ屢々見ラル、モノニシテ *Tenschlander*

氏ノ例ノ如ク他ニ尾脰骨部肉腫ヲ有スルモノニアリテハ本來てらこいハ離レ一ハ肉腫トナリ他ガ肝ニ於テ囊胞ヲ作リシモノト解シ得ベキモ本例ノ如キハ肝臟ノミニ獨立シテ發生セルモノニシテてらこいハ考ヘラレズ但シ(二)ノ場合トスルモ異所上皮ノ發生ニ就テ説明ニ困シム、而シテ著者ハ斯ノ如キ囊胞ヲ廣ク文獻ニ照シ、肝實質中ニ殘レル變化、淋巴球浸潤、鬱血等炎症或ハ機械的刺戟ニヨル化生等ヲ考ヘテ内皮性ノ囊胞中食道囊胞例ニ類似例ヲ發見セルヲ以テ迷入セル食道囊胞ト解釋シ得ベク尙所見

ノ凡テヲ無理ナク説明シ得ルモノナリ但シ高度ノ畸型ヲ想像セザルベカラズ、斯ク胎生發育時期ニ母臟器ヨリ散亂シ他臟器ニ迷入セルモノ、發育セル所謂こりすこいニ *Choristom* ナリ、(福田抄)

Frankl, Zeitschrift f. pathologie B. 29 1923

冷血動物えむぶりおヲ同種成熟動物ノ腹腔内ニ移植セル試驗成績

Bierch, Die Resultate der intrakleminalen

Implantation von Kaltblüterembryonen in den

erwachsenen artgleichen Organismus.

兩棲類及魚類ヲ以テ試ミタル *Belogolowy* 氏ノ實驗ヲ追試シ移植物ト宿主トノ關係ヲ究メタリ。即チ *Rana temporaria* 及 *Pelodates fuscus* ノ一乃至二×二四時間ヲ經過セル卵ヲ同種動物腹腔内ニ移植シタルニ、動物中七・五%ハ三週間以内ニ死シ、他ハ四乃至六ヶ月生存シ、其中五ヶ月ニテ殺シタルモノアリ。

先ヅ〇・六五%ノ食鹽水ニテ卵ヲ洗ヒ寒天様包被ヲ除去シ腹腔内ニ入レ、更ニ是等ヲ二%食鹽水及れんこけん線ニテ

まうすニ於ケル腎及副腎ニ原發セ

ル自然腫瘍殊ニ其頻度及遺傳ニ關

スル研究

Myer, Holmes & Wells: Primary spontaneous

tumors in the kidney and adrenal of mice studies on the incidence and inheritability of

spontaneous tumors in mice.

動物界ニ於ケル腎原發腫瘍ハ少シトセズ、一般ニ人類ニ於ケル腎腫瘍ニ見ラレタル變型及特性ヲ有スルコトヲ常トス。腎腫瘍ノ病理學的方面ヲ比較センガ爲メ動物腫瘍ヲ文獻ニ涉獵シ腎及副腎腫瘍ノ他腫瘍ニ對スル頻度及其性質ヲ詳述セリ。先づまうすノ腫瘍ヨリラッテ、栗鼠、烏類、家兎、豚、馬、牛、犬及其他動物ノ腫瘍ニ及ベリ。

Myer氏貯藏ノまうす腎腫瘍ハ三萬三千頭中一六例ニシテ、癌一、腺腫三、副腎腫一、肉腫七、めそてりお一、む三、腎盂肉腫一アリ人間及他種動物ニアル腎ノ混合腫瘍及腎盂ノ乳嚢狀腫瘍ノ一例ヲモ見ラレザルハ注意スベキ點ナリ。

○抄 錄

縮例ハ明カニ上皮細胞ヨリナレド副腎或ハ細尿管上皮細胞ノ特性ヲ有セズ乳嚢腫ノ印象アリ、腺腫例中一ハ兩腎囊腫ニ發セル固キ腺腫ニシテ腎上皮ニ似タル細胞ヨリ成リ他二例モ膠質ヲ有シ又ハ細管狀配列ヲナシ腎上皮ヨリ發生セシヲ思ハシム、副腎腫ハ人間ノモノト多クノ點ニ於テ一致ス。肉腫ハ(一)兩腎ニ來リ淋巴球ヨリ少シ大ナル橢圓形細胞、(二)大圓形細胞、(三)長圓形細胞、(四)多角形細胞、(五)兩腎ニ來リ小橢圓形細胞、(六)及(七)淋巴肉腫ヨリナリ一般ニ核ハ濃染ス。めそてりお一、むハ窩腫及ビ肉腫ノ性ヲ有シAlum氏ノ云ヘル種ニ屬スベキモノニシテ多角形細胞、紡錘形細胞等群集シ腔ヲ作ルモノアリ二例ハ原形質乏シキ小濃染細胞ヨリ成ル、腎盂肉腫ハ大圓形細胞肉腫ナリ。

副腎ニ來レル腫瘍ハ從來報告ナシ著者ハ疑ナキ該例ヲ見タリ人間ノ副腎ニ屢ミ見ラル、良性皮質腺腫ハ一例ヲ數フルノミ其他三例ノめそてりお一、むハ大橢圓細胞ヨリナリ腎ニ於ケルト同様ノ構造ヲ有シ一例ハ腹膜轉移ヲ有シ一例兩側惡性めそてりお一、むニシテ又轉移ヲ有ス。其他泌尿生殖器原發ノめそてりお一、む數例アルモ發生部位不

腎結石ニ續發セル原發性扁平上皮細胞癌

Wells, Primary squamous-cell carcinoma of the kidney as a sequel of renal calculi.

五十七歳ノ男子六ヶ月間腹痛ニ苦まれんこけん線ニテ腎結石ヲ證セラレタル患者ノ屍體ヲ剖檢ノ結果結石以外ニ癌腫ヲ發見セラレタリ。二〇〇瓦ノ左腎ニ比シ癌腫發生ヲ見タル右腎ハ肥大シ八〇〇瓦ニ達セリ、割面ニ於テ殆んど認め得ベキ腎組織ナク癌腫ハ周圍ノ淋巴節轉移ヲ有シ角化ヲ伴ヘル扁平上皮癌ナリ。結石ハ次ノ組成ヲ有ス。

$\text{Ca}_3(\text{PO}_4)_2$ —70.70 : $\text{Mg}_3(\text{PO}_4)_2$ 21.35 : CaCO_3 7.95.

腎ニ於ケル扁平上皮癌ハ稀ニ見ラル、モノニシテ著者ノ例ニ似タル癌ハ Kischensky 氏報告セルモ結石ナシ、Kaufmann 氏ハ結石ノ結果トシテ粘膜炎ガ表皮様變型ニ次テ扁平細胞癌ヲ發生セシメ得ベシト云ヒ其例ヲ報告セリ。其他腎盂以下膀胱ニ於ケル扁平上皮癌モ多カラズ、然レドモ泌尿系統ガ慢性刺激ニヨル化生ヲ起ス事ハ屢々見ラレ、扁平上皮癌ガ慢性刺激ニヨリ起リ得ベキ事實ハ本例ノ發

生原因ヲ説明スルモノナリ。化生の扁平上皮ノ形成ニ於テ先ヅ化學的特徴トシテ外胚葉 ectodermal 起源ノ細胞ニノミ見ラル、一定ノ化學的物質けらちんヲ産シ、内胚葉起源例ヘバ膽囊、腎盂及子宮ノ如キ又ハ中胚葉起源ノモノガけらちんヲ産スル機能ヲ有スルニ至ル化生ヲ考フルニ形意學上ノミノ變化ニ非ズシテ化學的變移ガ細胞ニ起リシ事ヲ示スモノナリ、次ニ惡性ノ特徴トスル發育能ヲ得ル事ハ細胞ガ元來ノ機能ヲ失ヒ「發育」ナル單ニ植物性機能ヲ留ムル胎生期狀態ニ接近セルヲ語ルモノナリ。斯ノ如ク慢性刺激ニヨリ細胞ノ化生起リ更ニ上皮ハ其起源ナル胎生期性質ニ近ヅキツ、遂ニ癌發生ヲ促シ得ルモノニシテ本例ニ於テハ結石ガ腎扁平上皮癌發生ノ主役ヲ勤メタルモノト云フベシ。

(福田抄)

Studies from the Othe S.A. Sprague
Memorial Institute Volum X 1923.

示シ凡テノ動物ハ此ノ機能ヲ有スルカ否ヤノ内ヲ出デズサレバ一個或ハ一屬ニ對シ癌ヲ免カル、確實ナル手段アリ。まうすニ於テ Cancer 及 Non-cancer ノ遺傳ノ標示ハ吾人が進化ノ法則ヲ支持シ生物學的法則トシテ遺傳ヲ認ムル以上ハ人間及其他ノ癌ヲ有スル種屬ニ於ケル性質遺傳ヲ指示スルモノナリ。斯クシテ根本的ニ生物學の問題トナリシ癌研究ニヨリ凡テノ病的狀態ノ上ニ立ツ生物學的事實ヲ了解考察スル必要アリ、而シテ吾人ハ凡テノ病理、細菌、生理、治療學ノ下ニ生物學ヲ獲テ研究シ行ク間ニ此ノ奇病ハ最早存在ヲ失ヒ臟器及動物全體ニハ疲勞、萎縮、更ニ最終ナル自然ノ死ノミ存在スルニ至ル。(福田抄)

Studies from the Ohio S.A. Surgeon ne-

morial institute volum. X 1922

ハイデルベルグ瓦斯工場産てゐる

中癌發生上有效ナル成分證明ニ關

スル最終ノ實驗成績

Tenschlaender, Über die onkologischen Ergebnisse
unserer Experimente zum Nachweis carcinogener
Komponente in Heilberger Gaswerksteuer

○抄 錄

癌發生上てゐる全體トシテ又ハ其中ノ一種或ハ數種ノ成分ナル一部トシテ作用スルカヲ定メント試ミラレタル者或ハ低溫ニテ沸騰スル成分ガ有效ナルヲ云ヒ或ハ四百度ニテ蒸發シ殘レル部分ハ普通通てゐるノ二倍ノ早サニテ癌ヲ發生セシメ得タリト云ヒ其研究夥カラザレド各成分ニテノ實驗ハ勞大ニシテ試ミラレズ。

Aてゐる滓渣(ベッピ)ニヨル實驗

四百度ニテ殘レルベッピヲ用ヒ九十五四ノまうすニ塗布セリ、八日後皮膚肥厚、一部潰瘍ヲ生ジ濕潤炎症ヲ認メ一二週ヒーベるけらミゼヲ見タリ、鏡檢ノ結果十三日ニ毛囊上皮腫ヘ移行型、二十一日深部發育ヲ示スモノアリ。

三週ニ小疣、四十一日ニ皮角、六週ニ纖維上皮腫、五十三日毛囊上皮腫、八十七日初期癌ノ狀態ヲ呈スルモノヲ見タリ、五ヶ月ニ至リ癌發生、百九十五日ニ淋巴節轉移ヲ發見セリ。

Bあんこらせん油ニヨル實驗

あんこらせん油ハ三百度以上ニテ蒸留セルモノヲあるこほるニテ稀メ用ヒタリ。脱毛ニ二週ヲ要シ、一ヶ月ニ再生、二ヶ月ノ終リニ再び脱毛セリ、癌發生例アリ。

明ナリ。腎ノ腫瘍轉移ハ稀ニシテ乳癌一例、肺臓癌四例アリ肉腫ハ浸潤性ニ浸入スルモ血行轉移ハ極メテ稀ナリ。副腎ノ轉移腫瘍ハ卵巣ト副腎トニ來レルめそてりおゝむニシテ孰レヨリ發セルルヤ不明ノモノヲ除ケバ其例ヲ見ズ。

是等ノ腫瘍ハ雌雄ニ關係ナク殆ンド同數ニシテ上皮性腫瘍ニ轉移ナキニ反シ肉腫及めそてりおゝむニアルハ注目スベキ點ナリ。

(福田抄)

Studies from the Ohio S.A. Sprague
memorial institute Volum X 1922

人類癌腫遺傳ノ生物學的證據、ま

うす癌例ト遺傳ノ研究

Slye, Biological evidence for the inheritability
of cancer in man. Studies in the incidence and
inheritability of spontaneous tumors in mice.

自然ニ發生セル癌ノ性質及遺傳ノ生物學的問題ハ過去十二年間ニ互リまうす癌及肉腫ニ就テ研究ヲ重キ十年間既ニ數度報告セリ、其間研究ハ常ニ廣ク深く完全ニ確實ノ域

ニ達シツ、アリ。其事實ノ一トシテ癌發生ノ傾向ヲ遺傳スル事ハ癌ノ一般罹病率ニ照シ明カニ證セラレタレド之ガ直チニ人類癌腫遺傳問題ト同一視シ得ベキヤ否ヤヲ説クモノアリ。抑々遺傳トハ種屬ヲ作り其特性ヲ表ハス力ニシテ種ニ特種ノ法則ニ非ズシテ單細胞原形質中ニ存在スル物質ガ子孫ニ發生シ來ルモノナリト云フ一般法則ナリ。而シテまうすニ於ケル本研究ニ於テハ人間腫瘍發生ノ場合ト全く同様ニ選擇食餌ヲナス以外何等ノ干涉ヲナサズ人類腫瘍ト全く同ジ組織及臟器ニ發生シ同様ナル臨牀的經過ヲトリ死ニ至ル、尙同臟器ニ於ケル同腫瘍ト全く同様ノ檢鏡所見ヲ呈シ生物學的ニ全く同様ノ狀態ニアリ。從テ進化説ヲ認ムル以上ハ凡テノ問題ト同様ニ遺傳問題モ説明セザルベカラズ。

著者十二年間ノ研究ニヨリ癌ノ遺傳ハ CancerトNon-cancerノ單一性物質ニ分離セラレ其儘遺傳セラル祖先ヨリ子孫ニ至ル迄特殊臟器ニ於ケル組織型ノ特性ハ單一性物質トシテ遺傳セラル、ヲ以テ種々處理ヲ加ヘ永久ニ完全ニ除去シ得ベキモノトス。Cancer及Non-cancerナル語ハ恰モ再生ニ當リ分化發育スルヲ制スルニ適スル機能ノ存、不存ヲ

雜報

○理事會 一月二十一日第一回理事會開會協議事項左ノ如シ、

報告

- 一、大正十二年度庶務會計報告ニ關スル件、
- 二、細野理事母堂弔慰ニ關スル件、

議事

- 一、大正十三年度癌研究費補助ニ關スル件、
- 二、大正十三年度癌研究囑託費ニ關スル件、
- 三、授賞論文審査ニ關スル件、
- 四、定期總會及學術集談會開催ニ關スル件、
- 五、評議員會開催ニ關スル件、
- 六、評議員囑託ニ關スル件、
- 七、名譽會員推薦ニ關スル件、
- 八、大阪へ本會支部設置ニ關スル件、

○癌研究費補助、理事會ノ決議ニ依リ左記ノ諸氏ニ本年

度ニ於テ金四千參百五拾圓ヲ補助スルコトニ決ス、

○評議員囑託

本會會頭ノ推薦ニ依リ總裁宮殿下ヨリ左記諸氏ニ本會評議員ヲ囑託ス。

正五位勳三等 小 林 幹氏

從五位醫學博士 緒方知三郎氏

醫學博士 山極勝三郎氏

醫學博士 長 與 又 郎氏

醫學博士 緒方知三郎氏

醫學博士 木村 哲二氏

醫學博士 林 直 助氏

醫學博士 横 川 定氏

醫學博士 川 村 麟 也氏

獸醫學博士 市川厚一氏

堀田四郎氏

本間 純氏

二實驗共ニ癌發生アリ、サレド共ニテ一なるニヨルモノヨリ
過シベツニヨリ良性腫瘍ハ早く發生スルモ癌發生ハ五
ヶ月ニシテ十九四中三例(二六%)ノ癌ヲ見タルノミテ一
るニヨリ四ヶ月ニ百%ヲ示セルモノニ比スレバ明カナリ。

ベツ中ニハ癌發生物質アル事ハ疑フベカラズデールマ
ン氏ノ垂直れざるミタ一なるヨリ水平れざるミタ一なるガ癌
ヲ早く發生セシムト云ヘルハ後者ハベツニ近キ殘滓物
多キガ爲ナラン、本實驗ニ於テハ(一)ベツハ硬ク凝集シ
(二)ベツツを一なるヲ溶媒トシテ用ヒ、(三)ベツハ單一ノ
物質ニ非ル事等ハ癌發生ヲ遲延セシメタルナリ。

テ一なるノ作用ハ特種性ノモノナラザレド比較的特種性ア
ルハ事實ニシテ初メハ良性慢性ノ變化ヨリ來ル間接性ノ
モノナリ此際素質ハ重大ニシテ即三個ノ重要因子ヲ數フ
ベシ物質ノ比較的特種性、外來及暴露素質之レナリ。

結 論

(一)テ一なる中ニハ癌發生物質ノ全部カ、一部ハ必ズ、一部
ハ除外例トシテ含有セラルベツニモあんミらせん油ニ
モアリ。

(二)テ一なるノ癌發生作用ハテ一なるノ產出及製法ニ比例ス。

(三)ハイデルベルグ瓦斯工場產テ一なる中ノベツニベ
ツツを一なるニ溶セルモノニテハ白まうすニ癌ヲテ一なるヨリ
確カニ早く發生セシメ得ズ。

(四)癌發生物質ノ作用ハ局所的、間接的、比較的特種性ノ
モノニシテ其作用ハ複雑ニテ局所及一般症狀ヲ起ス。

(五)テ一なる癌發生實驗ハ皮膚癌原因ニ關スル比較的特種
性、外來刺激ト共ニ暴露及素質ノ意義ヲ明カニスルモノ
ナリ。山極、市川、筒井氏案出ノ方法ノ意義ハ此ノ點ニ重要
ニシテ素質ナル未知ノモノニ明カナル觀念ヲ與ヘタ暴露
ト素質トハ區別セラルベキモノニシテ此ノ區別ヲ了解セ
シムルニ氏等ノ方法ハ效果アルモノナリ。(福田抄)

Zeitschrift für Krebsforschung, Bd. 20, Heft

1/2, SIM 1923

特別會員 二名

通常會員 二百七十九名

大正十二年度ニ於ケル會員ノ入會、退會及死亡ヲ左表ニ示ス。

種別	入會	退會	死亡
名譽會員	四	〇	〇
特別會員	〇	〇	〇
通常會員	二五	三	四

雜事

第一、定期總會 大正十二年四月三日東京帝國大學醫學部病理學教室ニ於テ第十六回定期總會竝第十五回學術集談會ヲ開催ス舉行順序左ノ如シ。

一 開會之辭 本多會頭

一 令旨 子爵 澁澤副總裁

一 庶務會計報告 細野理事

一 授賞論文授與式

一 議事

一 學術集談會演說(四十二題)

○雜報

一 閉會之辭 土肥副會頭

第二、評議員會 大正十二年二月五日評議員會開催協議事項左ノ如シ。

一、定款改正ニ關スル件、

一、資産變更ニ關スル件、

一、名譽會員推薦ニ關スル件、

一、定期總會竝ニ學術集談會開催ニ關スル件、

第三、理事會 大正十二年度ニ於テ理事會開催スルコト四回其協議事項左ノ如シ。

一、資産變更ニ關スル件、

一、定期總會竝學術集談會開催ニ關スル件、

一、密研究費補助ニ關スル件、

一、密研究囑託ニ關スル件、

一、水木氏謝禮ニ關スル件、

一、名譽會員推薦ニ關スル件、

一、定款改正ニ關スル件、

一、治療所助手囑託ニ關スル件、

一、授賞論文ニ關スル件、

一、歐文「密」編輯手當ニ關スル件、

從六位醫學博士 宮川 米 次氏

○名譽會員推薦 本會定款第十三條ニ依リ本會會頭ヨリ
左記兩氏ヲ本會名譽會員ニ推薦ス、

大橋新太郎氏

安田善次郎氏

○第十七回定期總會及第十六回學術集談會開催ニ關スル
件、

來ル四月六日午前十時ヨリ 大阪市大阪醫科大學病理學
教室ニ於テ本會定期總會並ニ學術集談會ヲ舉行ス 但集談
會ハ日本病理學會ト合併ニテ開催スルコトニセリ。

大正十二年度庶務報告

○開 會

定期總會 壹回。學術集談會 壹回。

評議員會 壹回。理事會 四回。

○會誌發行

業報「稿」第十七年自第一冊 四 回(邦文)
至第四冊

○寄附金

總額壹萬五千五百拾圓也

右寄附者芳名ヲ左ニ記ス、

田 島 道 治殿

男爵 古河虎之助殿

奧田 永 吉殿

三菱合資會社殿

男爵 益 田 孝殿

安田善次郎殿

阿部喜市郎殿

肥 田 八 重殿

服部金太郎殿 侯爵

男爵 三井八郎右衛門殿

磯 村 豐太郎殿

鹽田 廣 重殿 男爵

本多 忠 夫殿

木村 德 衛殿

土肥 慶 藏殿

○會 員

名譽會員 二十一 名

鹽原 又 策殿

西脇 濟三郎殿

森村 豐明會殿

大橋新太郎殿

橫山 信 毅殿

佐 藤 三 吉殿

下飯坂長政殿

後藤風雲堂殿

鍋 島 直 映殿

若 林 英 一殿

百 瀬 一 一殿

高 木 喜 寬殿

稻 田 龍 吉殿

長 與 又 郎殿

佐々木隆興殿

- 一、研究補助費追加ニ關スル件、
- 一、萬國聯合癌研究會總會ニ出席者囑託ニ關スル件、
- 一、ウルツブルグ、レントゲン記念室建設寄附金贈與ニ關スル件、
- 一、癌研究員囑託ニ關スル件、
- 一、大正十三年定期總會並學術集談會開催ニ關スル件、

- 一、本會支部設置ニ關スル件、
- 一、中元手當ニ關スル件、
- 一、本年度優秀論文審査委員囑託ニ關スル件、
- 一、大正十二年度寄附金受領ニ關スル件、
- 一、大正十二年會費徵收ニ關スル件、
- 一、本會役員逝去ニ對スル弔辭ニ關スル件、
- 一、大正十二年度癌研究費補助ニ關スル件、
- 一、大震災ニ遭難セラレタル役員ニ見舞狀贈呈ニ關スル件、

以上

第四、第十五回學術集談會授賞論文審査委員トシテ左ノ諸氏ヲ囑託ス。

第五、名譽會員推薦 本會定款第十三條ニ依リ左ノ諸氏ヲ名譽會員ニ推薦ス。

今村 繁 三君
醫學博士 岸 敬二郎君
醫學博士 田 島 道 治君
醫學博士 和 田 豐 治君
第六、癌研究事業費 大正十二年度ニ於テ本會癌研究補助規程ニ依リ補助セラレタル金額及氏名左ノ如シ。
總計金壹萬七百五拾四圓拾錢也

(一)補助費ヲ受ケラレタル者

醫學博士 山 極 勝 三 郎君
醫學博士 藤 浪 鑑君
醫學博士 佐 多 愛 彦君
醫學博士 長 與 又 郎君
醫學博士 稻 田 龍 吉君
醫學博士 鹽 田 廣 重君
醫學博士 藤 浪 鑑君

通常收入金貳萬七百七拾參圓拾九錢

前年度繰越金參萬壹千六百五拾九圓〇七錢

合計金五萬貳千四百參拾貳圓貳拾六錢

ニシテ之ニ對スル支出ハ

通常支出金貳萬六千四百七拾參圓七拾參錢

臨時支出金貳百貳拾圓

合計金貳萬六千六百九拾參圓七拾參錢

ナリ由テ之ヲ收入ヨリ控除シ

差引金貳萬五千七百參拾八圓五拾參錢

其内 興業債券額面金壹萬圓、金九千五百五拾

圓王子製紙社債額面金貳千圓、金壹千八

百四拾圓ヲ算入ス

ヲ翌年度へ繰越シテ決算ヲ了ス、

財産目錄

總計

金貳萬五千七百參拾八圓五拾參錢也

内 譯

特別當座預金（森村銀行）金壹萬貳千六百九拾九圓九拾

參錢

〇雜報

振替貯金（局） 金壹千六百四拾八圓六拾錢

有價證券（森村銀行保管）金壹萬壹千參百九拾圓

内興業債券額面金壹萬圓、金九千五百五拾圓

王子製紙社債額面金貳千圓、金壹千八百四拾圓

右ノ通り

一、收入支出決算ノ詳細及財産ノ現況ヲ別表ニ示ス

貸借對照表 大正十二年度

借方

特別當座預金（森村銀行） 一一、六九九、九三〇

振替貯金（局） 一、六四八、六〇〇

有價證券 一一、三九〇、〇〇〇

内 興業債券額面金壹萬圓、九、五五〇、〇〇〇

王子社債額面金貳千圓、一、八四〇、〇〇〇

本年度收支不足金 五、九二〇、五四〇

計 三一、六五九、〇七〇

貸方

前年度繰越金 三一、六五九、〇七〇

ニ東京區裁判所ニ於テ左記事項登記申請ス

一、理事 鹽田廣重

大正十一年十一月二十四日東京市本郷區弓町一丁目十

番地ニ住所移轉ス。

二、理事左記ノ者ハ何レモ任期満了ノ處定款ノ規程ニ

依リ總裁ヨリ更ニ理事タルコトヲ囑託セラレ大正十

二年四月七日各重任ス

理事長 長 與又郎

理事 細野 順

理事 佐々木隆興

理事 稻田龍吉

理事 鹽田廣重

三、理事左記ノ者大正十二年九月八日各重任

理事 高木喜寛

理事 木村德衛

第二、癌研究員囑託 大正十二年七月醫學博士山極勝

三郎君ニ癌研究員ヲ囑託ス

第一、特志家ノ寄附 大正十二年度ニ於テ新ニ寄附ヲ

申込マレタル諸氏左ノ如シ

總計金壹萬四千八百圓也

第四、腫瘍治療所開設 大正十二年一月ヨリ小石川區

東京帝國大學醫學部分院ニ於テ一般該患者ノ診療ヲ開

始ス

右診療成績ハ次年度ニ詳細報告スベシ。

〇大正十二年度會計報告

說 明

一、大正十二年度ニ屬スル收入ハ

男爵	田島道治殿	男爵	安田善次郎殿
益田孝殿	奥田永吉殿	横山信毅殿	佐藤三吉殿
侯爵	鍋島直映殿	下飯坂長政殿	肥田八重殿

第四項 有價證券利子

八四二、五〇〇

第一目 興業債券利子

六〇〇、〇〇〇

第二目 王子社債利子

一六二、五〇〇

第三目 同上割増金

八〇、〇〇〇

第五項 雜收入

二〇〇、一〇〇

第一目 會誌賣却代金

一五、〇〇〇

第二目 別刷及附圖代金

一八五、一〇〇

第六項 治療所收入

二、三四七、五〇〇

第二款 前年繰越金

三一、六五九、〇七〇

收入總計

五二、四三二、二六〇

支出之部

科 目

金 額

第一款 通常支出

二六、四七三、七三〇

第一項 研究事業費

一〇、七五四、一〇〇

第一目 研究補助費

九、一二四、一〇〇

第二目 研究囑託費

一、三三〇、〇〇〇

第三目 授賞費

三〇〇、〇〇〇

第二項 集會費

四四四、八九〇

第一目 總會費

一〇九、九七〇

○雜 報

第二目 評議員會費

一三四、六〇〇

第三目 理事會費

一一〇、三二〇

第三項 雜誌費

三、四七八、五六〇

第一目 印刷費

三、一三一、三一〇

第二目 編輯費

一九五、〇〇〇

第三目 郵送費

一〇〇、六五〇

第四目 消耗品費

四一、六〇〇

第五目 雜費

一〇、〇〇〇

第四項 常務費

一、六〇五、五九〇

第一目 人件費

一、四一七、〇〇〇

第二目 諸印刷費

五三、二二〇

第三目 通信費

二七、二九〇

第四目 集金費

二四、九九〇

第五目 消耗品費

一八、七五〇

第六目 雜費

六四、三五〇

第五項 備品費

五五、〇五〇

第一目 圖書費

二七、八〇〇

第二目 器具費

二七、二五〇

第六項 治療所費

一〇、一三五、五四〇

○雜報

計

三二、六五九、〇七〇

收支計算

大正十二年
自一月
至十二月

收入

寄附金

一五、五一〇、〇〇〇

會費

一、〇二五、〇〇〇

預金利息

八四八、〇九〇

有價證券利息

八四二、五〇〇

雜收入

二〇〇、一〇〇

治療所收入

二、三四七、五〇〇

計

二〇、七七三、一九〇

收支差引不足

五、九二〇、五四〇

計

二六、六九三、七三〇

支出

研究事業費

一〇、七五四、一〇〇

集會費

四四四、八九〇

雜誌費

三、四七八、五六〇

常務費

一、六〇五、五九〇

九二

備品費

五五、〇五〇

治療所費

一〇、一三五、五四〇

臨時費

二二〇、〇〇〇

計

二六、六九三、七三〇

收入支出明細 大正十二年度

收入之部

科目

金額

第一款 通常收入

二〇、七七三、一九〇

第一項 寄附金

一五、五一〇、〇〇〇

第一目 經常費寄附金

八〇〇、〇〇〇

第二目 研究費寄附金

一四、七一〇、〇〇〇

第二項 會費

一、〇二五、〇〇〇

第一目 通常會費

一、〇二五、〇〇〇

第二目 特別會費

〇

第三項 預金利息

八四八、〇九〇

第一目 定期預金利息

五九四、二六〇

第二目 當座預金利息

二二八、〇一〇

第三目 振替貯金利息

二五、八二〇

◎會員之
元仕月舉
重ノ場合
ノ會誌ノ
發送其他
ノ通知等

○雜 報

第一目 人件費	二、八八七、三〇〇
第二目 備品費	六、五五六、八七〇
第三目 消耗品費	六八一、三七〇
第四目 雜費	一〇、〇〇〇
第二款 臨時支出	一二〇、〇〇〇
第一項 ウルツブルグ 記念事業寄附	一〇〇、〇〇〇
第二項 震災見舞金	一二〇、〇〇〇
支出總計	二六、六九三、七三〇
翌年度繰越金	二五、七三八、五三〇
支出及翌年度繰越金合計	五二、四三二、二六〇

大正十二年十二月三十一日

監事 男爵 森村 開作
 監事 今村 繁三
 會計理事 細野 順

謹告

◎本年度會費ヲ近日中ニ集金郵便ニ託シマスカラ御不在
 ニテモ御拂込下サル様御取計ヒ置キ下サイ、
 ◎會員ニシテ住所異動ノ場合ハ會誌ノ發送其他ノ通知等

ニ差支マスカラ至急本會事務所ニ御一報ヲ願ヒマス